

越谷市郷土研究会会報第六号

古志加賀

昭和六十三年八月刊

目

次

卷頭言

小島 誠

航空写真で見る越谷の今昔

木原 徹也

研究集録

感想

山崎 善司

六十二年十一月史跡めぐりの記

高谷 良子

奈良・平安時代の越谷
古志賀谷氏終焉に付いて考察
結城使行と春日部備後

宮川 進

戦前戦後の私の思い出

村田 留吉

山崎 善司

六十二年十一月史跡めぐりの記

高谷 良子

木原 徹也
加藤 幸一

報告

名倉 さわ

史跡めぐり及び研究会一覧表

一昭和六十一年度・六十二年度-

高橋 清

越谷市交通安全市民まつりの初参加と

市制施行三十周年記念第十九回市民文化祭について

木村 信次

伊勢地方漫遊旅行・新井秀三郎

鈴木 秀俊

維新の焼打騒動

本間 清利

越谷市交通安全市民まつりの初参加と

木村 信次

第十九回市民文化祭当会出品紹介

越谷市郷土研究会々則

虫追い（川崎神社）

石塚 吉男

編集委員

大相模不動明王瑞像記（大聖寺）

加藤 幸一

会員名簿

江戸時代の越谷宿

木原 徹也

役員名簿

享保六年御鷹揚高札

中村 忠夫

板碑二題

星野 昌治

清藏院山門の龍

本間 清利

光明真言塔（玉泉院）

丸田 富夫

奈良・平安時代の越谷

宮川 進

和讃地蔵（清藏院）

山田 政信

会員自己紹介アンケート

あとがき

石塚 吉男

表 紙

金子 泰岑

巻頭言

会長 小島 誠

古志賀谷第六号を発行するにあたり、多数会員の方より御寄稿を戴き有難く厚くお礼申し上げます。

本会は発足以来こゝに二十余年、この間市内の神社・仏閣の故事來歴を始め、これらの年中行事・伝承家庭内の行事その他を調査して参りましたが、最近は越谷との直接の関係の有無に拘わらず、歴史的文化の向上に役立つものならばとのことで東京を始め千葉・茨城その他の處にもと歩を進めたのであります。

従いまして、これらは、普段の研究の一端であります。原稿を通じて研究の深さとその幅の広さとに、「私」は深く感銘しているところであります。こゝに寄せられましたものには、古きは「古代」の奈良平安時代から「中世」「近世」「近代」と非常に永い時代に渡っております。何卒学校で学んだ歴史書を繙き、時代背景を想像しつゝ読まれることをお奨めします。

尚昔の教科書には、原始・古代といった時代区分はないと思いましたが、氏族政治の始まりの物部氏・蘇我氏より飛鳥・平城・平安時代までが古代、以後、源氏・北条氏の鎌倉時代・室町時代までを中世、更に織田・豊臣時代（安土・桃山）から江戸幕府時代までを近世と区分されていますが、鎌倉以後江戸時代までを封建時代と表している書もあります。御参考までに。

奈良・平安時代の越谷

宮川 進

奈良時代、平安時代といえば、あなたは何を連想されますか。大仏、正倉院、日本書紀、平城京、羅城門、藤原氏、延暦寺、平安京、源氏物語……

た時代です。

そして、その同じ時代に、いま、私たちの住んでいる越谷は、どんな「ようす」だったのでしょうか。

まだ、海の底だった？ とんでもない。見田方遺跡があるではありませんか。見田方は、古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）のもので、そのあとが奈良（飛鳥・白鳳を便宜上含め）・平安時代（12世紀後半まで）です。

越谷が、水の中だったというのは、もつと低地の草加や、東京都足立区などで縄文土器が見つかっていることからみて、1万年前から紀元前3世紀まで、約8千年もつづいた縄文時代の間のごく、しばらくの時期だったと考えられます。それ以後は、潟湖・沼や、微高地・砂丘・湿地などのいりまじった複雑な地形でした。住めるのは、一部分だけだったのでしょうが、そこに積極的に住みついた人たちとは、たしかにいたのです。

1. 越谷における、奈良・平安時代の遺跡

いま、市内における、もとの自然堤防（河川が、自らの運んできた土砂を流れの両端に堆積してつくる堤防）のことである畠地を、注意ぶく見てあるきますと、次のように奈良時代、平安時代の遺物である土師器（はじき）や須恵器（すえき）の破片がみつかります。

地図の番号	所 在	遺 物
1	大竹・西浦 大道・上手	土・須
2	小曾川・居 野島・内	土・須
3	船渡・上川原・下川原	土・須
4	東越谷3丁目	土・須
5	東越谷7丁目	土・須
6	大成町1・2丁目	土・須
7	大松（清淨院内） 増林・下前	土師質土器
8		
9		
10		
造物欄	土は土師器、須は須恵器	

2. 遺跡の分布から推定されること。

遺跡の所在は別図のようになりますが、これにより、次のようなことが考えられます。

①これらの遺跡は、ほぼ、現在の古利根川と、元荒川の流れに沿った自然堤防上にあり（大竹・西浦は江戸時代に入工的に流路をかえられるまでの元荒川の自然堤防上にあり、同様に、東越谷

3丁目と7丁目は、江戸時代に改修されるまで、花田を迂回していた同じ元荒川のそれにのっている）、見田方遺跡が現在の河道から相当に離れているのにくらべると、この奈良・平安時代には、ようやく、各河川の流れが安定化しており、人々は、生活用水が求めやすく、住まいをたてられる高台であり、後背（こうはい）湿地（堤防のすぐ下にできる低湿地）を田として耕作するのに便利な、このような場所に住みついて、どんどんと、生活圏をひろげていったのではないでしょうか。

②当時の河川は、文化の流入する「道」でした。いま、「道」というと、陸上のそれをすぐ、思いうかべますが、昔は、運送上も便利な「河川」が、私たちの想像する以上に利用されていました。文化の中心である平城京、平安京の文化は東海道ぞいに、いまの神奈川に入り、そこからは、舟で東京湾を横切って、江戸川区あたりにつきます。そのあとは、（元）荒川、（古）利根川をさかのぼって、上流へ運ばれました。越谷の、これらの遺跡は、その途中の通過点、中継点であつてのちに、街道ぞいに集落ができたように、河川に沿つて集落が発生したものとも、いえるでしょう。

③また、市内を流れる河川としては、もう一つ、草加市との境を区切る綾瀬川がありますが、現在のところ、この川の流域の当市側には、遺跡は発見されていません。

上流の岩槻市の笹久保新田では、たまたま、溝を掘った際に、完全な形で弥生土器が出土しており、対岸の草加市では古墳時代の遺跡があるなど、きめつけるのは大変に危険ですが、この川の流路は南北に、東西に揺れうごいて、自然堤防が発達しなかつた

ため、当時の人々には定住がむつかしく、すくなくとも、大規模な集落はなかつたかと思われます。

3. 越谷周辺における同時代の遺跡

周辺におけるこの時代の遺跡として、学術調査が行なわれたものに、春日部市の浜川戸遺跡があります。

これは東武野田線八木崎駅東600メートルの春日部八幡神社東側、元隅田川の自然堤防上にあるものです。昭和55年から3次にわたり調査されました。

遺跡の内容としては、竪穴住居址10軒、土壙墓90基、掘立柱列などであり、「平安時代の集落構成と、これにかかる土壙墓群のあり方が注目される」と、新編埼玉県史資料編3(59・3刊)は記しています。

4. 越谷と条里制

奈良・平安時代をとりあげて、条里制にふれないわけにはゆきませんが、越谷に条里制がしかれていたかについて、今、論ずるには材料が乏しいのではないでしょうか。

四条、八条など、条里制の遺存地名と思われるものもたしかにありますが、間久里、大里まで含めて、「説」を補強するのは、ちょっとと苦しい感じがします。

明治時代の地籍図や戦後の航空写真だけで土地割を推定するのも危険です。

考古学的調査により、遺跡と土地割の関連が実証されるのを待ちたいと思います。

5. 当時の人々のイメージ

この時代、都の貴族たちは、みやびやかな生活をおくっていたのでしょうかが、地方の人々の暮らしは、まだまだ、貧しい、苦しいものだったと思われます。

越谷市内に散布している土器片をみると、前の時代の見田方遺跡のものと、ほとんど、かわりません。

住まいも、春日部市の浜川戸遺跡のもののように竪穴住居だったのでしょうか。

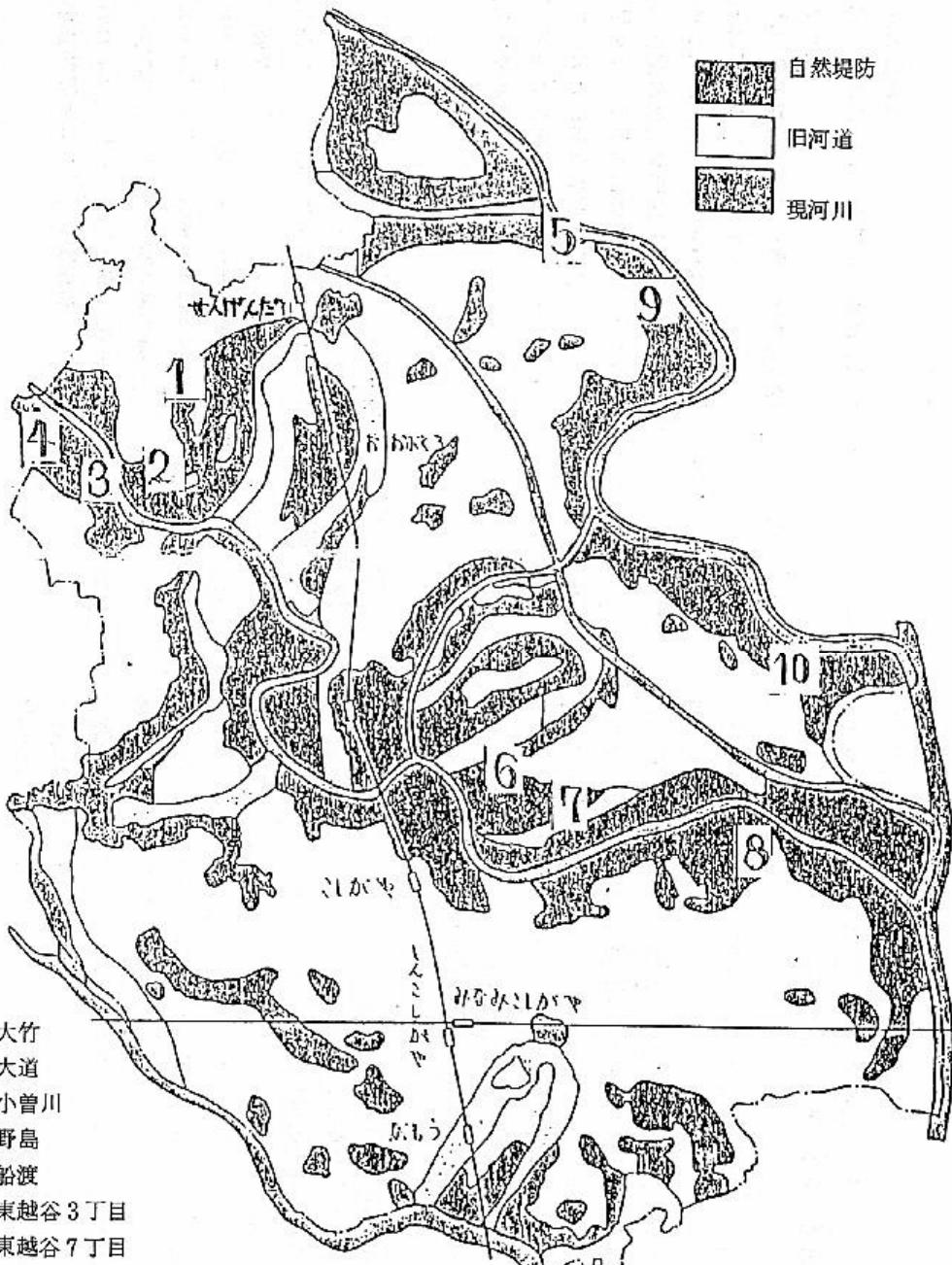
人々は、大河のそばの自然堤防のうえに、かや葺きの住居をつくりました。一坪何百万という地価高騰にわずらわされることなく、好きなところに家をつくることはできたでしょうが、きびしい自然とのたたかいがありました。急な洪水には命を賭けねばならないすまいです。

そして、河を背にひろがる葦原を刈りとり、水路をつけて排水し、水田をつくり、米の生産を、毎年、ふやしてゆきました。泥ぶかい田に全身をつからせながらの作業だったことでしょう。排水路をつくっていった木の樋がこわれ、水がひかない田ができました。このあたりでは、灌漑することより、排水することがむつかしいのです。水をひかせなければ、折角の田が台なしになってしまいます。

泥と格闘しながら、樋を修理するのに一日かかってしまいました。

ようやく、水が流れるようになった排水路を、男は満足げにみつめました。身体は泥まみれ、青い泥は、かわいてヒビをつくりながら、まるで皮膚そのものです。

越谷の奈良平安時代遺跡



- 1 大竹
2 大道
3 小曾川
4 野島
5 船渡
6 東越谷3丁目
7 東越谷7丁目
8 大成町
9 大松
10 増林

それを重たそうにしながら、男は排水路に沿つて河へ出ました。清流に身体をくぐらせて、泥を洗いおとします。もう、西の空に金色の太陽が沈んでゆくころです。

「お父さん、早く」二人の子供が堤の方で叫びます。二人とも、いたづら坊主です。母親が外のかまどで炊いた夕食を、早くたべたいと、今まで、ダダをこねていたのです。

子供たちは、河へかけおりてきました。とびつく子供たちの手を両手にとつて、男は堤をのぼります。

河の流れは、もう沈みおえようとする太陽の残光で金色にそまりながら、ゆっくり、ゆっくり流れています。

堅穴の中で、素焼きの土器の上に盛られた、でも温かい、四人の食事がはじまります。

紫式部や清少納言などのくりひろげた都の貴族文化がはなやかなりし頃、この越谷で、人々は、たくましく生き、私たちの生活の原点をつくってくれたのです。

参考図書

- 新編埼玉県史資料編3(59・3 埼玉県刊)
- 越谷市史第1巻(50・3 越谷市刊)
- 中川低地遺跡認調査報告書(56・9 草加市史編さん室、八潮市史編さん室刊)
- 岩槻市史考古資料編(58・3 岩槻市刊)

古志賀谷氏終焉についての考察

山崎善司

第一章 古志賀谷氏の出自

1. 平安より吉野朝期迄

平安中期より鎌倉初期にかけて武士団の発生と、勃興により郡司の勢力は強大なものとなつた。

古利根川沿岸には秀郷流藤原氏の末裔下河辺氏・大河戸氏・清久氏・高柳氏や、紀ノ氏流の春日部氏等が席捲して居た。

綾瀬川と元荒川に沿つた地の騎西郡には、桓武平氏千葉氏流で武藏七党の一つ、野与党を称する、萱間・多名・多賀谷・道智・鬼窪・南鬼窪・白岡・黒浜・佐那賀谷・江ヶ崎・金重・渋江・箕勾・神倉・柏崎・横根・須久毛・古志賀谷・大相模・八条の諸氏が、それぞれの入植した地の地名を名字に冠して、騎西郡に点在し開拓人となつた。

これら野与党諸氏の内、地頭職補任されて居たのは渋江光衡である。

渋江光衡(平)は平安末期より鎌倉初期に生存(一一七〇~一三〇)した人物と推量出来る。

この野与党各氏の中に、箕勾氏より出たる一族として「古志賀谷氏」が見えてくる。

左の系図の如く、「古志賀谷氏」が「為基」を初祖として見え、

名字に越ヶ谷郷名を冠している。

この「為基」が、開発名主か地頭であったかは定かでは無いが、八条・大相模氏等と共に、波江一族の勢力が南進している事は事実で、各郷の指導者であった事が想定出来る。

この「為基」の生存年代を推定するには、千葉大系図と、前出八条光衡の事項と、越ヶ谷御殿町にある建長元年（一二四九）の板碑が重要であろう。

この板碑は岩槻市笠久保須久毛善念寺跡の、寛元元年（一二四三）、記板碑に次ぐ南埼・北葛中最も古の板碑で、この板碑が「古志賀谷二郎為基」の建碑とするのは早計ではあるが、

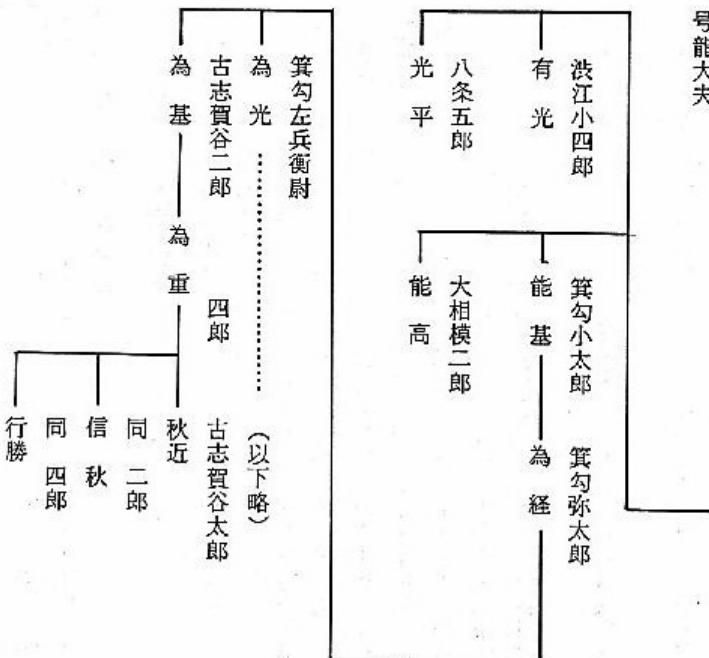
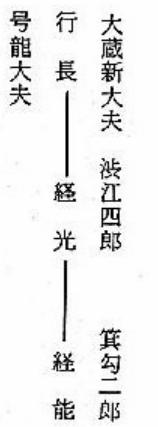
右の系図から判断すると、大体寛喜・弘安（一二三〇～八七）の時代に生存した人物と推量する事が出来る。

御殿町には、建長板碑に次ぐ貞和三年（一三四七）や寛正六年（一四五五）も同所に所在する。（近年その所在が不明となつてゐる）

その他、御殿町以外で発見された板碑には、久伊豆神社の嘉曆元年（一三二六）と、「瓜の蔓」に記載されているが、所在不明の建武二年（一三三五）があるが、何れも建長板碑のある御殿町とは隣接地である。

これらは何れも「古志賀谷氏」館跡として、生活の痕跡を知る資料である。

千葉大系図（抄）



第二章 古志賀谷氏館跡は何処に

1. 中世武士の拠点

先ず「古志賀谷氏」が、越ヶ谷の何処のあたりに居住したのだろうか。

埼玉東部地区の板碑は、概して自然堤防状の微高地か、その周辺の田畠中の小墳に存在している。

越ヶ谷の地では、建武・嘉曆・貞和・文和等鎌倉より吉野朝期までの間の板碑は、越ヶ谷本郷と比定出来る地以外からは発見例を見ない。

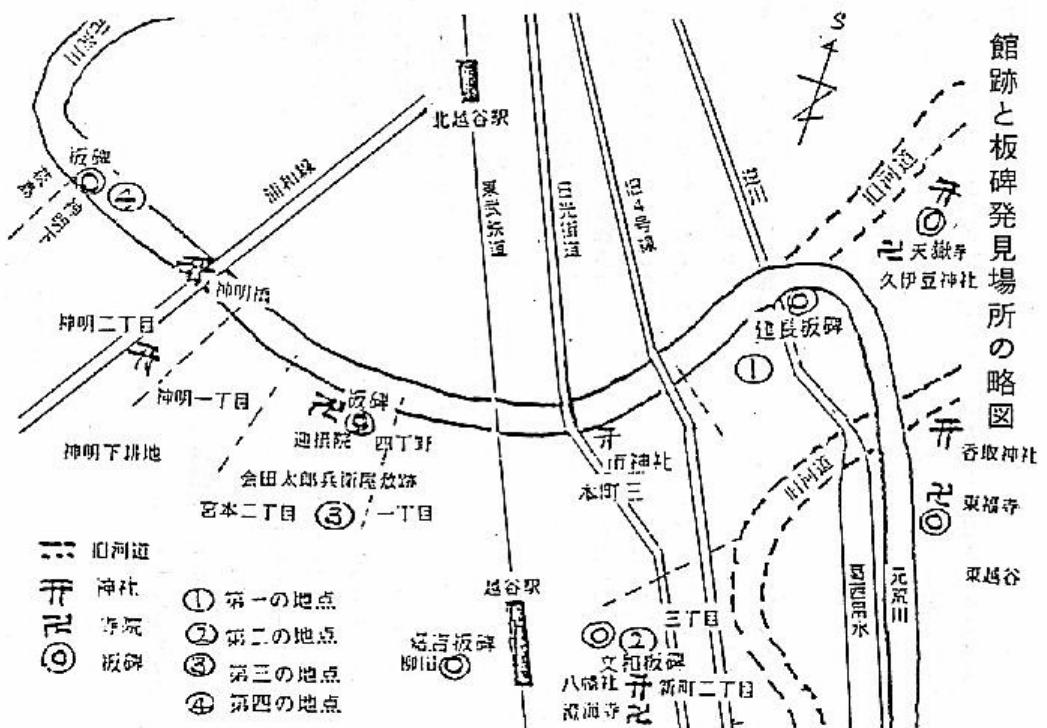
即ち、自然堤防状の微高地であると共に、越ヶ谷で最も地盤の高い御殿町と、その周辺での類似の地点に限られている。

下図の如く、神明町より流路が東北に向かい、その先が大きくなっている。この蛇行によって、上流よりの流出土砂は必然的に迎接院・御殿町・天獄寺・久伊豆神社にかけての河道に沈堆する。

特に大雨の後等には多量に堆積する、これが冬期の偏西風によつて、自然堤防上に吹き上げられる。

永い年月の間に、自然嵩上げ状況が続き、微高地とこれに続く耕作可能な畠地が成立する。

以上の事柄を加味し考察して、「古志賀谷氏」館跡を推測すると、太郎・二郎・四郎の何れかは、定かでは無いが、次の如くと成る。



2. 第一の地点

御殿町を第一の拠点として挙げ度い。

こうして出来た河川沿いの微高地と「上畠」地に居館を構え、北側が河川で防御に適し、南が開けて耕作に適し生活し易い地である。

この地の後方には產土神の久伊豆が座して居り、天嶽寺が隣接地にあり、この「御殿町」に居館を構えるのが最適地であった事である。

その東北端から建長板碑が発見されている。

又、同所からは、貞和三年（一三四七）・寛正六年（一四六五）も発見されているので、この地が「古志賀谷氏」の居館跡と推定出来、それ等の生活の痕跡を見る事が出来る。

3. 第二の地点

新町二・三丁目南町並で、八幡神社と澄海寺跡を含む地を、第二の地点として挙げ度い。

第一の地点と地続きで、元荒川が花田地区で大曲折して西に向かって来て、突き当たり右折した所、つまり新町二・三丁目の日光街道南側（南町並）の地に、八幡神社・澄海寺跡がある。この神社には文和二年（一三五三）の板碑が御神体として所蔵されている。

この地には、取り水口も見られ、これらの地を取り囲む構え掘

の遺溝も見る事が出来、「古志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、館跡としての生活の痕跡を見る事が出来る。

* 澄海寺の存在は、今は廃寺となっているが、新編武藏風土記

稿や越ヶ谷瓜の蔓に記載されている。

4. 第三の地点

第三の拠点としては、今は川の中と成ってしまった神明神社と四丁野（現宮本町二丁目）迎撫院と、その隣接地に在る会田太郎兵衛屋敷跡を挙げ度い。

取り水口や構え掘の遺溝を見る事が出来、一方が川で防御し易く、神明神社と越谷山神宮寺迎撫院とが在る。寺院境内より板碑が発見され、後背地も広く開けて館としての立地を備えている。

*迎撫院には応仁元年（一四六七）・文明十七年（一四八五）・永禄七年（一五六四）・他が所蔵、又、最近墓地の改装の際に享禄二年（一五二九）・他の板碑も発見されている。

又、四丁野の隣に神明下・神明下耕地と言う地名が残る。

ここは、往時「五里四方には、これより立派な神社は無い」と言われた程の立派な神社があつたが、元荒川の流路が変り次第にその敷地が流れに削られて、今は川の流れの中となってしまった。

その後、神明橋の橋桁の所に、以前は川に出津があり、神明宮があつたが今は同町内、浦和県道脇に移転となり、その痕跡をのみ止めて居る。

この神明神社と迎撫院との距離が約九百米あるが、神明下村の立地を考える時、天嶽寺と久伊豆神社の参道入口と同じ様に、入口が並んで居り、長い参道の奥に神明宮が座して居たものと考えられる。

尚、迎碕院は越谷山神宮寺と云う寺号を持ち往時の神明神社との密接なる関係を物語る寺号である。

この迎碕院と会田太郎兵衛屋敷跡を含めたる地域が「吉志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、どちらかの屋敷跡と思われるるのである。

第三章 永享の乱と結城合戦

1. 永享の乱

室町時代には、上杉氏の管領職就任により、以後その大半が上杉氏の領有下にあった。

永享十一年（一四三九）將軍足利義教と関東公方足利持氏との確執に端を発した、永享の乱は、足利持氏の滅亡により終るが、持氏の滅亡により関東管領職の上杉氏は、武藏領有を確固たるものにした。

当時上杉氏の一族、扇谷上杉氏は、江戸・川越・足立・騎西に所領を有するに至った。

2. 結城の合戦

永享十二年（一四四〇）七月、持氏の家臣、下総幸手の「一色氏」が北一揆を催して村岡河原（熊谷市）にて上杉と合戦したが破れ、結城城に逃がれる。

結城氏朝は持氏の遺児春王丸・安王丸・永寿王丸の三児を（日光に難を避けていたもの）、結城城に迎え入れて籠り、結城合戦が始まる。

これにより越谷市の東半分（下総国）は結城方として戦い、西半分（武藏国）でも又、合戦が有り、騒然と成り混乱したである事が窺われる。

その後一年間、十万の大軍に包囲されながら良く戦ったが、遂に春王丸と三人の遺児が、城脱出の際に捕えられ、京に送られる途次に切られたが、永寿王丸は幼児の為に辛くも一命を助けられた。

氏朝は自害して落城、かくて結城合戦は終る。

世の中が一応平和となるが、戦いに破れた者の家族の苦惱を物語る、悲しい話が市内大松の清淨院縁起書「新方領六ヶ村、栄広山淨土寺清淨院由緒著聞書」中に、この辺の事情が窺える記述が残されている。

@この合戦の翌年、嘉吉二年（一四四二）の板碑が柳田（現赤山町六丁目）の忌田の小塚に在ったが「昔戦いがあり、戦死者を葬った所」と云われている。（結城合戦の前哨戦か？）

@又、越ヶ谷本町三の市神社の棟札に、嘉吉二年記を見る事が出来る。（新編武藏風土記稿）

* 市場に関する神社が建てられた事は、結城合戦の後、世の中が治まり、生産が上り交易の為の市が盛んになつた事の証拠である。

3. 古河公方成氏

永享の乱後十五年、辛くも命を預けられた、永寿王丸は信濃に隠れて成人した。一方鎌倉は荒れ果てた儘であった。

主の無き鎌倉では、將軍家に、成人した成氏を鎌倉の主として迎え度いと願い出た。許されて鎌倉に帰った成氏は、鎌倉公方となる。

然るに、足利成氏と上杉氏とは確執が絶えず。

庚正元年（一四五五）成氏は、事敗れて鎌倉を追われ、下総国古河に退き築城して構える。

これ以後古河公方と称す。これに対し上杉氏は、太田道満に江戸を、川越を上杉持朝に、最前線拠点の岩槻は、太田道真に、それぞれ修築城を命じて、これに對峙した。

足利成氏の古河動座によつて武總の国境近い、「越ヶ谷郷」は急に騒然となり、平和な郷村は一変して戦場と化したのかも知れない。

5. 板碑は何を語るか

越谷市内神明下の元荒川の河床より発見された、庚正三年を上限として、寛正・応仁・文明・明応八年迄四十数年間に渡るおびただしい供養の板碑は、只単に偶然と言えるであろうか、何かその辺の事情と関係あるものと考えられないだろうか？

当時「古志賀谷氏」の末裔も当然この地に居住して居たろうし、この上杉勢太田氏の進出に、何の抵抗も無く隸属したであろうか？

これらの事を川の中から発見された板碑は何も語らないが、そくなる。

4. 室町時代の板碑

吉野朝期より室町時代になると、同時代記の板碑の発見例が多くなる。

④本町三の市神社の棟札に嘉吉二年記が残されている。（新編武藏風土記稿）

⑤四丁野（現宮本町二）迎撫院には、応仁元年（一四六七）・文

明十七年（一四八五）・永禄七年（一五六四）が所在し、最近墓地より享禄二年（一五二九）・他が発見された。

⑥神明町と荻島地区との境、元荒川の河床より発見されたものに庚正三年（一四五七）を上限として寛正二年・四年・七年・応仁元年・三年・文明三年・五年・七年・九年・十三年・十七年・十九年・明応八年（一四九九）に至る板碑が数十枚陸続と引上げられ、尚、未だ水中に沢山ある模様である。

参考資料 6. 篠原稻荷神社縁起書
寛正二年（一四六一）九月、足利成氏と上杉方と越ヶ谷野に於

て合戦、上杉方勝利す。

第四章 「古志賀谷氏」の終焉

* 越谷市市史編纂の際に、この合戦の記述は他の文献には、何処にも見当たらぬ為に、不採用となつた資料である。

その後、元荒川の川洲より出土したおびただしい板碑が発見された。初めに「誰かが川に捨てた物」と判断してしまつた為に、永く等閲視されてしまつたが、この記述を裏付ける唯一の重要な資料となる板碑では無いだろうか。

* この板碑は発見当初、「誰かが川に捨てた物」として取り扱われた為に、永く市の資料館に埃にまみれていたものである。

* 板碑発見場所は、神明と荻島の村境で元荒川の川洲であるが、川が急に曲流している場所で、一番流れの強い所であるが、何故かそこだけが浅い川洲になつていて不自然な場所があるので、「誰かが川に捨てたのだろう」と言われても、無理からぬ場所である。

この板碑の発見者、神明町二丁目235「桃木源之助」氏は、当時の事を次の如く語つている。

* 『投網で魚取りをしている時に、板碑が網に懸かつた、引上げて見ると後から後から沢山出て来るので、迎撃院に届けた。川に潜ればまだ沢山有る』と言う。

又、『その辺では、時々人骨らしき物が懸かる時があり、足の骨と分かる物もあった』と言う。

1. 古志賀谷氏の台頭

平安時代末より鎌倉時代初期にかけて活躍した、野与党の一族として越ヶ谷に分派し、開発播拋した「古志賀谷氏」は、その歴史上にはその存在すら残さず、その館跡と思われる地に板碑を残すのみにて、往時を語る者も居ない儘に消滅して行つた。

2. 古志賀谷氏の滅亡

「古志賀谷氏」が鎌倉初期から室町期まで、約二百年間越ヶ谷の地に播拋して居たものが、何故、何時、この世から消滅したのだろうか？

この問題に付いては、古文書や歴史的な記述等の、何処にも資料が見当たらないので、一度も解明された事が無い問題である。

「古志賀谷氏」の消滅の時期に付いては、その資料の稀薄な為に論議に成らない事も確かである。

然し乍ら、前記の如くに中世武士の拠点を列挙し、その一致点を見る時、その存在が明確に浮び上がり、推定する事が出来る筈である。

すれば、今はその存在すら知る由も無き「古志賀谷氏」の滅亡時の真相も、その痕跡を辿る事になり、浮上させ解明する事が

出来るのでは無いでしょうか。

以上の如き仮説を立てて、「古志賀谷氏」に関係のありそうな資料を列挙して見た訳である。

イ、滅亡の地は

結論的に見て、「古志賀谷氏」の終焉の地は、神明町と萩島地区との境で、今は元荒川の中の川洲となってしまった所であると想定する。

恐らくは、「かつては合戦塚が在って、その塚に戦死者の供養の為の石の卒塔婆が上げられて居た。

その塚が今は川の中となり、塚の土は川の流れに削られ、板碑は重いので、その場に残り網に懸かって曳上げられたのが、この板碑である」と推測出来ないだろうか？

ロ、滅亡の時期は

滅亡の時期は、「寛正二年九月、越ヶ谷野に於ける合戦で敗北した時」と言う事になる。

* 小田原北条記では六月と見える。

これ又、資料が稀薄であり、然とは断定出来ないが河床から発見の板碑の年記の上限から見て、庚正三年と言う事になるが、庚正二長禄（寛正元年）までは、上杉方は休勢造りの期間であり、事実、負け戦が多かったが、寛正二年より攻勢に転ずる事になる。

当時の情勢から判断して、東松山市の箭弓稻荷神社の縁起書の『越ヶ谷野に於て合戦、上杉方勝利』の記述を取るならば、寛正二年（一四六一）九月が、古志賀谷氏の終焉の時期と見られるが

又、小田原北条記によると、六月上杉房頭軍二万余騎、成氏軍七千が、越ヶ谷野にて激しく戦い、両軍多数の戦死者を出し、成氏軍敗走すると記されているので、六月とも言える。

「古志賀谷氏」の滅亡の時期と思われる、庚正～寛正年間に於ける事件を列挙して考察すると、

@ 岩槻築城の庚正三年（一四五七）より、足利成氏退治が始まる。

@ 同年四月渋川義鏡を武藏国司として蕨に下向させ、上武相の諸將に下知して、『成氏を討取り、上杉氏を関東管領となし、関東を治むべし』との御教書が發せられる。

@ 同九月長禄と改元。（一四五七）

@ 長禄元年十二月將軍の弟政智を還俗させ、伊豆掘越に下向さす。掘越公方と称される。

@ 長禄三年十月、上杉勢大田庄に乱入、久米原須賀・小野袋にて合戦。上杉教房討死、上杉勢・成氏方一色氏の城高野城を攻める。

@ 寛正二年（一四六一）六月、越ヶ谷野に於て上杉房頭軍二万余、成氏軍七千にて激しく戦い、両軍多数の戦死者を出し、成氏軍敗れて古河に逃げ帰る。（小田原北条記）

@ 寛正二年（一四六一）九月、成氏と越ヶ谷野に於て戦う、上杉方勝利。（箭弓稻荷神社縁起書、前記述と同一の戦いと思われる）@ 同十月、上杉勢、俄に高野の浅間台城を急襲、放火。

以上当時の事件を列挙して見ると、ほぼ寛正二年六月か、九月

の越ヶ谷野に於ける戦により「古志賀谷氏」が滅亡したものと推定する事が出来るのである。

「古志賀谷氏」の終焉の地と思われる地より、多数の板碑が発見された事は、板碑は何も語らないが、一族の怨念がそうさせたのではなかろうか。

ともあれ、鎌倉初期に野与党の一族として、越ヶ谷の地に興り播迦した古志賀谷氏は、時代の流れの舵取を誤らずに、良く中世の変転極まり無き世を、生き抜いて來たが、上杉氏と古河公方成氏との確執の渦に巻き込まれ、遂に、扇谷上杉の家臣、太田道灌に攻められ滅亡し、この世から消滅してしまったのでは無いだろうか。

今、「越ヶ谷氏」を名乗る家は関東に十指に余る程度にて、一様に先祖の地は結城と言う。

結城市的孝顕寺に、「越ヶ谷氏」名の墓を見るが、この一族が「古志賀谷氏」の末裔であるか否かは今の所不明である。

合掌

遠い見知らぬ旅先で自分の住む所や知っている場所と同じ地名を見付けたとき、大抵の人は懐かしく親しみを覚えるに違いない。そして、遠く隔てた土地になぜ同じ地名が付いたかに疑問を持つて、その土地の歴史や地形、地質等の自然環境に何か共通性があるのではないかと考えることだろう。

地名は土地に刻まれた歴史と言われ、その土地の歴史を知るうえで重要であるばかりか、一つの地名がキッカケとなり、その土地に愛着を深めることもある。ことにその地名が、自分にとって忘れる事の出来ない重要な体験や記憶に結びつく場合は一層感動的な思いでその地名を聞くに違いない。

埼玉県春日部市内に「備後」という所がある。市の南部、旧日光街道沿いの農村地帯である。江戸時代の記録⁽¹⁾によると、村高一〇七四石、戸数一五六戸、東西一四町、南北一七町ばかりの水田耕作を中心としたなんのへんてつもない村である。

ところで、江戸時代の元禄期、下総国結城の領主水野家の家老水野織部長福は、江戸から結城への途中この備後村を通行したとき、深い感慨を持ってその地名を耳にしたことを、その紀行文「結城使行」に記しているが、調べてみるとやはり水野長福にとっては「備後」という地名は忘れられない地名であることが判つた。

結城使行と春日部市備後

— 地名保存の意義を考える —

木原徹也

一 はじめに



二 結城使行

下總国結城は、鎌倉時代以来の名族結城氏が支配してきたが、

天正十八年（一五九〇）徳川家康の次男秀康が結城晴朝の養嗣子となり、十万一〇〇石を以って封じられた。その後、慶長五年（一六〇〇）に秀康は越前福井へ転封となり、その後、久しく大名が封じられることはなかった。ところが元禄十三年（一七〇〇）能登西谷にあつた水野勝長が結城に移封され、同十六年加増のうえ結城に築城を命ぜられた。この為、水野家の家老水野長福が城地検分の役目を持って、元禄十六年二月に江戸を出立して、日光街道経由で小山に到り、ここより脇道に入り結城に到着した。この間、水野長福は道中見聞したこととしたため「結城使行」と名付け世に残した。水野長福は、詩歌に長じ風流心のある人物であり、道中において見聞した山河・社寺・地名・人々の暮しぶり等を筆まめに記録し、元禄期の日光街道の様子を知る貴重な資料となつてゐる。例えば草加・越谷の間を流れる綾瀬川付近の模様を川あるによりて何川ぞと問わせけるに、大河と申すといふ

に老人は あやし川といふ。又老人あやせ川とも答ふ
鷺いかに 氷の隙を あやし川

此川をむかふへ越へて道のゆく手右も左も川水さしはさみて流悠々としていと興あり。かも村此所溝川の上に家を作りかけしはあぶなく見ゆ。爰の名物とて道に焼米をひさく。たた加茂村にてはあらず蒲生也といふおのこもあるに、いやいや加茂村と蒲生は一村の内にて名をわけしといふ。いづれが是なるぞ

道ぞ永き 日にやま糸を 加茂蒲生

板はしをこへて一里山あり。小板橋を越て右にせいそいんとかいう寺あり。

と述べている。⁽²⁾ これは現在の越谷市蒲生愛宕町付近の地理と良く一致し、特に綾瀬川を越してすぐ一里山が在るとの記録は、昭和六〇年三月県の文化財に指定された蒲生愛宕町の日光街道の一里塚を発見するうえで有力な資料となつた経緯がある。⁽³⁾

さらに、越谷市内の下間久里のあたりでは

左保姫や 空耻かしき 下まくり

とよみ、現代の人と同様、水野長福も「下間久里」という地名に對して奇異な印象を持ったことがうかがえる。

三 水野十万石

このように、水野長福は江戸蕃邸から千住・草加・越谷と日光街道の模様を旅行者の目でわりと客観的に描写しているが、越谷を過ぎ、現在の春日部市内に入り、このあたりの地名を“備後”と言ふと聞き、

小板橋あり。びんご村といふ家村あり。我故國の名にひとしければ草も木も、若は我をしりたるやとえりつくろひせきはらひする心になりしをいかに実も我七歳の昔より四拾有余の年迄すみなれ、殊に毎日忘れ奉らぬ父内蔵進勝寿の命(お)をわられし國なれば尚なつかしき心にぞなりにける。

香に匂へ 花そむかしを 備後村

この部分は、大変感傷的であり、これまでの文章とはかなり異なる印象を読む者に与える。水野長福が備後という地名に何か特別の想いをいだいたことがうかがえる。それに備後を「故國の

名にひとしければ」と言つてゐるのは不可解である。水野家は能登西谷から下總結城に移封になつた筈であり、このへんに何か隠された水野家の事情がありそうである。

水野家の家系は古く、戦国時代に三河国刈屋の城主として織田信長に属した水野忠政は、徳川家康の生母“於大の方（後の伝通院）”の実父である。忠政の孫、勝成は鬼日向と呼ばれた猛将で元和五年（一六一九）備後国福山に十万石を以って封せられた。（後一〇〇〇石加増された）以降水野氏は徳川幕府の諸代大名として中国筋の固めの責を代々担つた。（図1 参照）

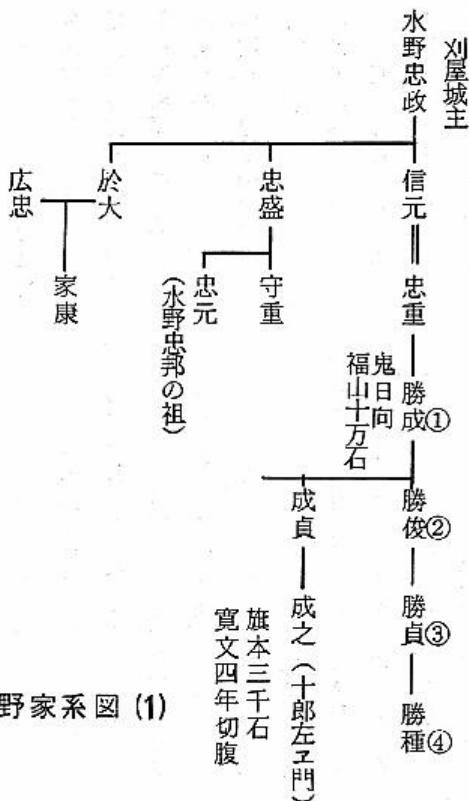


図 1 水野家系図 (1)

断絶の危機に瀕してしまった。すなわち、元禄二年（一六八九）に長男数馬が六才で早世したのをはじめ、十二年間に五男三女計八人の子供達がいずれも二～四才で夭折してしまった。そして元禄十年七月に六男千菊が年わずか一才で没すると、後を追うように翌八月には、とうとう当主の勝種自身が三七才の若さで没してしまった。こうなると、あとは生後わずか八ヶ月になる七男勝岑ただ一人に水野家十万石の命運をかけることとなってしまった。

勝岑は同年十月家督を継いだが、その無事成長は水野家十万石家中全ての者の祈りであり、総力がたむけられたに違いない。しかし、こうした祈りも努力も空しかつた。幼少の君主勝岑は、参勤交替の途中病を得て、元禄一一年（一六九八）五月五日に数え年わずか二才で江戸藩邸において没してしまった。襲封後わずか七ヶ月の幼い生命であった。これにより福山藩十万一〇〇〇石は幕府に収公されてしまった。しかし幕府は、先祖忠政以来の武

初代勝成から三代目の勝貞は、島原の乱に父祖とともに出陣しているが寛文二年（一六六二）に年三八才で没した。この頃より水野家に家系断絶の不運のカゲが見えはじめる。すなわち、勝貞の唯一の男児「勝種」が水野家四代目を継いだが、わずか三才の幼児であった。当時は現代と比べ乳幼児の死亡率は高く、一方では幕府の政策により、数多くの有力大名が後継ぎが無いことを理由に改易される例も多く、⁽⁴⁾ 幼君勝種に万一の事があると水野家は無嗣断絶というおそれもあった。しかし、幸い勝種は無事成人し、危機は一応回避した。しかし、勝種は虚弱な体質であつたものか、その子供達は次々に早世してしまうというまたまたの家系

勝成① —— 勝俊② —— 勝貞③ —— 勝種④ —— 勝岑⑤ —— 勝長⑥

成貞

勝則 —— 勝忠 —— 勝寿 —— 長福

千菊早世

藤十郎早世

数馬早世 結城一万八千石

勝直 —— 勝岑
勝直 —— 勝長

水野本家へ

図2 水野家系図(2)

のことが、結城使行の大変感傷的な一節になつたのではないだろうか。

四 おわりに

春日部市備後の地名の由来は、遠く鎌倉時代にさかのぼる。

「備後須賀の稻荷神社は、武里駅から歩つて約二五分、武里小学校の裏手にある。この社は、関東三社稻荷のひとつで、順徳天皇の元暦元年(一一〇〇)春日部治部少輔の建てたものである。当時は関東地方の中ばは海で、城主治部少輔の館は八木崎にあり、須賀の土地は海上の小島だつた。ところが、この島から不思議な光がさし、漁が少なくなつて困るから、と城主に訴えでたものが

あつた。城主があちらこちらと調べてみると、一本の枯れ木の朽ちたところに、小さな木彫りの観音像があつたので、不思議に思つて城に持ち帰り、祀つていて。そんなあるとき、この城を訪された旅僧にこの像を見せるとき、僧は驚いてその由緒を語りはじめた。」これは昔、弘法大師が唐の国から持ち帰り、備後の國に安置してあつたが、観音像をまもる寺の人たちが、東国に移住しようと船旅を続けているうちに暴風雨にあい、仏像を安置していた船は助かつたものの、やがてこの仏像の行方がわからなくなつた。それがこの土地に現われたとは、不思議といふほかない」と。その後、城主はこんな夢をみた。夢枕に老人が立つてゐるのでたゞねると、老人は「われは稻荷大明神である。須賀の島に社を建てるよ。われは関東の守護となろう」といった。城主は神のお告げとして社を建て、木堂^{モウドウ}が備後の國から來たことから「備後村」と名づけた。」^(五)のことであり、水野家に直接係るものではない。

主家断絶により、備後福山の地を離れ新たに召しかえられ、結城藩水野家家老を勤めたものである。そして、新たな領地の検分に向かう途中偶然にも失つた故郷と同じ地名“備後”を耳にしたとき、水野長福の胸中は痛恨の思いがみなぎつたに違ひない。こ

しかし、備後の地名は、その後もずっと残り元禄時代に一大名家の家老の心をゆり動かすこととなり、その感動が紀行文の一節として現在に伝えられ、郷土を知る貴重な記録となっている。これらは地名と郷土の歴史との係わりを良く表わし、地名保存の重要性を示しているものと言えよう。

現在、ややもすると由緒ある個性的な地名が安易に変えられ、土地の歴史や自然環境に何んの関連もない、人々の暮らしの香りのしない地名に變ってしまうのを見受けることがある。地名はもつと大切にしなければと強く訴えると同時に、地名の由来や起源をより多くの人々に知つてもらう努力が必要と痛感する。

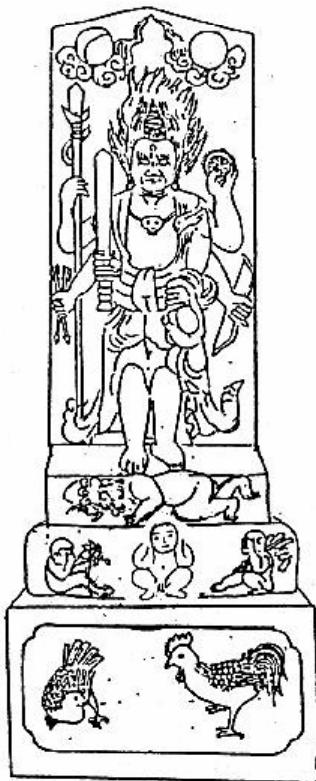
大聖寺の庚申塔^{だいしょじ}と「百庚申」を思い浮べることでしょうが、ここでは其れとは別の庚申塔を紹介する。

庚申塔は江戸時代の庚申信仰の名残りとして市内でも到る所に見られる。庚申信仰とは、体の中に潜んでいる三尸虫（さんしちゅう）が六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から脱け出て天に昇り、その人が日頃犯した罪を天帝に暴く。するとその報告を元に判断して若死にさせたりする。それ故、庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならない。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす「庚申待（まち）」という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔という訳である。かつては全国津々浦々で盛んに行われたが、明治になると急に衰頼する。

庚申塔の型式は様々あるが、大聖寺（大相模の不動尊）境内にある天保十年の庚申塔のように元禄の頃に完成した「日月・青面

大聖寺の天保十年の庚申塔

加藤幸一



高さ約158cm

- (1) 『新編武藏風土記稿』 雄山閣・他
- (2) 『結城使行』 水城県結城市役所
- (3) 『拙稿「地図と郷土史」』 越谷市郷土研究会会報第三号『古志賀谷』
- (4) 『武家諸法度の大名統制原理』 廣田繁
- (5) 『東武日光線各駅停車』 椿書院

金剛・二鶏・三猿」の基本形が代表的である。大聖寺の天保十年（一八三九）の庚申塔は、上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸には髑髏の首飾（瓔珞）がある。又、各手には弓と矢や輪宝（矛先が八方に出ている）・矛・剣を持ち、女人の髪の毛を掻まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。但、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて磨滅しているのが残念である。尚、三つ目と髑髏の瓔珞が描かれているのは珍しい。この二点は「陀羅尼集經」で説かれている通りとなっている。この經典に説く青面金剛の姿・形とは一部を碎けた表現で訳してみると次の通りとなる。

身体には四本の腕があつて、上の左手には三股叉を下の左手には棒を持ち上の右手には輪宝を下の右手には羈索を持つ。身体の色は青色で、口を張って牙を出し、真赤な目をして三つ目となつていて。頭の上には髑髏を載せ、髪の毛は炎のように逆立つて大蛇を巻き付かせている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互いに向き合つている。腰には二匹の大きな赤蛇を纏っている。髑髏の瓔珞（首飾り・胸飾り）を首に掛けている。両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手掌拈一輪。下手把羈索。其身青色。面大張口。狗牙上出。眼赤如血面有三眼。頂戴髑髏。頭髪聳堅如火焰色。頂纏大蛇。両腕各有倒懸一竜。龍頭相向。其像腰纏一大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮綾膀。髑髏瓔珞。像両脚下各安一鬼。

青面金剛の足下には天の邪鬼と呼ばれる鬼が踏み潰されている。この庚申塔の鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。向かって右端は御幣を持つ見ざる。御幣は神の依代である。中央は性欲の強い動物とされている猿が女性の臀部を連想させる桃を持つ聞かざる。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下（しも）の病の祈願の対象となっていた。左端の言わざるの猿は臍がみられ、その下の陰部も表わされていて雌猿とわかる。今と違つて当時の性に対するおおらかさが窺われる。殆どの庚申塔は見ざる・聞かざる・言わざるを唯刻んでいられるだけであるが、このように描かれているのは珍しい。二鶏（雄・雌）は普通は青面金剛の下部の両脇に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されたり、或いは全く刻まれていない物まで見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立してあり、しかも細部までちゃんと描かれていて珍しい。以上からこの庚申塔は天保期のものと言え、江戸時代の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にもすぐれ、他には見られない庚申塔であると信じており、何らかの方法で後世の人々のためにこれ以上風化しないように是非保存してもらいたいものだと願っています。

百觀音の歴史と由来

浅草觀音との縁

名倉さわ

西立野の百觀音として知られる、西福寺の寺史によると、弘仁年間（西暦八一〇～八二三年）に弘法大師が鎮護国家のため、この地に草創したものとされている。

現在は、新義真言宗豊山派（本山は奈良県桜井市長谷寺）に包括される宗教法人「西福寺」であるが、もとは現在の川口市西新井宿（当時は武州西新井宿村）宝蔵寺の末寺であった。

山号は、補陀落山と号する（觀音の所在する意）。この補陀山西福寺のある西立野は、その昔江戸時代中期寺の門前町が栄えたことが伺われる「館野町」の呼び名が残されている。

地理的な位置から考えられることは、当時かなり山奥であったこの西立野に、現存する数々の堂塔が建立されて、繁栄を示したのは当時の南西方約三糠に、鳩ヶ谷町（現在鳩ヶ谷市）があり、

鳩ヶ谷より北方に大門（現在の浦和市大門）につながる日光社参の御成街道（現在の一・二・二号線）が通じていた関係から参詣者が増え、江戸の中後期にかけて、西福寺觀音は、徳川の帰依と信仰を集めaitことが推察できるのである。

七年三月三十日になつた。

觀音堂について

本尊は如意輪觀音であり、その胎内に
西国三十三ヶ所 坂東三十三ヶ所
秩父三十四ヶ所

合せて百ヶ所の札所の觀音像（木彫厨子入り）が納められているので、俗に百觀音と称されている。この一堂に参詣すると、百ヶ所の觀音靈地に参詣したと同じ功德があるとされ、春秋のシーズンには一般の参詣者が多い。毎年八月九日（四万六千日）の縁日と大護摩に賑わう。建立の年代は不明である。

元禄三年（西暦一六九四年）の再興であると、武藏風土記に誌されている。室内に安置されている金箔ぬりの百体の觀音像は、後に家光の息女千代姫が、三重の塔建立の際、参詣者の拜觀を容易にするため、造立して納めたものである。

百觀音の山号、寺名、本尊名、所在地、当、始めて西国三十三ヶ寺より記することにした。

西国一番より

一番 那智山 青岸渡寺（天台宗山門脈） 本尊 如意輪觀音
和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字那智山八

巡礼歌 補陀洛や岸うつ浪は三熊野の那智のお山にひびく滝津瀬

二番 紀三井山 金剛宝寺護國院（救世觀音宗）

本尊 十一面觀世音 和歌山県和歌山市紀三井寺一二〇一

巡礼歌 ふるさとをはるばるここに紀三井寺花の都も近くなるらん

当山西福寺の境内（約九、三九八平方米）には、觀音堂（百觀音）、地藏堂、鐘樓及び仁王門（倒壊したと伝えられ、現存しない）、近隣に威容を誇る「三重の塔」埼玉県指定文化財昭和四十

三番 風猛山粉河寺（粉河觀音宗） 本尊 千手千眼觀世音

和歌山県那賀郡粉河町二七八八七

巡礼歌 父母の恵みも深き粉河寺仏の誓いたのもしの身や

四番 横尾山施福寺（天台宗） 本尊 千手千眼觀世音

大阪府和泉町横尾山町一三六

巡礼歌 深山路や檜原松原分けゆけば巻の尾寺に駒ぞ勇める

五番 紫雲山藤井寺（真言宗御室派）

本尊 十一面千手千眼觀世音

大阪府藤井寺市藤井寺一一一六一二一

巡礼歌 まいりより頼みをかくる葛井寺花のうてなに紫の雲

六番 壺阪山南法華寺（真言宗豊山派） 本尊 千手千眼觀世音

奈良県高市郡高取町壺阪 明治十六年に壺阪靈験記が書かれた。

巡礼歌 岩をたて水をたたえて壺阪の庭の砂も淨土なるらん

七番 （岡寺）

東光山竜蓋寺（真言宗豊山派） 本尊 如意輪觀世音

奈良県高市郡明日香村岡八〇六

巡礼歌 けさみればつゆ岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光りなりけ

り

八番 豊山長谷寺（真言宗豊山派） 本尊 十一面觀世音

奈良県桜井市初瀬町 牡丹の名勝寺なり

巡礼歌 いく度も参る心は初瀬寺山も暫ひも深き谷川

九番 興福寺南円堂（法相宗） 本尊 不空羈索觀世音

奈良県奈良市登大路町四八

巡礼歌 春の日は南円堂にかがやきて三笠の山に晴るるうす雲

十番 明星山三室戸寺（本山修驗宗） 本尊 千手觀世音

京都府宇治市菟道二

巡礼歌 夜もすがら月を三室戸わけゆけば宇治の川瀬に立つは白波

十一番 深雪山上醍醐寺（真言宗醍醐派） 本尊 准胝觀世音

京都市伏見区醍醐町醍醐山一

巡礼歌 逆縁ももらさで救ふ願なれば准胝堂は頼母しきかな

十二番 岩間山正法寺（真言宗醍醐派） 本尊 千手觀音

滋賀県大津市石山内畠町

巡礼歌 水上はいづくなるらん岩間寺岸うつ波は松風の音

十三番 石光山石山寺（真言宗東寺派） 本尊 如意輪觀世音

滋賀県大津市石山町一一一

巡礼歌 後の世を願ふ心はからくとも仏の誓ひおもき石山

芭蕉が詠んでいる。（汐やかぬ須磨よ此海秋の月）

十四番 長等山園城寺（天台寺門派） 本尊 如意輪觀世音

滋賀県大津市園城寺二四六 三井寺として親しい。

巡礼歌 いで入るや波間の月を三井寺の鐘のひびきにあくる湖

三井寺の晩鐘は神護寺、平等院と日本三鐘の一つなり。

二十一番 西山善峰寺（天台宗山門派） 本尊 千手觀世音

京都府京都市西京区大原野小塙町

二十二番 普提山穴太寺（天台宗山門派） 本尊 聖觀世音

京都府亀岡市曾我部町穴太東ノ辻

二十三番 楠原山勝尾寺（天台宗高野山派） 本尊 十一面觀世音

多宝塔の前にある天然記念の遊竜松はすばらしい

十五番 新那智山觀音寺（真言宗泉涌寺派）

本尊 十一面觀世音

京都市東山区泉涌寺山内町三一

巡礼歌 昔より立つともしらぬ今熊野仏の誓ひあらたなりけり

十六番 音羽山清水寺（北法相宗） 本尊 千手觀世音

京都市東山清水

巡礼歌 松風や音羽の滝の清水をむすぶ心は涼しかるらん

十七番 楠原山六波羅蜜寺（真言宗智山派）

本尊 十一面觀世音

京都市東山区松原通大和大路東入二丁目

巡礼歌 重くとも五の罪はよもあらじ六波羅堂へ参る身なれば

十八番 紫雲山頂法寺 本尊 如意輪觀世音

二十三番 応頂山勝尾寺（真言宗高野山派） 本尊 十一面觀世音

大阪府箕面市粟生間谷

巡礼歌 わが思ふ心の内は六の角ただ円かれと祈るなりけり

もとは仏への立華であったが今は美と教養投入盛花家元なり

二十四番 紫雲山中山寺（真言宗中山寺派） 本尊 十一面觀世音

兵庫県宝塚市中山寺二一一一

巡礼歌 野をもすぎ里をもゆきて中山の寺へ参るは後の世のため

十九番 靈巣山行願寺（天台宗山門派） 本尊 千手觀世音

京都市中央区寺町通り竹屋町下ル行願寺門前町

巡礼歌 花を見て今は望みも草堂の庭の千草も盛りなるらん

二十五番 御嶽山清水寺（天台宗） 本尊 十一面千手觀世音

兵庫県加東郡社町平木一一九四

巡礼歌 あはれみや普き門の品々なにおか波のここに清水

三十一番 姥崎耶山長命寺（天台宗一単立）
本尊 千手十一面聖観世音 三尊一体

滋賀県近江八幡市長命寺町一五七

二十六番 法華山一乗寺（天台宗山門派） 本尊 聖観世音
兵庫県加西市坂本町八二一

巡礼歌 八千年や柳に長き命寺運ぶ歩みのかざしなるらん

三十二番 繖山観音正寺（天台宗一単位）
本尊 千手千眼觀世音

滋賀県蒲生郡安土町大字石寺

二十七番 書写山円教寺（天台宗山門派）
本尊 六臂如意輪觀世音

巡礼歌 あなたうと導きたまへ觀音寺遠き國より運ぶ歩みを

三十三番 谷汲山華嚴寺（天台宗） 本尊 十一面觀世音
岐阜県揖斐郡谷汲村徳積

二十八番 成相山成相寺（真言宗高野山派） 本尊 聖観世音
京都府宮津市成相寺

巡礼歌 今までは親と頼みし笈摺を脱て納むる美濃の谷汲
世を照す仏の驗ありけれどまだ灯火も消えぬなりけり
札所の外に番外として三ツの寺あり。

二十九番 青葉山松尾寺（真言宗醍醐派） 本尊 馬頭觀世音
京都府舞鶴市松尾五三一

。豊山法起院（真言宗豊山派） 本尊 徳道上人 奈良県桜井市
。華頂山元慶寺（天台宗） 本尊 薬師如来 京都市東山区
。東光山花山院菩提寺（真言宗花山院派）

二十九番 青葉山松尾寺（真言宗醍醐派） 本尊 馬頭觀世音
京都府舞鶴市松尾五三一

本尊 薬師瑠璃光如來
兵庫県三田市尼寺

巡礼歌 往昔は幾世経ねらん便りをば千歳もここに松の尾の寺

以上、西国三十三番札所寺と、番外三ツ合せて三十六なり。

三十番 巍金山宝巖寺（真言宗豊山派） 本尊 千手千眼觀世音
滋賀県東浅井郡びわ村字早崎一六六

巡礼歌 月も日も波間にうかぶ竹生島船に宝をつむこことちして

坂東札所について、福島と、茨城の境にある、棚倉町。この町には旧陸奥一ノ宮の都々古別神社があり、天福年間の十一面觀音像が所蔵されてることで知られている。神主さんに十一面像の拝

観を願うところよく承諾されて、木箱に納められた十一面觀音を土蔵から取り出してこられ、豊かなお顔の十一面像は、ひきしまつた肉付で迫力がみなぎり両手は欠けているけれど堂々たる威光を放つておられた。

一番 大藏山杉本寺（天台宗） 本尊 十一面觀世音

神奈川県鎌倉市二階堂

巡礼歌 頼みあるしるべなりけり杉本の誓ひは末の世にもかはらじ

二番 海雲山岩殿寺（曹洞宗） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 立寄つて天の窟戸を押し開き仏を頼む身こそたのしき

神奈川県逗子市久木

三番 祇園山安養院（田代寺・浄土宗） 本尊 千手觀世音

巡礼歌 枯木にも花咲くちかひ田代寺世をのぶ綱の跡ぞ久しき

神奈川県鎌倉市大町

四番 海光山長谷寺（淨土宗） 本尊 十一面觀世音

神奈川県鎌倉市長谷

巡礼歌 長谷寺へ詣りて沖を眺むれば由井のみぎはに立つは白浪

五番 飯泉山勝福寺（古義真言宗） 本尊 十一面觀世音

神奈川県小田原市飯泉

巡礼歌 かなはねばたすけたまへと祈る身の船に宝をつむはいい

六番 飯上山長谷寺（高野山真言宗） 本尊 十一面觀世音
神奈川県厚木市飯山

巡礼歌 飯山寺建ち初めしよりつきせぬはいりあひ響く松風の音

七番 金目山光明寺（天台派） 本尊 聖觀世音

神奈川県平塚市南金目

巡礼歌 なにごともいまはかないの觀世音二世安樂と誰か祈らむ

八番 妙法山星谷寺（真言宗大覚寺派） 本尊 聖觀世音

神奈川県座間市入谷

巡礼歌 障りなす迷ひの雲をふき払ひ月もろともに拝む星の谷

九番 都幾山慈光寺（天台宗） 本尊 千手觀世音

埼玉県比企郡都幾川村西平

巡礼歌 聞くからに大慈大悲のじこうてら誓いも共に深きいわど

の

十番 嶩殿山正法寺（真言宗智山派） 本尊 千手觀世音

埼玉県東松山市岩殿

巡礼歌 後の世の道を比企見の觀世音この世と共に助けたまへや

十一番 岩殿山安樂寺（真言宗智山派） 本尊 聖觀世音
埼玉県比企郡吉見町御所

巡礼歌 吉見よと天の岩戸を押し開き大慈大悲の誓ひたのもし

かな水によりうどんも美味しいのでしよう。

ふ山号は、水の五つの徳をたたえたものであり、それだけ清ら

かに水を押し開き大慈大悲の誓ひたのもし

十二番 華林山慈恩寺（天台宗） 本尊 千手觀世音
埼玉県岩槻市慈恩寺

巡礼歌 慈恩寺へまいるわが身もたのもしやうかぶ夏島をみるに

つけても

十七番 出流山満願寺（真言宗智山派） 本尊 千手觀世音
栃木県栃木市出流町

巡礼歌 たのみくる心も清き水沢の深き願いを得るぞ嬉しき

十三番 金竜山浅草寺（聖觀音宗） 本尊 聖觀世音
東京都台東区浅草

巡礼歌 ふかきとが今よりのちはよもあらじ罪あさへまいる身な

れば

十八番 補陀洛山中禪寺（天台宗） 本尊 千手觀世音
栃木県日光市中禪寺歌ヶ浜

巡礼歌 中禪寺のぼりて拝むみずうみのうたの浜ちにたつは白波

十四番 瑞玉山弘明寺（真言宗高野山派） 本尊 十一面觀世音
神奈川県横浜市南区弘明寺町、本格的な高野山流の精進料理で

知られるようになり拝観者が多い。

巡礼歌 ありがたや誓ひのうみをかたむけてそぞぐめぐみにさむ

るほのやみ

十九番 天開山大谷寺（天台宗） 本尊 千手觀世音
栃木県宇都宮市大谷

巡礼歌 名を聞くも恵み大谷の觀世音みちびき給へしるもしらぬ

も

十五番 白岩山長谷寺（天台宗寺門派） 本尊 十一面觀世音
神奈川県横浜市南区弘明寺町、本格的な高野山流の精進料理で

知られるようになり拝観者が多い。

巡礼歌 ありがたや誓ひのうみをかたむけてそぞぐめぐみにさむ

るほのやみ

二十番 独鈷山普門院西明寺（真言宗豊山派）

本尊 十一面觀世音
栃木県芳賀郡益子町大字益子

巡礼歌 西明寺ちかいをここにたづねればつひのすみかは西とこ

そきけ

十六番 五德山水沢寺（天台宗） 本尊 千手觀世音
群馬県北群馬伊香保町水沢 うどんが美味しい「五德山」とい

二十一番 八溝山日輪寺（天台宗） 本尊 十一面觀世音

茨城県久慈郡太子町大字上野宮字真名板倉

巡礼歌 迷ふ身が今は八溝へ詣り来て仏のひかり山もかがやく

茨城県常陸太田市天神林町

二十二番 妙福山佐竹寺（真言宗豊山派） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 ひとふしに千代をこめたる佐竹寺かすみかくれに見ゆる
むらまつ

二十三番 佐白山正福寺（曹洞宗） 本尊 千手觀世音

茨城県笠間市笠間田

巡礼歌 夢の世にねむりも覚むる佐白山妙なる法や響く松風

茨城県真壁郡大和村本木

二十四番 雨引山樂法寺（真言宗豊山派） 本尊 延命觀世音

巡礼歌 へだてなき誓ひをたれも仰ぐべし仏の道にあまびきの寺

二十五番 筑波山知足院中禪寺大御堂（真言宗豊山派）

本尊 千手觀世音

茨城県筑波郡筑波町宮脇

巡礼歌 大御堂かねは筑波の峯にたてかた夕暮れにくにぞこひしき

さ

二十六番 南明山清滻寺（真言宗豊山派） 本尊 聖觀音

茨城県新治郡新治村小野

巡礼歌 わがこころいまより後はにごらじな清滻寺へまいる身な

れば

二十七番 飯沼山円福寺（真言宗） 本尊 十一面觀世音

千葉県銚子市馬場町

巡礼歌 このほどはよろずのことを飯沼にきくもならぬ波の音かな

巡礼歌 ひとつしに千代をこめたる佐竹寺かすみかくれに見ゆる
むらまつ

二十八番 滑河山龍正院（天台宗） 本尊 十一面觀世音

千葉県香取郡下総町滑川

巡礼歌 音にきく滑河寺のけさがふちあみころもにてすくうなり
けり

二十九番 海上山千葉寺（真言宗豊山派） 本尊 十一面觀世音

千葉県千葉市千葉寺町

巡礼歌 千葉へ詣る吾身もたのもしや岸打つなみに船ぞうかぶる
らん

三十番 平野山高藏寺（真言宗豊山派） 本尊 聖觀世音

千葉県木更津市矢那

巡礼歌 はるばると登りて拝む高倉や富士にうつらふ阿婆婆なる
さもり

三十一番 大悲山笠森寺（天台宗） 本尊 十一面觀世音

千葉県長生郡長南町笠森

巡礼歌 日は暮るる雨はふる野の道すがらかかる旅路をたのむか
さもり

三十二番 音羽山清水寺（天台宗） 本尊 千手觀世音

千葉県夷隅郡岬町鴨根

巡礼歌 獻るとも千尋の底は澄みにけり清水寺にむすぶあか桶

三十三番 楼陀洛山那古寺（真言宗智山派） 本尊 千手觀音

千葉県館山市那古

巡礼歌 楼陀洛はよそにはあらじ那古の寺岸うつ波を見るにつけても

坂東三十三ヶ寺は、私も笈摺を着て白衣に杖遍路笠を被りABC

C三コースに分けて巡拝したが、西国の札所寺は歴史的にも立派な仏像、寺の建物の美しさは目を見はるばかりである。

日をかけて、ゆっくり、鎌倉の杉本寺より自由に観光と、仏像を見て廻るのも、旅の輻わいとは異なり、心のゆとり、寺々の本尊の、古い歴史を訪ねるのも、良い旅であると思う。足の丈夫の時に何回でも巡拝するつもりである。御珠印帳と掛軸を札所毎に作って、歩きづく限り毎年十日間ずつ巡拝を終った。

西国は三ツに分け前中後と巡拝す。

坂東も一コースに分けて、三十三ヶ寺巡拝をすませた。

秩父は三泊にて三十四ヶ寺巡拝すませた。

秩父は赤平川が荒川に流れ込み、秩父と吉田への分岐点にもなっている。山々は次第に高さを増し谷間に町がいきづいてい

るようである。先へゆくにつれ谷間は広がり、そこにわずかの平原がある。ここが秩父盆地である。

秩父の歴史は崇神天皇のころ、「知々夫国」として開かれ「知

知夫産命が来任し」 国の總鎮守として、「知々夫神社が祀られ

たことにはじまる。」後に知々夫は、秩父に改められ、武藏国の一
部となつた。そして山岳宗教が盛んになると、山伏達によつて

周囲の山々は開かれ其の後禪文化が侵透し、禪寺が建てられ、秩

父に觀音の札所が設立されたのは、この時代の後であろう。

秩父札所一番より、所在地は秩父内なので記さない。

一番 詠經山妙音寺・四万部寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 ありがたや一巻ならぬ法のはな数は四万部の寺のいにし

へ

二番 大棚山真福寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌廻り来て頬みをかけし大棚の誓も深き谷川の水

三番 岩本山常泉寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 楼陀洛は岩本寺と拝むべし峰の松風ひびく滝津瀬

四番 高谷山金昌寺・新本寺（曹洞宗） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 あらたかに詣りて拝む觀世音一世安樂と誰も祈らん

子育觀音をマリア觀音と呼ぶ人も多い。

五番 小川長興寺・語歌堂（臨濟宗） 本尊 准胝觀世音

巡礼歌 父母の恩も深き語歌の堂大慈大悲の誓たのもし

六番 向陽山ト雲寺・荻野堂（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 初秋に風吹き結ぶ萩の堂宿かりの世の夢ぞ覚める

十四番 長岳山今宮坊（臨濟宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 昔より立つともしらぬ今宮に詣る心は浄土なるらん

七番 青苔山法長寺（牛伏堂）（曹洞宗） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 六堂を兼ねて巡りて拝むべし又後の世を開くも牛伏

十五番 母巣山少林寺（藏福寺）（臨濟宗建長寺派）
本尊 十一面觀世音

八番 青苔山西善寺（臨濟宗南禪寺派） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 ただたのめまことの時は西善寺きたりむかへん弥陀の三
尊

巡礼歌 みどり子のははのそ森の藏福寺ちちもろともにちか
ひたのもし

九番 明星山明智寺（臨濟宗） 本尊 如意輪觀世音

巡礼歌 巡りきてその名を聞けば明智寺心の月はくもらざるらん

十六番 無量山西光寺（真言宗豊山派） 本尊 千手觀世音

巡礼歌 西光寺ちかひを人にたづねれば終のすみかは西とこそき
け

十番 万松山大慈寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 ひたすらに頼みをかけよ大慈寺六の巷の苦にかはるべし

十七番 実正山定林寺（曹洞宗） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 あらましを思ひ定めし林寺かねききあいづゆめぞさめ
ける

十八番 白道山神門寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 ただたのめ六則ともに大慈をば神門にたちてたすけたま
へる

十一番 南石山常楽寺（曹洞宗） 本尊 十一面觀世音

巡礼歌 つみとがも消えよと祈る坂ごおり朝日はささで夕日かが
やく

十二番 仏道山野坂寺（臨濟宗南禪寺派） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 老の身に苦しきものは野坂寺いま思い知れ後の世の道

十九番 飛淵山竜石寺（曹洞宗） 本尊 千手觀世音

巡礼歌 天地を動かす程の竜石寺詣る人には利生あるべし

十三番 旗下山慈眼寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 御手に持つ蓮のはばき残りなく浮世の塵をはけの下

二十番 法王山岩ノ上堂（臨濟宗南禪寺派） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 苦むしろしきてもとまれ岩の上玉のうてなもくちはつる
身を

二十一番 要光山觀音寺（矢之堂）（真言宗豊山派）

本尊 聖觀世音

巡礼歌 柄弓いる矢の堂に詣で来て願ひし法にあたる嬉しさ

二十二番 西陽山栄福寺（童子堂）（真言宗豊山派）

本尊 聖觀世音

巡礼歌 極樂をここに見初めて童う堂後の世までもたのもしきかな

二十三番 松風山音楽寺（臨濟宗南禅寺派） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 音楽のみ声なりけり小鹿坂の調べにかよう峰の松風

二十四番 光智山法泉寺（臨濟宗南禅寺派） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 天照らす神の母祖の色かへてなおもふりぬる雪の白山

二十五番 岩谷山久昌寺（御手判寺）（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 水上はいづくなるらん岩谷寺朝日もくなく夕日かがやく

二十六番 万松山円融寺・岩井堂（臨濟宗建長寺派）

本尊 聖觀世音

巡礼歌 尋ね入りむすぶ清水の岩井堂心の垢をすすがぬはなし

二十七番 竜河山大淵寺（月影堂）（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 夏山やしげきが下の露までも心へだてぬ月の影もり

二十八番 石竜山橋立寺（曹洞宗） 本尊 馬頭觀世音

巡礼歌 霧の海たち重なる橋は雲の海たぐいあらじとわたる橋立

二十九番 笹戸山長泉院（石札堂）（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 分けのぼり結ぶ笹の戸おし聞き仏を拝む身こそたのもし

三十番 瑞竜山宝雲寺（臨濟宗建長寺派） 本尊 如意輪觀世音

巡礼歌 一心に南無觀世音と唱うれば慈悲深か谷の誓たのもし

三十一番 鷺尾山觀音院（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 深山路をかき分け尋ね行きみれば驚のいはやにひびく滝

つ瀬

三十二番 般若山法性寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 願はくば般若の船に乗りを得ていかなる罪も浮ぶとぞ聞く

三十三番 延命山菊水寺（曹洞宗） 本尊 聖觀世音

巡礼歌 春夏や冬のさかりの菊水寺秋をながめ送る年月

三十四番 日沢山水潛寺（曹洞宗） 本尊 千手觀世音

巡礼歌 万世の願ひをここに納めをく苔の下より出づる水かな

以上記した觀世音が、西国、坂東、秩父等、何時頃より創めら

れたかを記して見よう。

西国の札所は養老二年（七一八）大和長谷寺の徳道上人により創められ、永延二年（九八八）花山法皇によって再建されたと伝えられている。

坂東の札所は鎌倉初中期の天福以前に設けられたと伝えられている。

秩父は、伝説により文暦元年（一二三四）性空上人を始めとする十三人の聖者が巡回し札所を設けたといわれている。しかし史料として最も古いものは、三十二番、法性寺に残る長享二年（一四八八）の番付である。したがって長享二年以前に札所は成立していたわけです。一般には室町中期のころと推定されている。

西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。
西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。
西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。

西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。
西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。

西福寺の三重の塔の由来について記すことにする。

当時は観音経で説く、観世音の三十三化身にもとづいて、西国、坂東と同様、三十三カ所であったが、後に一ヵ所（二番）真福寺をつけ加えられて、三十四カ所となり、百觀音札所が成立したのである。

最後に東京浅草寺と、百觀音の仁王像について記したいと思う。（西福寺）

仁王門＝この寺の守護仏として仁王門に仁王尊（作者不明）が納められていたが、安政六年（西暦一八五八年）の大暴風雨により傍の樅の大木が倒れて仁王門が破壊されてしまい、仁王尊一対が長い間観音堂内に安置されていたが、東京の浅草観音の仁王門が戦災で焼失された。当山より仁王尊一対が寄進されることになった。

昭和二十三年春浅草へ運ばれた。当時の（落首に）

「門なしの長き年月たえかねる」

戸塚を立ちて浅草に行く

というのがあった。浅草観音の仁王像は其の後新しく作られた像である。百觀音よりの仁王像は外に移された。

浅草観音と川口の西福寺とのような縁があつたとは、あまり知られていない。

次に百觀音の札所を、すべて記したが……

千代姫は観音を信仰され深く帰依してをられ、木堂内に如意輪観音の脇仏（百体觀音像）を納めてをられる。それらを考えると、「三重の塔」の造塔奉獻の願意がうかがわれるるのである。

昨年昭和六十二年十二月十五日の夜「六チャンネル」「そこが知りたい」にて紹介された。俳優渡辺文雄、上田えりの両名が観音に参詣され、境内清掃の住職と参詣の人々と落葉の焚火を囲み百觀音の歴史を訪うところが放映された。

参考資料

西福寺百觀音の歴史と由来書

古寺巡回シリーズ 一巻 二巻 三巻・平幡良雄著
百觀音巡回ノート（自作文）より

越巻村（現新川町）伝承の

念 佛 講 に つ い て

高 橋

清

灯と聞く。私の住んでいる所も市街地となつたときには念佛の伝承も消滅のうきめに会うやも知れないと思う。

新興住宅地（自治会）に念佛講があらたに発生したとゆう話はきかない。

伝統ある農村集落の念佛、と言つてもどの位の年月の伝統であるかはつきりしたことはわからない。しかしこの念佛の意味を理解し過去の時代に憶ひを致すことは郷土を知る一つの「てだて」であると思う。

越巻村（現新川町）は綾瀬川左岸に位置し低湿地帯を開拓されて出来た水田単作地帯である。水害常習地帯であり最近の事象をみれば、昭和五七年九月十二日、昭和六一年八月五日の二回の水害は昔の姿が再現された。

その様な農村集落に江戸時代であれ、それ以前の時代であれ佛教の布教と共にその本質を農民に知らしむるということは仲々至難であつたに相違ない。

学問のない者に哲学を教えることであるからである。それ故にてつとり速く教示する方法と言へば簡単なりズムに合せて歌う念佛歌・念佛おどりであつたろうと思われる。

庶民をして「なるほど」という気持をおこさせることの手段であつたに相違ない。

越谷市内旧集落の農村地帯にはいづれの地区でも伝承されている。新川町に於ても一丁目（旧丸の内部落）、二丁目（旧中新田部落）と別々に老婦人達による念佛講がある。

念佛はおそらく現在の街の中心部の方からひろまつたものと思われる。街は旅人もあるし僧の行き来もあるし、寺も早くから出来たであつたろうと思われるからである。

然し長い年月を経るに従つて街の中では念佛講の存在は風前の

二、文献からの念佛

塚本善隆氏は次の様に書いている。

念佛（世界大百科事典 平凡社発行所収）

サンスクリットの訳 佛を心にもっぱら思念することで原始佛

教では佛教徒の実践行として三念（念佛・念法・念僧）あるいは六念（三念に念戒・念施・念天を加える）の第一にあげられている。仏に思いをこらすことから転じて仏の全身やその各部の特徴（いわゆる相好）を明確に観察思念すること（観念の念佛）にもなり、とにかく大乗佛教の種々の淨土教が発達するといよいよ重要視せられ、口に仏名を唱えることを念佛といい、一般信者も容易にひろく行われる実践行となつた。ことに「無量寿經」へ觀無量寿經へ阿弥陀經へ淨土三部經などによる淨土教では念佛の行が強調され、中國日本でこの三部經を中心に阿弥陀淨土教が興隆し普及すること、念佛とは阿弥陀仏を思念すること、觀察すること、さらに最も普通には口に「南無阿弥陀仏」（六字名号）を唱えること（口称念佛）を意味するようになつた。

中国浄土教の始祖とされる東晋の慮山（ろさん）の慧遠（えおん）が結成した同志（白蓮社）によって行われた念佛は心に仏を觀察し思念する方向にあったが北魏末の曇鸞（どんらん）から唐初の道綽（どうしゃく）善導によって發展した浄土教ではいわゆる「易行」の称名念佛が凡夫・悪人の救濟行として強調され称名がひろく大衆の間に行われるにいたった。

日本の法然やその門流の浄土教は後の三師の浄土教義を繼承して日本的新展開をとげたものである。法然・親鸞・一遍などによつて民衆の間にひろく普及した念佛は庶民社会の踊念佛・六斎念佛・引声（いんじょう）念佛・大念佛・念佛狂言などの郷土芸能を生むにいたつた。

又念佛踊（踊念佛）について荻原竜夫氏は次の様に述べている。
念佛踊（踊念佛）（世界大百科事典所収）

或は踊躍（ゆやく）念佛ともいう。

念佛にあわせて金鼓その他の楽器をならしつゝ多輪になつて踊るも平安時代・空也が市井や道場にあつてこれを民衆にすゝめたと伝え鎌倉時代に一遍上人がこれをとりあげて教義上の根拠づけをした。（大無量寿經）に「踊躍大觀喜」とあるのにもとづくなどといわれるがもとより日本古代から村々で行われた民俗舞踊が多少の仏教的粉飾をうけたものと見るべきで後世徐々に下層民の芸能專業化に伴なつて広くもてはやされるに至つた。

十三～十四世紀にいちじるしく流行したので、それが仏教の權威をおとすものとして非議する人も多かつた。

中世以降京都ではこれが鎮花祭と合体しました融通念佛の一形式として發展し、組織だった民俗芸能とさえなつた。

靈山正法寺や御影堂の踊念佛・千本釈迦堂・嵯峨清涼寺の念佛・王生（みぶ）の大念佛などがそれでまた近世には六斎念佛・泡齊念佛の類が広く各地に派生し發展した。

念佛講については石田瑞麿氏が次のように記述している。（世界大百科事典所収）

講の語は經論の講読を意味し仁王講・法華八講などその類があるが念佛講は念佛に同心のものが集つて結社をつくり、念佛とともに行うに至つたものをいう。

古くは中國の慮山の「白蓮社」をはじめ念佛結社のつくられた例は多いが日本では平安中期以後往生講・迎（むかえ）講などが広くさかんに行われ民衆の間に浸透した。

念佛講としては種々のものが起つており浄土宗の別時念佛や真宗の報恩講などもこの種のものと見なされる。

しかしこうしたもののが起つており浄土宗の別時念佛や真宗の報恩講などもこの種のものと見なされる。

三、新川町の念佛・念佛講

現存せる新川町の念佛では「口に仏名を唱えること」は続いている。（二、文献からの念佛）

お題目 十三仏 三回となえる

おふどう おしゃか おもんじゅ

おふげん おぢぞう おみろく

おやくし おかんのん おせいし

おあみだ おわしく おだいにち

こくぞうさま 南無阿弥陀仏 々々

念佛踊（踊念佛）は現存してはいない。

然し三郡送り大師講（西新井大師を本拠として新四国八十八ヶ所を三郡へ東京南足立郡埼玉県北足立郡・南埼玉郡）の寺社に設定し回遊しながら弘法大師の尊像を送った行事）盛んな昭和三十一年頃まであった。

単調な調子をつけて歌う「念佛歌」これを金鼓その他の楽器をならして歌つ人を「念佛申し」と称した。主として男の老人達だ。踊る婦人達を「踊りっ子」と称した。この婦人達も五、六十の初老の婦人達であった。

新川町では昭和初期の頃であっても「念佛申し」や「念佛踊りっ子」は居らなかつた。

今新川町に現存するのは念佛講である。

「同心相集つて念佛にはげむかたわら娛樂・慰安・懇親・をかねた習俗的な行事」と石田氏は述べているがまさにその通りである。

新川町に於て行われている念佛歌には毎月の「月並念佛」法事のときの「おとき念佛」彼岸には「彼岸念佛」お盆には「棚念佛」四月十日には「ひよう念佛」小寒に入つて三日目にやる「寒念佛」家を新築すると「火ぶせの念佛」これは「家見念佛」とも称する。葬式には「忌中念佛」子供の葬式には「さいの河原」この外にも「岩舟」「高野山」「法事これさま」「念佛行者」「福の神」など作者不詳・調子は口伝による伝承で講に入っている人でなければ唄えない。

以上の念佛歌詩を順に紹介してみるとこうする。

四、念佛歌詩の紹介

四方がため（毎月の月並念佛）

一、帰命頂來 浄土なり

東は薬師の淨土なり

南は觀音 浄土なり

西は西方で弥陀如来

北はお釈迦の淨土なり

中は大日 不動様

もくれん尊者の仰せには

それを念じる ともがらは

おせいに 疑ひ 更になし

南無阿弥陀仏 々々

豊穣極樂 南無阿弥陀

弥陀様 浄土え参るべし

二、さても美事な おまいかな
香爐に油を立てならべ

極樂淨土は之にあり

南無阿弥陀仏 々々

豊穣極樂 南無阿弥陀

弥陀様 浄土え参るべし

三、弥陀様 おまいのたて花は
夜まし 日ましにしほれます

吾等が ごしょう もあの如く

南無阿弥陀仏

々々

豊穣極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土へ 参るべし

四、極楽浄土の一の門

錢せんでも金かなでも 開かぬ門

念佛ろくじで 押し開く

南無阿弥陀仏

々々

豊穣極楽 南無阿弥陀

弥陀様 浄土へ 参るべし

五、帰命頂來 六阿弥陀

としまびょうぶという人は

一人持つたる子を殺し

思いなげくは限りなし

熊野え参詣をいたすべし

びょうぶ が裏えとつきとまる

びょうぶ が裏では とりあげて

仏を六体 きざみあげ

吾が子に似たのは ひとりなし

南無阿弥陀仏

々々

ひきすり（月並念佛）

一、やーれ 親の 御墓の八重櫻

なぜにひよどり 巣をかけた
やーれ早く立ち寄れ花が散る
それほど大事な花なれば
天吹く風も いとうべし
弥陀様 浄土え参るべし

二、やーれ之より東の木のもとに
小池に黄金こがねが みだれ咲く
やーれ黄金こがねつるべに 黄金ざお
ところ繁昌と汲み上げる

南無阿弥陀仏

々々

弥陀様 浄土へ 参るべし

おとき念佛（法事念佛）

一思ひも及ばず 之に来て

そんじも及ばず お茶たべて

きせいのこおりか こがの茶か

旅のつかれで 飲みしれぬ

宿え帰りて 物語り

所もよかれ 村よかれ

ましてお宿は なおよかれ

南無阿弥陀仏

々々

豊穣極楽 南無阿弥陀

回向のお念佛 南無阿弥陀

月並念佛は毎月一回同心相集つて念佛をはげむことである。発

声も忘れてはならないし念佛そのものを忘れてはならないので行う。

法事とは故人の年回忌である。

法事は近親者が集つて僧のお經と説教をいたゞき墓参りをする。集つた人達は故人を偲び歎談する。仏の事は昔より催促なしといい心には懸けていても仲々出来ないものである。新川町の墓には古い石塔は少い。元禄年間の石は古い方である。元禄年間とは庶民の富が蓄積された時代である。それまでは武士階級しか建てられなかつた墓が漸く一般庶民・農民の間にも建立出来る時代となつた事を物語つているのではないだろうか。

「豊穣極楽」と「南無阿弥陀」の語が多く歌詩の中に出て来ることに注目したい。

このことについては後程私見を述べてみたいと思う。次に「からくり」という念佛がある。之も毎月の月並念佛に入つてゐるそうだ。

からくり

一、御念佛 からくる から糸は

三尺三寸の むしつなで

むしずの糸でな からくりて
こがねの文句で 汲みあげて

弥陀様 おまいに 差し上げて
おいとま申して いざ帰る

南無阿弥陀仏 々々

二、どこやいづくの 馬のかわ

太鼓にはられて ごせうかぶ

太鼓の御念佛 南無阿弥陀

三界淨仏 南無阿弥陀

次は彼岸念佛。寺念佛とも謂う。
彼岸念佛

一、帰命頂來 有難や
弥陀の光か 寺がらか

さては淨土の ちえがらか
南無阿弥陀仏 々々

二、帰命頂來 この寺の

香の煙りは 細けれど
天に上りて 雲となる

雲は何雲 五色雲

五色の雲の御来光

おがませ給えよ 吾が親に

南無阿弥陀仏 々々

春秋の彼岸の時期は一番気候の良いときである。春は寒い冬も過ぎ草木の芽は一齊に吹きはじめみどりとなつて来る。大麦小麦（今は余り見かけないが）の葉も一段と萌えて春をうたいあげているようだ。かげろうは立ちいよ／＼農作業は忙しくなる前のホットする時期が春の彼岸である。

秋は又暑い夏も過ぎ吹く風も涼しくなり稻の穂も出揃い穫実期

である。丁度稻刈前である。寺をつゝんだ森の静寂と墓参りの人々の群れ、極楽浄土とはこの様な景色ではないかと歌っている。
墓参りの線香の煙りは寺や墓地をつゝんで五色雲の様だ。それに太陽光線が映えて御来光の様だと歌っている。

次に家見念佛（火ぶせの念佛）を誌す。

火防せの念佛

一、帰命頂來 こんにちわ

これのやかたえ まねかれて

おにわさきを ながむれば

あら あら 起して 地ぎょうする

あきの方から土よせて

土方や手人や たのみ人

仕事師 木やりで地ぎょうする

大工は絵図しく 土台しく

東のじょうやは よねがたつ

南のじょうやは せにがたつ

西のじょうやは かねがたつ

北のじょうやは 悪魔よけ

お祝い ことぶき ろめでたい

二、帰命頂來 こんにちわ

これのやかたえ 招ねかれて

いづくの大工が 建てたやら

四方白壁 霜柱

氷の梁^はで 雪のけた

雨のたる木で つゆの草
板えんまでも 水はりで

火ぶせの念佛 おめでたい

三、帰命頂來 こんにちわ

これのやかたえ 招ねかれて

勝手元を 見申せば

十二のかまどを ねりあげて

東切りまど せにすぐれ

白きねずみが 導きて

よねを くわえて お倉ゆき

お祝ことぶき お目出度い

四、帰命頂來 こんにちわ

これの館え 招ねかれて

一家親類 呼び集め

かねや太鼓を そろひいて

家見念佛を申します

お祝い ことぶき お目出度い

五、帰命頂來 こんにちわ

これの館へ 招ねかれて

伊勢に 棚名に 秋葉山

火防せの箱を したためて

これがお宿の おみやげに

お祝い ことぶき お目出度い

家を新築すると主人は念仏講にお願して火防せの念仏をやつて
いたゞく。新らしい家を見せていたゞく（家見）と共に火防せ念
仏を、申しあげ「火災の難」から守るとの意味だ。歌詩の意は誰
にも理解出来よう。

伊勢の大神宮様も榛名山神社も秋葉山もみんな火防の神様であ
りおふだがいたゞける。

個人なり代参なり神参りして帰つてくると火防のおふだとおみ
やげを隣り近所や親せきに配つたものである。以上のような風習
も昭和三十年頃まではあつたが今はやらない。

次に「ひょう念仏」を紹介する。

「ひょう」は雹である。夏のはじめより天候の急変により多く
は雷雨と共に雹が降る。

毎年四月十日にやるので「十日念仏」とも言う。

雹念仏（十日念仏）

帰命頃来 榛名山

榛名のお池の 竜神は

いわれ いかにと たずぬれば

三代公の 御代の時

五百五十の 旗本に

大越金兵衛の娘にて

一人娘の 姫君は

男子二人をもうけしに
数万の人の為なりと
榛名のお池に身を沈め
二人の子供は恋しさに
姫君くと呼ばれて

姫君姿をあらわして
吾の姿は竜神ゆえ
二人の子供は驚きて

兄上様は 善光寺
弟君は 真言宗

親子三人もろともに

多くの人の為なりと
数万人助けんと

雹念仏をとないつゝ

姫の えんにち 三月十日なり

おいわか 男女 集りて
朝のムツより 夕六時

南無阿弥陀仏と唱へれば

雹の難も のがるべし

この有難さ 世にひろめ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

東京のお盆は七月であるが田舎のお盆は八月である。お盆の念
仏に「かまのくち」と言うのがある。八月一日を「かまのくち」

と言う。死者があの世に行つて初めて迎えるお盆、八月一日は子供達、近親者が集つて高灯籠を立てる。そして十三日には盆棚（精霊棚）をつくる。そして家族はちょうど死んを持つてお墓に死者の靈を迎えてゆく。この燈を精霊棚に移して拝む。お供物をする。八月十五日の午後こんどは死者の靈（燈）をお墓へ送つてゆく。これがお盆の行事である。

かまのくち

一、極楽淨土の門があく

高灯籠 立てなよ 高く立て

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

二、七月なかばの十三日

六尺巾に棚つりて

初物 皆あげて

色よき花をば 差しあげて

三、仏は宿えと急ぎ足

宿では仏を待ち受ける

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

次に葬式のときの念佛、忌中念佛、とむらい念佛とも言う。この忌中念佛は順があつて一つの儀式とも言える。その次第は次の通りである。（一～九は順序の番号）

一、さんげして 「三回唱へる」

我が所造 諸惡業

皆由無始
従身語
一切我今皆懺悔

貪瞋痴

意志所生

二、しみょうはっしん （一回唱える）

まかびろう しゃなぶつ 南無大恩

きゅしう 祢迦牟尼如來南無極樂世界

ほうがんしゅは 阿弥陀如來

南無びょぶかい 十方世界

しゅだいぼさつ しゅ天でんじ

三、おんばつけ （二十一回唱える）

おんあふきや べいろしやのう

なかばたら まにはんどま

じんばら はらぱりたや うん

四、十三仏御題目（三回唱える）前文参照

32ページ

五、四方がため（一番から四番まで）

前文参照

33ページ

六、岩舟

帰命頂來 岩舟の

岩舟地蔵の はすの池

ぐせいの舟は うかれくる
もとは白かね ろはこがね
ろくじのみょうごに帆をあげて

地蔵ばさつはサオのやく

觀音 勢至 はかねのやく

かねうつ しもくで かじをとる

西へ西へと おのりある

西はさい方

弥陀如来

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

々忌中念佛

帰命頂來 十七が

かんの手先に 手をかけて

これからくるのが 親ござま

にきの彼岸の 七月の

七月十三日の はすのはで

みづむけ たのむよ みそはぎで

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

帰命頂來 野辺のさき

あまたの人に おくられて

死出の山路で あと見れば

都の里は 遠くなる

極樂淨土は 近くなる

これから先は 一人旅

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

八からくり（一番二番）前文参照

35ページ

ごぶつほうがん りき

むう みよう ゆくおう

じよう かい しつとう

しこく しじよう 不退転

いんどうさんの じようほうかい

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

三回唱えて終りとなる。

それから忌中膳が出てごちそうになり子供一同や親戚一同、当家より御苦勞様と金一封と引出物が出るのである。

子供の仏様には「さいの河原」と言う念佛がある。

さいの河原

さいの河原の お地蔵様

さいの河原の 子供らは

ふたつや三つや 四つや五つ

十にも足らぬ 幼子が

小石を集めて 塔を組む

いちじう組んでは 父恋し

にじう組んでは しゃば恋し

そこへ 鬼めが立ちよりて

積んだる塔を 打ち破り

そこで子供は きやあと泣く

そこえ お地蔵様が立寄りて

しゃく杖や 衣にすがりつき

今日こそ オれを親と見よ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

高野山

帰命頂來 高野山 女禁令の山なれば

松はあれども 女松なし
枝はあれども 女竹なし
枝さえ とまる 烏さいも
おすはあれども めすはなし

二人 はしやなぎ かがみやま
なかには ろくごの はしごある
念仏申さぬ その人は
糸より細いと 見てわたる
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

先祖の功德は するがよい
借りたる物は 早かいせ
とかくあるもの かしてやる
けんか口論 せぬがよい
義理 恥ばかりは かかぬ様
常々心にかけたなら
七福神が 舞い来る
これがすなわち 福の神
お家ますます ごはんじょう

福の神

帰命頂來 皆様よ
福の神様 まねくには
天とう様より 早おきて
親に孝行 よろこばせ
神や仏を 敬いて
先祖のことを 忘れずに
やしきをきれいに 掃除して
夫婦の仲も むつましく
親を大切 子を愛し

一、これさまの お丹那様は
親の法事を いたします
石塔に戒名 うつされて
親とゆう字を おがむには
なないのひざを 八重におり
おがませ給よ 吾が親よ

その日の家業を 意らず
となり近所は 大切に
通す事は 親とおし
知らぬ事は 聞くがよし
知りたる事は 教えべし

二、これさまの お丹那様は
親の法事を いたします
しんせき一同 よびよせて
念仏申しに 沙汰をして
まれなるとうばを 立てまして
立てたとばに うぐいすが
止ってホケキョを 呼んでいる

三、これさまの お丹那様は
親の年忌を いたします
石塔にお花を 立てかけて
嫁ごにとうばを かつがせて
孫子をつれて 墓参り

念佛行者

帰命頂來 ごしょ願い
春の弥生に ほととぎす
父の為とて 高野山
母の為とて 羽黒山
菩提の為とて 伊勢參宮

長いの ちようしで飲む酒は
泉の酒で 甘露なり

念佛行者の 人々は

諸仏 菩薩の 恵みにて
福禄無量で 日をおくる

念佛歌詩の紹介は以上で終りとする。

三、「豊穣極楽 南無阿彌陀」に就ての私見

前文「四方がため」「おとき念佛」には「豊穣極楽 南無阿彌陀」の語が多く出てくる。昔々この念佛がつくられた時代は「五穀豊穣（米麦、豆ひえ、あわなどが豊作であること）は極楽世界」ではなかつたかと思われる。食物が腹一杯たべられて雨のもらない家に住めることは最も小さな極楽と理解される。又大衆の願望であつたと思われる。ならば地獄世界とは？ それは飢餓である。最近の飢餓地獄はアフリカ、エチオピアなどの旱魃による姿ではなかろうか。一日一食の食事さえ満足にとれない西アフリカの子供達。一人当たり二〇〇円あれば一ヶ月の学校給食がまかなうる新聞は報道している。

千本松原 植えそろい
中には泉水 その中に
め亀 お亀が 舞い遊び
三階松の 二の枝に
男女の鶴が 集りて

大きづ小さづで 巣をつくる
十二の玉子を 生みそろい
その鳥 立つとき 日を選む
諸仏 菩薩が集りて
金のさかずき 銀の台

然し日本の社会にもこれに似た飢餓地獄が大正時代、昭和八、九年頃とあったのである。次に大正二年々末の飢餓地獄を紹介す

る。

週刊ポスト 九二七号 「平和の失速」には次の様に記述されている。児島 裏 著所収

大正二年十一月のやまと新聞には北海道、東北地方の凶作が報道された。

北海道の農民は「楮の実」「キャベツの根」「しいな」を食べ、東北地方では餓死者を記録した。欠食児童が増え「アワ」「ヒエ」などの弁当を持参する生徒はうらやましがられ、ジャガイモ一個、それすら昼食時に食べられぬ生徒が多くなった。

学課の授業には耐えられても体操の時間になると栄養不足のため卒倒する者が出て次第に休校者が増えだしたと新聞は伝えた。

米も味噌も金があれば買えるが夏の水害と早い冬の訪れは作物を育てず収穫のない農家にとっては収入がなく、雪で出稼ぎ場もせばめられるので文字通り「草根本皮」で飢えをしのぐことになるのである。

飢えは学校に通う児童だけでなく教員もおそつた。町や村の住民が困窮して税金がはらえないでの町立村立の学校の教員の給料も支給できないからである。

福島県では自分の家を「薪」として売って飢えと寒さをしのごうとする農家があらわれた。あらわら家にせよ独立家屋を炭より安い「十五、六円で売り納屋、馬小屋、急造の掘立小屋ですごそうとする。

「昆布」のような衣類を身につけ「石」のようなフトンに横たわり、ムシロ一枚で吹雪をしのぐ有様は「方丈記」の世界だ。と採訪した新聞記者は嘆声した。

上野駅には毎日買われた北国の娘たちをのせた列車が到着していた。女工、売春婦などに売られる娘たちで市内各所の遊郭に、「色白で口の重い新顔」がふえはじめた。

東京でも貧困者の生活はより一層の苦しさを加え年の懶をむかえて貧困者の子供のかよう「特殊小学校」では栄養失調とわかる顔が急増した。校医は失神する児童をみると薬よりも「牛乳とパン」を与えるようになったという。

「世は不景気なり、少くとも不景気が襲来しつゝあり新年は如何なる年ならんか、吾人は異変と騒動を感じるものなり」東京日本新聞はそんな予測をこころみたが東北の惨状も東京の貧窮者も当時は一般世相の一部とみなされがちであった。

以上が飢餓地獄の様相である。一般世相の一部となされがちであつたと書かれているから、その時代或はそれ以前には度々この様なことがあつたにちがいない。だからこそ人々は「風雨順時、五穀豊穣」を神仏に祈願したものであろう。（神社の鳥居、寺の鐘などに刻まれているのを見る）念仏に現われる「豊穣極楽、南無阿弥陀」とは五穀の豊穣を阿弥陀如来に祈願したものであると思ふ。

天候に恵まれ作物が豊かに稔り、食物に困らぬくらしは庶民にとっては「極楽」であつたと推察されるのである。

今の時代は毎日が飽食であるから昔の人から見れば、毎日が「極楽」であると思う。

又歴史上から見ても徳川時代後期の「天明の大飢饉」と「天保の大飢饉」が有名な大飢饉である。「読める年表」江戸篇II執筆左方郁子より引用して見る。

卯歳の飢饉「天明の天災と飢饉」（一七八三年）天明の大飢饉

おこる。天明二年は雨が多かった。諸国に洪水があり田地に被害が出ている。雨が多いと東北は冷害になる。津軽では土用になつても冷風やまず収穫は四分作にとどまつた。

天明二年の冬から三年の春にかけて異常な暖かさであったが、冬暖いのは農業にとつてよい傾向ではない。果して天明三年の五月ごろから冷気に転じひよる長になつた麦は実のらずに腐り、田植のシーズンになつても寒さはひどかつた。七月に入り浅間山が大爆発した。江戸でも一寸もの灰が積り遠くはなれた仙台でも降灰があつた。地元の被害は大変なものだつた。いまも「鬼押出」にその猛威をしのばせるが上州吾妻郡側に流れだした溶岩は利根川筋で二万人を殺し、江戸の大川に人馬の死体が無数に流れてきたという。

溶岩の流出のなかつた側の家屋田畠も厚い灰の下になり往来には昼食時でも提灯が必要だつたといふ。大爆発の灰が大量に舞い上ると天候にも影響する。灰が太陽光線をさえぎるからである。そうでなくとも冷害の年だつた天明三年はこの浅間山の爆発で拍車がかゝつた。土用でも綿入れが必要だつたというから夏は存在しなかつたも同様である。

凶作の被害は凄まじかつた。仙台藩だけでも餓死者四十万人、収穫は一割も無かつたといふ。前年すでに被害が出ていた津軽藩では藩当局が米四十万俵を江戸・大阪に回送するという失政が重なつたため餓死者十三万人他国への逃亡者二万人、空家絶家三万余、一村ごとごと荒無地となつたところが多かつた。東北地方はどこを旅しても死骸ばかりで子を殺して食う母親まで出現

した。

と伝へている。又それから五十三年後に起る天保の大飢饉と當時の騒動を次の通り伝えられている。

天保の大飢饉と郡内騒動（一八三六年）

いわゆる天保の大飢饉のことである。

天保の初年から続いた連年の飢饉のことであるがそれが頂点に達したのが天保七年だつた。この年には諸国風雨はげしく洪水などがあいついで凶作の様相がはつきりしてきた。

天保改元の前の年すなわち文政十二年（一八二九）は歴史的大豊作だつた。村々の小道に米粒が散乱するほどだつたといふ。古老たちがあまりの豊作にまた大飢饉が来るまえぶれではないかとささやきあつた。

その心配どおり天保元年二年と不作が続いた。三年は少し良かつたが四年はひどかつた。

低温、多雨に加えて奥羽大洪水・関東大風雨で本格的な凶作となつた。東北一帯は収穫皆無、信濃越後は三分の一、四国も三分之一、九州中国近畿が半作ないし三分の一といふ有様で東日本で餓死者や疫死者が続出した。

また田畠を捨て妻や娘を女郎に売り乞食となつて他郷を流浪するものがおびただしい数にのぼつた。

天保五年は豊作だつたのだが前年の影響で米価は下らず庶民の生活難は続いた。六年も同じ状態でいよ／＼天保七年を迎えるのである。被害がもつとも大きかつたのはこのときもやはり東北地方でたとえば津軽藩では四万五千余人の餓死者を出している。飢饉の深刻化と対応して百姓一揆も天保期には最高数となる。闘争

の形態も逃散→越訴→強訴→暴動、打ちこわしとだんく集団暴力的に變つていった。

この年の八月に蜂起した幕領甲斐の郡内騒動も一揆の最終形態である。暴動・打ちこわし的性格も強くなっている。

このとき郡内人口六万七千余のうち二万人ちかくの餓死者が出来るという慘状にもかかわらず、地主穀物商人が食糧を買い占め売る惜しみをして事態をいつそう悪化させていった。

絶体絶命に追いつめられた郡内地方の百姓からまず、下和田村の武七と、犬目宿の兵助が立ち上った。武七は特高一石の貧農であり、兵助は階層不明だが計数に明るかつたらしい。彼らは、はじめ張り札などの手段で一村単位に農民を結集しながら甲州街道を西に進むにつれて、二三千の貧農、日雇が参加してきた。八月

二十一日五万人にも達した一揆勢は国中平野に足を踏みいれたところで暴動となつて爆発、富農、豪商を襲つては打ちこわし無政

府状態となつた。結局甲府勤番の手に負えず諏訪沼津両藩の出兵によつて、鉄砲の乱射によってやつと鎮圧された。

逮捕者千百余人のうち六人がはりつけの刑となつた。この郡内騒動は全国の支配層に「下民おそるべし」という強烈な衝撃を与えた。徳川幕府は政治問題にも社会問題としてもとりあげなかつた。強権をもつて鎮圧したのである。

昭和八・九年の東北地方の大凶作は今も昭和史の中に大きくとりあげられている。

満州建国、農業開拓移民、青少年義勇軍又二二六事件等の背景その後の日中戦争、太平洋戦争等を指導した軍事政権、今なお続く中国残留孤児等々に影を引いているのである。

戦時中食糧管理法が制定され限られた食糧を公平に分配する手段とされた。

敗戦後の食糧不足時代も国連の食糧援助により飢餓地獄の危機から脱することができた。

昭和三十年代に入り食糧の不足時代は終りとなる。以後飢餓地獄は生じていない。

昭和四十五年を境とし米の生産過剰時代となり生産調整・減反政策となる。昭和六十二年に於ては全国の水田三分の一は稻をつくらない、米作りを休むという時代になった。

「豊穣極楽 南無阿弥陀」の念佛歌は前述のような凶作、飢餓、餓死などの時代に生れ生きて来た人達の「願意」ではなかろうかと思うのである。

六 むすび

念佛歌は多種多様のようである。農村集落でも所によりそれぞれ異なるようである。

乏しい資料により記述したのでまとまりのない所があるがお許しをいたゞきたい。

徳川時代より発生したと見られる新川町の念佛講であるが明治大正、昭和の御代とそれく歴史に刻まれた諸々の事件史を読んでゆくと念佛を唱へ説教を聞いたであろう人達の姿が彷彿としてくる。

今や念佛歌は一種の古典芸能といつても過言ではないと思う。以上をもつて新川町に伝承される念佛講の紹介を終る。

維新の焼打ち騒動

本間清利

慶應四年（一八六八）一月、鳥羽・伏見で薩長軍と交戦した幕府軍は大敗し、将軍慶喜は大坂城から海路江戸に逃げ帰り、上野東叡山に入寺して謹慎の意を表しました。しかし薩長を中心とした討幕派はこれを許さず、東征軍を編成して東海道と東山道から江戸に迫りました。このうち東山道軍は三月六日には本庄や熊谷を制し、先陣は忍藩の拠点羽生に軍を進めましたが、九日には東山道總督岩倉具美が羽生を通過し板橋に向かっています。この間官軍への恭順か抵抗かその去就を明確にしなかった忍藩は、翌日許しを乞うため重臣が羽生陣屋に官軍をたずね、帰順の接衝にあたりましたが、官軍は忍藩をとがめて取り合わなかったため、重臣は責を負い八幡宮境内で切腹しています。

このとき羽生近辺の農民は、幕府の圧政に苦しんでいると称し、羽生陣屋の焼払いを官軍に進言、官軍はこれに応じ羽生陣屋と川俣村の寄場組合大惣代堀越家を大砲で焼き払いました。これを合図に官軍を味方と信じた何百人とも知れぬ暴徒が一せいに蜂起、幾隊にも分かれて富裕な農家を軒なみに火を放つて焼き払っていました。この焼打ちにあつた家は羽生・騎西・加須・菖蒲・鷲宮・幸手・栗橋に及びましたが、金品をねだり取られた家を含めると数百軒にも及んだといわれます。この焼打ち騒動は、十日から十五日まで続きましたが、これに対し東山道總督府は「無頼の良、大阪、四国琴平、京都方面旅行に参加された新井秀三郎氏の

悪徒など良民を誘い、罪なき人家へ押し入り、金銀を奪い取り候趣、もってのほかの事に候」とて、暴徒の鎮圧を諸藩に命じました。この藩兵の出動で捕えられた暴徒は少くなかつたようですが、なかにはその場で極刑に処せられた者もいます。

たとえば三月十二日に捕えられた菖蒲横町髪結渡世鎌吉は「この者ども党を結び、諸々の村々へ罷り越し、有福の家より米金を出させ、しかのみならず放火は藩中（実は官軍）の名を借り、威權がましく申し募り惡行せし罪のがれがたく、誅伐を加へ首をさらし諸人にみせしめ置く」として、現地でさらし首の極刑に処せられています。この暴動は越谷地方までは波及しませんでしたが官軍あるいは幕府脱走兵の名を借りた強盗集団が富裕な農家に押し入つて強盗や殺人を犯したり、小作人の集団が地主を脅迫して土地の返還を求めて騒ぐなど、しばらくは無警察状態の混乱が続きました。こうしたなかで村々は自衛のため、武装した民兵を組織して警戒にあたるなど緊張の日々を送っていたのです。

古文書に見る

伊勢參宮旅行について

鈴木秀俊

この古文書は明治二十一年二月二日から同年三月十七日まで四十五日間、南桜井村（現庄和町）香取神社不怒講一行の伊勢、奈良、大阪、四国琴平、京都方面旅行に参加された新井秀三郎氏の

記録である。

新井氏は安政三年一月六日、南埼玉郡大野島村（現岩槻市）に生れ（旧姓小林氏）明治十三年七月十一日中葛飾郡（現北葛飾郡）南桜井村（現庄和町）西金野井新井家の養子となる。この旅行當時の年令は三十三才であった。尚、現在の御当主は正男氏である。

当時の世情は、維新後も長く続いた混乱が漸く治まり安定に向つゝあつた。一方では、文明開花が急速に進んでいた頃である。

一行が利用した乗物は汽車、汽船、帆船、馬車、人力車と様々であるが、かなりの部分は徒步によるものである。

第一日の記述に「遠藤丸に乘込み出帆す」とあるように西金野井は江戸川沿いにあって、舟運に恵まれた土地である。西金野井は埼玉県の東端に位置する。（東武野田線南桜井駅東方約一秆）埼玉、千葉の県境を流れる江戸川は寛永年間に開削され、下総国金野井村は東西に分かれて、対岸の地は東金野井と呼ばれている。

尚、近くの宝珠花は舟運によって繁栄した処で、現在は五月節句の大風が有名である。

ところで当時、東海道の宿駅はまだ江戸時代の名残をとどめているが、处处に鉄道の建設が進められていた。東海道線はすでに新橋—国府津、京都—神戸間は開通していたが、全線開通は明治二十二年七月一日のことである。但し、直通列車の運転は一日一往復であった。その外に、日本鉄道株式会社によつて明治十七年、上野—高崎間が開通しているがその後更に横川まで延長された。

明治とはいゝ、一行の旅行はきびしい。午前五時旅宿出立が十

八日、六、七時出立が十二日ある。二月の午前五時は暗く寒い、それから十時間も歩いて、次の宿に着くのは午後五時から六時になる。雨や雪が降れば、わらじや着物が濡れてずいぶん辛かったと思う。

もし、旅中に病氣や怪我をすれば、故郷へ生還すら覚束ない。しかし、旅には未知の憧れがある。

名所旧跡を尋ねる楽しさ、靈験あらたかな神社仏閣を参拝する喜びが、一刻疲れを忘れさせてくれた。

二月十五日、明星駅旅舎三田屋から、一行は一人毎に竜太夫の目印を立て、新しい人力車二十七台を連ね、伊勢山田外宮元御師竜太夫方に向う三里の道は「この日、實に名譽の道中にして一同喜悦の色を顯せり」と喜びの表情を率直に記している。

翌日、内宮神楽殿の太々式を無事に終り、竜太夫に於いて、山海の珍味と美酒で善美を尽した馳走をうけ、古市の伊勢音頭見物に一同揃つて出かけた。備前棲の賛を尽した座敷で見た美女の踊について「その善美たるや、實に我輩の筆鋒に書き尽すことあたわづ」と。

さすが関東にも聞こえた古市の華麗さに驚嘆している。

二月五日一行が人力車に乗り、興津から江戻に行く途中、偶然、徳川慶喜公が自転車に乗り、お供を連れて通るのに出逢つてゐる。

唯「容体常人に異なれり」とあつさり書かれているが、徳川から明治に、世の移り変りを見てきた人達の胸中に、どんな感慨があつたろうか。因に、西金野井は江戸時代幕府御料所であつた。以上は私が解説しながら思つたことを書いたが、旅費については残念ながら想像するよりほかはない。

「伊勢地方漫遊記行」は原文書通り写したもので、句読点、言葉遣い、漢字の読み方など、難解な点があろうかと存じますが、よろしく御判読願います。尚、後半については次回に書きたいと思います。（参考 鉄道の日本）

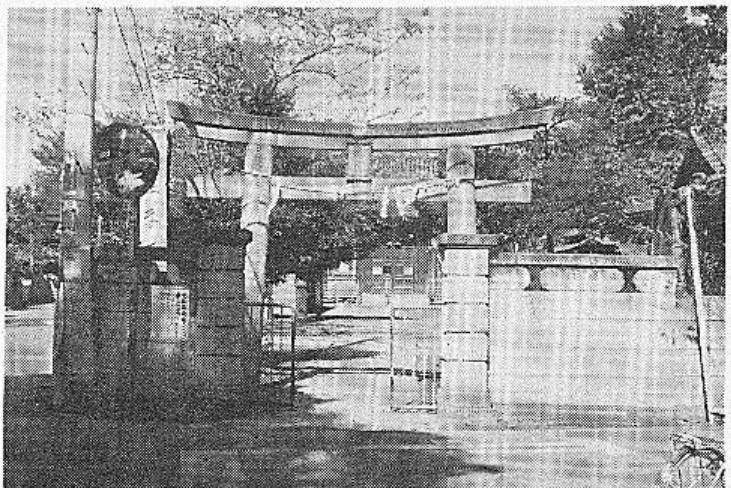
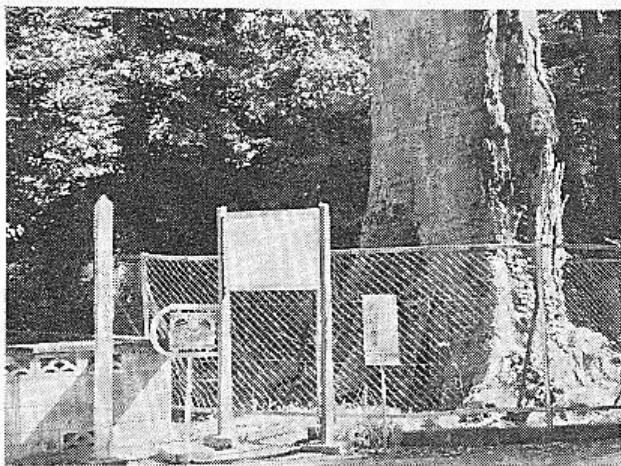
参考

香取神社

北葛飾郡庄和町西金野井一〇〇九の三

祭神 経津主命 木花咲耶姫命

旧郷社、創立は明らかでないが、古くから鎮座されていたらしく、鎌倉時代の徳治元年（一三〇六年）三月十六日に本殿と拝殿が再建されたと伝えられる。また、神田職取大神と呼れて



いたともいわれる。室町時代に至り、天正一四年（一五八六年）相州小田原北条氏から貫高二貫文の寄進があった。その後、金井郷金井大神と称し、天正一九年（一五九一年）徳川家康から一〇石の朱印地を寄進された。同年一一月社殿を再建。明治九年郷社に昇格、同四年愛宕浅間社を合祀し、昭和一九年一月一〇日香取社と呼んでいた社名を香取神社に改めた。本殿は室町末期建立（県指定文化財）毎年四月一五日奉納されるシシ舞は、東部系の特色を持ったもので県の無形文化財に指定され

ている。

境内には大けやきがあつて、樹周七・九米。枝下一二米の直幹。県指定天然記念物。

参考 埼玉郷土辞典（埼玉新聞社）

伊勢地方漫遊記行

新井秀三郎

明治二十一年二月二日晴穏なり。此日、尤も良辰をトせし日にして、村内氏神香取神社へ午前八時社員一同参集し、講頭より、兼て、約せし不怒講と称する趣意を陳べ、皆、承諾の捺印をなす。（是は社員一同旅中にて、いづれの事故出来ると雖も、怒りの心を発せず、心静にして理由を尽すと言う意なり）午前九時、川岸、岩井氏の庭に一同を揃へて送別の祝宴をなす。時に社員中の親戚知己の男女群集する事凡二百名余。午前九時三十分、遠藤丸に乘込一同出帆す。

時に西風吹いて進行する事汽船の走るが如し。正午十二時、字一本木といふ處にて午飯をなす。尚、船人勤めて下流し、午後四

時、市川駅の西岸へ上陸し、夫より道を急ぎ、七時、馬喰町旅舎

梅屋次平方へ到着す。而して夜に、社員金井氏の男貞憲氏、旅中見舞として餞別を社員に呈せり。一同喜びて是を請り。

又曰く、今回は日数長き旅行なれば、旅舎の堅固なるを撰まん事を議せしに、一同新講社が宜しからんと言ひ、是に決定し其の証に認め、午後九時枕に付く。

二月三日晴穏なり。午前七時梅屋を発し、社員各市中に用事あるにより其用を弁じ、午前十時には必ず新橋の停車場にて待合す

る事を約し、各心にまかせて散乱す。而して約せし如く、午前十時停車場に集り、東海道国府津まで汽車に乗る。此間、程ヶ谷、戸塚の間、石山の麓を穿ち、此中を通行す。凡て三分間暗夜のごとし、氣色一寸寂然たり。午前十時藤沢を経て平塚の停車場に到る。此処、右に諸山を観、南は海に浜し眺望極めてよし。

大磯を経て国府津に到り、松仙と言う飲食店にて午飯す。「却説」此所は旧來の宿駅に非ずして、今回、汽車停車場を設けしにより、凡そ人家四五十軒も新築せしものと見えたり。

夫より、箱根萬翠楼に着す。此湯本は箱根七湯の一にして、尤も有名の浴舍なり。前に急流を帶び、樓々是に対し二階あり三階あり、各室清潔にして実に美麗なり。

社員一同、無事楼上に登り祝宴を開き、酒酣にして晩餐をなさんとせし時、婢女三四名出で来り、各員の椀に飯を盛ること甚だ多くして、既に山のごとし。（此萬翠楼は、旧年より伊勢參宮の旅人へは、納めといふて飯を山の如く盛るを例とす）為に一同興じて、大いに笑いて始めて郷里の事を忘れたり。

時に頭上見れば、成島柳北氏の書あり

起臥紫嵐蒼石問

斯郷自是小山實

潤聲遠近水連水

雲陣東西山擁山

鳥亦不啼天意靜

酒何相忘窈戶閑

憾他多少舊詩伴

早己倦遊先我還

小生も是を読みて、尚佳景の情を感じり。又各入湯する事數回にして、おもひおもひに枕に付く。

二月四日晏午前五時萬翠楼を発し、箱根の峠に登る。此時、夜未明にして、山間に歩する事一里にして須雲川村に到る道傍に鳥

居あり、是則箱根神社なり。因つて此鳥居に入る事十二丁にし
て、大杉四方に擁す西に湖水あり、是を箱根の湖水といふ。対岸
に離宮ありて、此処にて眺望すれば、景色極めて絶景なり。時に
雪降り来りけれども、尚道を急ぎ、十一時漸やく箱根駅舎花屋四
郎左エ門方へ到着す。酒食をなし始めて蘇生の思いを成せり。而
して、又山に登り、又下りて三島駅に到る。

当駅に県社三島神社ありて是を拝す。拝殿あり、奥殿あり、神
樂殿あり其他種々の小社ありて境内極めて広く、且美麗なり。是
より道を右に採り（此處は小田原より伊豆を経て三島へ来る道な
り）沼津駅まで、里程一里十九丁馬車に乗り金四錢を投ず（是は
社員一同馬車に乗り一人当たり割合なり）午後三時二十分、雪止み
て大いなる西風に変じ、車上寒さ覚ゆ。午後五時漸やく沼津駅旅
舎虎屋九十郎方へ一同無事到着す。此旅舎は上等の構造なれども、
方今余り流行せざる風体に見えたり。午後九時、各員大いに労を
覚え晚餐して伏す。（却説）此沼津駅は諱岡県にして裁判所等設
置ありて、我地方柏壁駅位の駅並にして、少數盛昌に見えたり。

二月五日晴午前五時虎屋を発し、新道まで馬車に乗り、此間四
里半賃金十一錢を投ず。東海道鉄道は、上田村と言ふ処にてレイ
ル横断す、且つ新道より原駅を避けて、新道里程二里を歩行し、
神原駅旅舎吉田常七方に到り午餐す。此処、東に不二山足元に突
出し、西は海に浜し實に善き景色なり。詠じて

右は海東は不二の沼津駅

旅の疲れもしばし忘れん

而して、神原駅（蒲原）より沖津駅（興津）の間三里を歩行し漸
くにして興津駅水口屋半十郎方へ到着す。此旅舎は南は海に浜し、

田子浦、三保の松原、駿河の不二山等見え景色よし、又二階に副
島伯一碧楼の筆あり。午後九時枕に付く。

二月六日晴午前五時水口屋を発し、荷物は水口屋主人に渡し歩
行する事七八丁にして、清見寺と言ふ古寺あり。其門前を穿ち鉄
道を敷、上に橋を架し、其橋より入り清見寺を拝す。後に山を負
へ、前は海に浜し三保の松原を見、景色尤も佳し。且つ境内に五
百羅漢あり、内二体は、太古海中より採上し物といふて、五百の
内に尤良作なり。又榎本伯枯松の碑、徳川家康公手植の松等あり、
尤も珍重なり。

是より道を久能山に採り、興津駅より江尻まで人力車に乗る。
一里八丁にして賃金十二錢を投ず、途中、徳川慶喜公自転車に乗
り、一僕を召つれ行逢いたり、容体常人に異なれり。江尻より歩
行して漸く久能山に到る。此社は石山にして直立五六丁位と覚ひ
石段幾折とも知らず、上は則ち家康公の古廟あり。

其他公園は石亭にして、眼下より海を見晴らし、眺望極めてよ
し。因て、小生外五名此處に休憩し居りしに、後れたる社員亦き
ケットヲを覆ひ遙に群をなして、登り来るを見る、實に小童子の
如し。既にして一同を待合せ、久能山奥の院を拝す。其見事なる
事格別なり。夫より下山し、麓の豆腐屋李兵衛方に到り午飯す。
是は廉価にして深切なり。午後一時出立、静岡まで里程三里を行
し、午後五時静岡駅東萬屋清三郎方へ到着す。暫時休憩しけれ
ども、日まだ没せざるに依り一同浅間神社へ参詣す。此社は東萬
屋より凡十丁余ありて、實に美麗の社なり、拝殿は八ツ棟作り、
内には狩野伊川法印の画ける竜あり、奥の院には左甚五郎の作鶴
鶴其他共、細工真を写し、尤驚くべき妙作なり。其社には、駿河

国安部郡静岡公園鎮座県社浅間神社、神部神社、大歳御祖神社也。又別宮に郷社麓山神社あり、且神樂殿あり、回廊あり、此軒に名画の額數多併列し、實に風致を存せり。且庭内に、

今般内務省ヨリ其社保存金ノ内一金四百円下附相成候ニ付下渡候条永遠保存ノ方法 相立毎年末計算書差出スベシ

明治二十年六月一日 静岡県

右の建札あり「却説」此静岡は旧名を駿府といふ、徳川公の古城にして、治安裁判所、輕罪裁判所、中学校高等小学校を併列し、町家は凡一里余にまたがり、尤盛昌の小都會なり。帰途微雨に逢い、日没して一同東萬屋に帰れり。夜に入り降雨甚敷、社員一同明日を案じ枕に付く。

二月七日幸いに晴穏なり。社員一同喜悦せり。午前五時静岡を発し、一里十八丁にして阿辺川（安部川）あり、名物阿辺川餅あり是を食す。又阿辺川橋長二百間なりと（此側に東海道汽車道鉄橋を見る、前後まだ工事中）

又鞠子駅より岡部の間二里、此間石山を穿ち新道を作るあり。是は汽車道にあらず、土人曰く、長百二十間ありと、中に処々燈を燃せども、暗淡として僅かに光りを成すに過ぎず、暫時暗夜のごとし。岩井氏工事の余り巧みなるに感じ句を作る。

巧みかなうがつ暗路は幾あゆみ

凡そ十分間にして舍婆に出るがごとし。夫より岡部を過ぎ、藤枝に至り旅舎鍵屋伝蔵方にて午食す、時に十一時なり。又島田駅を経て、大井川に懸り、此川は所謂著名の大川にして、是に架する板橋を渡る。（長七百三十間なりといふ、橋代一錢八厘）此川は駿河国と遠江国の境なり、同県にして向は金谷川原町といふ。是

より三丁ばかり上に、鉄道工事人夫穴より軽弁鉄道を以て石を運び出し、小山数多突出し、辺々として眺望美なり。夫より小夜中山に掛り、此山は、目下新道と旧道と二道あり、新道はよく車馬を通すれども、里程は一里を遠し。古道は近けれども峰多くして、旅行に尤苦しむといふ。因て一同新道に入り登れり。頂に古事ある小夜の中山飴の餅、名物にて女人共賣し來り、たわむれて是を商す。一同興に乗じて是を買う。又夜啼石といふあり、是を挙するに、差渡し凡五六尺の丸石に邊に南無阿弥陀佛の書体あり、往古大師空海の作なりといふ。此石を信ずれば小兒の夜啼を治し、及び出産の守りをなすと。因て我輩も其守り札を買求めたり。而して歩行する事四五丁にして、山間に露店あり。内に少婦ありて、又飴の餅を賣、又興じて是を買。又道を急ぎ午後五時、日坂駅舎川坂屋次右エ門方へ着す。

二月八日晴午前五時日坂駅を発し、掛川迄社員一同人力車に乗る。此間二里五丁にして賃金十銭投す。此掛川駅は戸数多くして、各商軒を連ね繁昌の小都會なり。是より道を秋葉山に採り横道に入り、原野屋川に架する長橋を渡り（橋代三厘）長八百間なりと、此時九時なり。然るに社員の内後れたる者あるにより、林の麓に五六人にて腰を掛け待事凡二十分余、是西行か東に下るもかくやあらんと思われたり。漸くにして來り、又歩行して午前十一時三十分森町大黒屋源五郎方へ着す。午飯す。此家は上等の宿にして価尤廉なり。正午出立にて「みくら」「小なら井」を経て丈居川橋を渡り（橋代六厘）午後六時漸く坂下町高木屋安平方へ着す。「却説」此日十里以内の旅行なれども（農夫曰く五十丁一里とい

ふ) 道路は山端にして、實に険阻にして幾百曲りなるを知らず、更に人行を断つ。時として逢ふ者は、鹿、猪、及材木の類を運搬する人夫の外なし。實に驚くべき難渋の道なり、小生も此旅始めての大勞を覺ゆ。

二月九日曇午前五時高木屋を出立、東方まだ明ず。一同秋葉山に登る、此山は登り五十丁にして道極めて険阻にして難渋の登りなり。凡八九合目と覺へし頃、雪降り來大いに難義せり。漸くにして前殿のめき寺に到る(是は維新前神佛混淆の時、秋葉山別當所と見へたり)衣服の雪を拂ひ火に乾し、而して札を迎ひたり。此堂には二品親王識仁公の閣ありて美麗なり。夫より急ぎ御本社、則ち秋葉神社に登る。此山は杉大木道左右に夥敷、且行て本社に到る。社は明治六年御改正の際、神佛混淆相成らず御布令に付、相分けけるにより、新築せしといふて、まだ新敷白木造りの大社なり。又庭の標杭に記して曰く、海水より本社礎まで、南八百六十六メートル四九六八、西千八百五十九尺四寸三分九厘とあり。

境内一新講社はぐらやと言ふ飲食店にて休憩、蕎麦、甘酒等飲食し味能くして、實に寒を助けたり。時に午前九時なり。而して北口へ一里下り雲名村池田屋孫兵衛方へ、午前十時三十分到着す。午餐をなす。此所天竜川の岸にして、山間の家込の所なり。午前十一時三十分、小船二艘を雇ひ、一同中の川岸まで里程十里、一人賃金十銭に約し乗船す。此天竜川は、所謂、有名の大河にして

水勢激流し、為に大船を通ずる事を得ず、小船を以て能く物價を運搬す。是大船を用ゆる時は、船の変化瞬息に成し得ざるが故なり。又地景は両岸高くして、左右に屏風を立てたるが如し。水甚だ清潔にして景色能く、且閑雅の風あり、是支那の赤壁も此くや

あらんと憶ひ、彼の蘇子瞻の「山川相繆て鬱乎として蒼々たり」と言ふ語を思ひ出したり。時に西風大いに吹出し、船の下るを得ず、里程五里にして西岸鹿島に上陸す、回漕店其他四五軒の家ある処なり。最早午後四時五十分なり。是より浜松まで里程五里なりと、其間に一泊すべき所なきと聞、いずれになさんと深く心を痛めたり。然るに折能く人力車を雇い、浜松迄賃金二十八銭と約し、時に西風大にして車上尤寒に苦しむ。漸にして午後六時、浜松旅舎大樂屋市郎右エ門方に着す。且東海道筋にて、関東にては湯本萬翠樓福住九蔵、関西にて此大樂屋市郎右エ門なりといふ説ある。座敷数百ありて且美なり、泊料高けれ共味極めてよし。此日、無事旅行する由、郵便を郷里に出す。

二月十日晴午前六時大樂屋を発し、六七町歩行し字堀留町伊藤松四郎所有の汽船へ一同乗込、此船は小船にして僅か五十人を乗するに足る。新所まで海上六里貨金十二銭、此間にて、右に前坂橋と言ふありて、長千間余ありと、遙かに是を觀る。又浜松も遠く是も見へ景色極めてよし。十時新所村旅舎杉本屋善蔵方へ上陸し午飯す。而して里程二里を歩し、ニタ川駅に到る。是より一里行豊橋駅旅舎糀屋庄七方に午後四時一同無事到着す。「却説」此駅たる旧名を吉田と称し、各商多く並列し分宮あり。且妓樓等数多ありて繁昌の小都會なり。又此駅東はづれに豊橋と言ふ長百間ばかりの板橋あり。

二月十一日晴午前五時豊橋を発し、道を豊川稻荷に採り歩行する事二里にして、午前九時豊川稻荷に到る。大社美麗にして、且つ維新前は禪宗派妙言寺の持なるを、當時住職の知力を以て佛体に祭り、更に称して把枳尼尊天と成し佛に帰せしめたるに依り、

該寺持にて參詣の人常に群をなす。且前門の扉の如きは楓玉もく一枚板にして、實に稀世の構造なり。及び境内廣く堂宇數多ありて、尤奇麗なり。門前に旅舎料理店五六戸ありて、少敷町の体をなせり。夫より二里歩行し、東海道御油駅に出る。夫より赤坂駅旅舎鯉屋六三郎方にて午飯す。而して十二時出立、藤川駅を経て午後四時岡崎駅鍵屋善四郎方へ泊す。

二日十二日曇午前五時岡崎駅を発し、知立迄四里馬車に乗り賃金十一銭と約す。此岡崎駅は徳川家康公の旧城跡にして、道の西少し高き處に位して今僅か外構を存置せり。（方今内に病院ありといふ）裏は水田にして側らに家康公御誕生の時御用の石造の古井戸あり。尚二三丁行きて彼秀吉公の古事ある矢作橋あり、板造にして長二百間余なり。又ハツ橋と言ふありて、是は三河国と遠江國の境半分づつの橋なりと、且つ遙かに三弘法と言ふあり、是は海上人の古事ある有名の寺三つあるよし。午前八時知立神社に到り拝す。知立神社は式内の県社にして水田の中に位し、境内廣く白木造にして可也の社なり。此神は小児の虫を封する事妙なりと、因て小生も虫封じ札及び玉串等を迎ひ、是より鳴海宿甲辰と言ふ飲食店にて午飯す。「却説」矢作橋と桶狭間の間に千人塚、落合村、茶臼山等と言う処あり。千人塚は古、今川義元敗軍の時数多の死骸埋めし処、落合村は戦場より彼千人塚迄首を運びし際、首を過ちて数多捨落せし処なりと。又茶臼山は道の東にあり、直立七八丁位にして、是を隔てる事凡十丁ばかりにして今川義元の本陣を据へし処なりと。夫より四五丁を歩行し、道の左に則ち桶狭間の古戦場なり。是は小山の麓にして、草茫茫々たる原野なり。

今川治部義元の墓及び碑石あり、丈五尺ばかりの古石に刻して「桶狭間古碑」天閣の古碑あり、七勇士の石塔あり、夫より一丁ばかり小山を登れば、頂に義元の一家老松井兵部少輔宗信の墓、側らに松井八郎等の墓ありて、何れも草莽々の中に線香を供し、又露店ありて老婆の菓子を売り居り、實に古跡にして古えを思われたり。夫より車を急ぎ鳴海駅に到る、少し手前に有松村と言ふ所に絞り反物の産物あり、是を鳴海絞りと言ふ。社員の内右反物を購求し、一個に荷造り国元に送る。時に午前十時なり、雪止み夫より二里行宮駅に到る。此処は名古屋と相列し入り口にして、且正月元日の故なるや、老若男女群をなし宛ら我が東京浅草観音市を見るがごとし、其賑ひ甚だし。此駅に鎮座す熱田神社は境内廣く美麗の大社なり。午後四時名古屋駅丸屋さとし方へ到り泊す。此名古屋は凡そ二里四方にして北に旧城あり、有名にして外に掘囲ひ石垣表門の構造方櫓に天主楼あり、是所謂金の鏡鉢等旧を依然として存し、遙に是を詠むれば光々として実に美麗なり。是を尾張御殿と言ふ（下は二十五間四面、上は七間四面、高さ二十五間なり）其後には織田信長の御殿あり、又此城内陸軍鎮台あり、県庁あり裁判所ありて、尤も繁昌の大都会。其地形は狭しと雖も、繁花の地に到ては、東京と少も劣る事なし。

二月十三日晴穏かなり、午前五時二十分丸屋さとし方を発し、名古屋市中を巡覧す。夫より津島に赴く、此間五里車賃金十五銭と約し、挽車に乗る。左右は田畠の耕地にして、我埼玉地方を見るが如し。午前十時津島町みよしや源六方へ着し午餐す。

此町は有名なる牛頭天王の鎮座する町にして戸数凡そ千戸位と言ひ、境内は広からずといへども、御本社は桧の白木造り、神樂殿其の他數多ありて實に貴ふべき社なり。殊に此日は陰曆正月二日にして、近隣の老若男女群りなし賑ひり。又此町の南に御池あり、中に御仮屋ありて御祭典御出輿の際は此處に休憩すと言ふ。夫より一同我地方庄内古川の如き小川の辺りを五十丁ばかりを歩行し、佐谷河内定八方に到り船を雇い、木曽川を船に乘じて下り、此川は浪静かなれ共甚だ広く、且つ川路三里を下り西川岸桑名駅に上陸す。夫より四日市迄人力車に乗る、賃金十錢、道路は平坦にして更に板の如し。車の走る事非常に早し、且つ此間橋多し、午後六時四日市駅白木屋清七方に到着す。此泊屋は上等にはあらざれども、至て深切なり、殊に婢め類も応接方よろし。

二月十四日曇り或は晴午前六時出立。此四日市は有名の港にして汽帆の船舶相集り、尤も繁昌の地なり。追分駅に到（四日市より追分まで一里九丁なり）東海道を左に入り、是則ち伊勢海道にして大鳥居あり。尚一里七丁を行、高岡川と言ふ大川あり、是に架する板橋を渡り神戸駅に到る。此處人家稠密にして凡千戸あると言ふ、尤繁昌の處なり。又一里を行て白子駅に到る。子安觀音あり西国十六番札所なり、堂の天閣に
もらさしとたつる佛のちかひとて
つゝみの浦になるなみのおと

金を以て記しあり。庭に不斷桜といふあり、此木は四季共に絶ず花の咲居る名木なり。此葉信心致し妊娠の時は、出産に先だちて伏せ置ば男子を生ず、仰向け置く時は女児を生ずといふ。又弁才天を安置す、此回り池ありて常々、魚を蓄ふと雖も、何魚にても

必ず一眼になると言ふ咄なしを、彼寺の住職に付て聞けり。尤奇説と思われたり。一同守り札を迎ひ南に出、歩行する事二里にして上野駅に到る。尚二里半を経て二時、津駅村田屋与平方に到着す。此村田屋は表家造りは尋常なれども、奥に珍ら敷美麗の座敷を新築中にて目を驚かせり。然れ共旅客の取扱は粗末なり。「却説」此日まだ二時なるにより一同駅内を巡覧し、此駅は元藤堂公の旧城跡にして、其外囲ひ石垣、依然として存せり。又三重県庁あり郡役所あり、東南に國府阿弥陀佛及び觀音堂あり、尤も賑敷小都合なり。

二月十五日晴穏かなり。午前六時津駅を発し雲津六軒を経て松坂迄馬車に乗る。此間五里賃金八錢八厘を拂ふ（但六人乗りは五十三錢なり）十時明星まで人力車に乗る、金十六錢と約す。柳田駅を通行の際、くりだ川に架する長き板橋を渡り、午後三時明星駅旅舎三田屋三郎兵エ方に到着す。此旅舎は構造は大にあらざれども、上等の旅泊にして至て奇麗なり。時に元御師竜太夫手代浅井安吉なる者、羽織袴を着し下男藤吉其の他を連れ、酒肴を携ひ出迎として出張なし居り、社員夫々の馳走を請け、而して午飯をなす。午後四時全員一名毎に竜太夫の目印を立、何れも新敷人力車に乗り総員二十七名、続々連々として行く事三里にして午後五時伊勢山田外宮元御師竜太夫方へ到着す。時に門前に我社太々の立札をなし、出迎ひ二名を出せり、直ちに玄関より昇館す。「却説」此日実に名誉の道中にして一同喜悦の色を顕せり。又我国元より郵便到着し居るあり、是は社員君村氏より親の方へ信書なり。余白に國元も無事の事情を記載あり、總員尚喜悦の事となれり。此夜竜太夫にて馳走を請け、午後八時一同枕に付く。

二月十六日晴、社員待設けたる太々式の日なれば、式に先だち玉串、剣先札を注文すべき旨、手代鈴木伊三郎より注告により一同是を注文す。午前七時總員人力車に乗り、各車に太々の目印を表し内宮まで里程一里半、相ノ山、古市を経て五十鈴川に架する橋を渡る。此川巾凡三十間余、水至て少し。此橋の下に長棹の先に網の袋を下げ是を持ち、通行の客の橋の上より投与する錢をすくひとり貰ふ者大勢あり、実に面白し。夫より三四丁を経て境内に入る、此地大杉何れも一丈以上三丈位廻る大木多數あり、御本社を擁す。御本社は、萱葺の白木造りにして外構は四方六十間三重の白木の玉垣にて囲へ（此内へは平人は入ることを得ず）又西の方高き処に、高みむすびの神、神產むすびの神の二社あり（外に小社あれども是を略す）拝して神楽殿に到り、一同殿上。座して待つ事凡十分間にして衆人出来り、神前の左右に併列し音楽を奏し、御子は舞を舞ひ、神官福島廣方なる者來りて祝詞を奏す。式終りて、又講頭岩井喜久三祝文を朗読す。而して神酒を頂戴し一同帰途に赴けり。

凡五六丁を経て午前十一時、又五十鈴川を渡る。右に料理店楨木鈴七方にて竜太夫よりもたらし來りし酒食の馳走を請て後、午食す。直ちに人力車に乗り行く事凡五十丁にして、則ち外宮の社に到る。（此間公園地新築にして、何れも壇の手拭を冠り、数多の人夫道の左右に働き居るを見る）此社も内宮と少しも異なる処なき構造にして拝殿あり本殿あり、西殿あり、其他風の神、国つ志の神等其他數多の社あり、且つ大杉四方に森立し実に神威を存せり。午後四時竜太夫に帰る。此夜、竜太夫にて馳走を請く、該響應たるや實に善美を尽し、山海の珍味を載する二の膳を供し、

及び附屬せる魚鳥の肴珍列し酒酣にして、御師手代鈴木氏接客委員として出席す。七五三の大盃を出す。小生之を見るに、上の盃にても凡そ一升以上を入れると見へ、實に該杯を見る事を恐れたり。然れども、該席にして是を請けざるを得ず十分是を請け、後を見るに、一個の小桶あり、よって喜びて該酒をひそかに移す事を得て大醉を逃れたり。（此小桶は竜太夫手代の所為にして、心を付くる者と見ゆ）夫より大杯を廻し、全員是を請け、大いに酔ひて市への踊を見物せんと發言せり。此儀、起立惣員賛成して、午後八時竜太夫を発足せり。（竜太夫と古市の間凡八丁）時に暗夜にして、且つ微雨を来せり、然れ共、勢一押して古市町備前樓に到り、只一座して酔興する處。社員大久保氏、兼て、踊を注文す。而して待つ事、凡そ十分間にして小女來り、報じて曰く、直ちにおんどを始めるにより、其席に案内せんと一同を連れ、東の方へ行く事、凡そ十五六座敷を経て彼の踊の場に到る。此座敷たるや、対面は三曲線の廊下にして、前に朱塗の欄干を廻し、後に五色の幕を張り、数百の燭燈は宛も座を狭むばかりなり。全員之に対し毛氈に座せしに、芸者六名出て來り我輩の前に一直線して座し、凡そ五分間にて側ら擊折の声を成すや諸共に、数十の提灯は大井より降り來り、朱塗の廊下は下よりせり出し、右の方より二十名、左の方より二十名ばかり、美女いすれも振袖に源氏車の紋を付け、紅の帯を締め出現し、絃声は耳を聾するばかりにして、伊勢おんどの奇を歌ひ、踊の美女は途々に進み、或は退き、いすれも一樣の舞振にして、行逢いて右より出しあは左に入り、左より出しあは右に入り、各左右に入りにけり。其善美たるや、實に我輩の筆鋒に

書尽す事能わざ。是所謂、三千宮女、仙洞に集り遊ぶも此哉あらんと思われたり。因て全員歎を尽したり。時に小生は、彼張瀧古の語に「渠は極むべからず、樂極りて哀を生ず。欲は縱ままにすべからず、欲をほしままにする時は災を成す」と言ふ語を思ひ出して午後十一時、竜太夫に帰宅せり。

二月十七日陰る、午前七時竜太夫手代藤吉なる者案内にて、二見より朝熊に到らんと行事、凡一里にして路傍に直立十町位の小山あり。案内人曰く「此山の頂に大松二本見ゆるは、往古伊勢三郎此所に住家して、賊を滅せし處にて未だ其形を存す」と、尚一里を歩行し、午前十一時則ち二見に到る。拝するに二見興玉大神、東は海に浜し遠く三河、伊豆の諸山を一目し、後に山を負ひ、又陸より海中へ、凡三十間ばかり距て岩礁突出せり。左右は鳥居の如く御飾を付け、注連を張り大神宮を祭る。實に神位を存し、且つ景色極めて絶佳なり。又、日晴朗らかなる時は、此石の間より駿河の不二山、又旭を拝すと言ふ。夫より社員一同帰途に趣き、凡半里にして離宮ありて是を拝す。午後一時豆腐屋佐吉方にて午餐す。(是は竜太夫の贈なり)直ちに朝熊岳に登り、此山は巖石少く登り急にして五十丁なりと。勤めて歩み、漸く頂き虚空藏菩薩の本堂に至る。堂宇數多ありて後に山を負ひ、前に遠く海を眺め、又表門を入れば泉水ありて、是に架するに石橋、尚渡りて直に本尊を拝す。夫より二丁余帰り、有名の金剛證寺、萬金丹の総本家なりと、全員是を買。既にして日、西山に傾きければ、歩を急ぎて下る事、凡二十丁にして露店ありて一寸休憩し、尚勤めて歩行し漸く午後六時二十分、古市料理店茶屋浅吉といふ竜太夫同盟の店へ、案内と共に着す。而して手代浅吉の相伴にて、種々の

饗應を請け十分歎を尽し、竜太夫へ帰り枕に就く。

二月十八日晴午前八時起出し、直ちに入浴し、茶を呑み談話の際、手代鈴木浅次郎なる者出席していわく、「御客様方、数百里を経、御参詣の事なれば、嘸々きそきそ御労れに候はんにより一日ゆる滞在して、身体を休めて、明日御出立の御準備なされて然るべし」と、言に隨ひ一同休息す。依て小生も、太々の式も無事相済みければ、國元へ郵便を出す。此日、終日酒肴の馳走を受け、午後九時枕に付く。

二月十九日晴、此日亦々出立の日にして、午前八時起出、社員一同玉串、御札其他、太々供物共、二個の大櫃ひつを買ひ此内へ種々物品を詰め、二個に造り國元に送る。而して竜太夫の座敷を拝見するに、實に広大にして數多の座敷、凡一丁四方位と覺へ案内なくしては、其出る處を忘れざる程なり。内に神殿ありて、夫々美を飾れり。(御一新前は此處にて、太々の予行せし處也)而して我座敷に還り、一同出立の用意整へり。依て、竜太夫の馳走を請け目出度出立す。(社員の内、金井祐憲、目板加之八、鳥海藤七、中田市五郎、中田勇吉の五氏)此五氏は直ちに帰国せしにより、竜太夫より三十丁行、神社港に向け出立す。

小生外二十二名は、京、大阪に廻るにより、数百里を距て互に別れの情をおしみけり。

而して、我一行は午後二時発足し、歩行する事三里にして、明星駅三田屋三郎兵衛方へ五時到着す。竜太夫手代、酒肴を持って此所まで送り來り、夜に入り一同に饗應す。歓喜して是を請け、七時伏す。

二月二十日晏大西風、午前五時三十分三田屋を発し、四里を歩

行して六軒駅（此處は伊勢海道と大和廻り海道の追分也）磯部屋利吉方に着し、一寸休憩す。是より伊賀地に向け出立す。畠宿を経て田尻宿松屋利介方にて午食す。此處地勢たるや、總て山路にして人家の構造方、食物の味はひ等、總て昨日と大に異れり。又、案するに今朝別れし五名は、神社港より四日市港迄乗船すと覺ゆれ共、此大風にては安否如何あらんと、一同心配せり。

午後六時海道駅伊賀屋吉兵ニ方へ到着す。

二月二十一日晴午前五時伊賀屋を出立す、青山峠に掛り、此峠は登り一里、下り二里、合せて三里の峠なり。左右峨々たる石山にして、尤寛情にして風致あり。然れ共、實に淋しき通路也。一里位毎に水茶屋ありて一時休憩し、尚歩行して頂に到る。是伊賀の国と伊勢の國の境なりと。下る事二里にして、伊勢地村と言ふあり、飲食店四五軒ありて家込の処なり。又一里を歩行し阿保駅に到り、俵屋清右エ門方にて午餐す、時に午後二時三十分なり。

夫より名張駅に掛り、此處は中等の町家にして、伊賀の上野に通ずる電信線あり。午後五時三十分、三本松塗師屋藤左エ門方に着す。此間、四里半なり。此日竹村氏、道傍にて兎一尾を買拂^{まき}來り、彼塗師屋に到り、是を調理し一同食するに味極めてよし。又此旅舎の主人は、至て深切なる者にして、道中の模様、且つ上方と関東との人情區別無く、種々談話を我社員に説く。

二月二十二日晴午前五時塗師屋を発し、新道を歩行する事七八丁にして、大野村に到り、一寺あり。沢を距て巖石の半腹に、丈け五丈四尺の大阿弥陀佛の像を彫刻せしを拝す。（此處まで塗師屋より案内を添へたるなり）而して本街道へ出、萩原宿を経て行く事二里半にして、直立七八丁の峠に上り、頂にて向を眺むれば

初瀬駅より觀世音を一目し、景色美なり。小生外五六名、此高き所の水茶屋に休憩し、峠を下りはせ駅に至る。此處は、四方石山にして、市中は泉を引き、高家軒を並べ、尤繁昌の地なり。又此はせ寺は、新義真言宗の本山にして常に大僧正の住職居り。且つ百間の回廊あり、本堂は、八方八つ棟造りにして十八間四面也。外に四十四坊あり、其他、樓門、仁王門去る明治十六年十一月焼失、三重の塔は明治六年焼失せしといふ。

且つ二十一年八月に至りなば、再建の予定なりと。抑々當寺は西國八番の札所也。本尊は觀世音丈け二丈四尺あり。

夫より初瀬駅に下り、三条の小鍛冶宗近の子孫なりと唱ひ數多の刃物を併列し、通行の旅人に強いて売るといふとも、我社員買う者少なし。而して吉野屋平左エ門方に登樓し午餐す。此旅舎は大家にして奇麗、殊に食物の味も上等にして、四五日間粗食に苦しみしを、始めて蘇生の思をなせり。午後一時一同人力車に乗り、南に行く事凡一里にして三輪宿に到り、官幣国社三輪神社あり是を拂す。此社は小山の上に鎮座し、大木茂り神位備る社なり。又少し行きて道の右の方に、官幣大社大和神社あり是を拂し、尚車を急ぎ丹波市に至り車を下り、歩行して五時三十分、奈良駅に至り、印判屋庄右エ門方に泊す。

二月二十三日晴、早朝印判屋の楼上に座す、時々婢女^{はしなめ}、茶、菓子を持來り一同是を呑み談話をなし、東方を眺むれば、眼下に猿沢の池、衣掛ケ柳、左の方には奈良県庁あり、遙かに三笠山等を一目し絶景なり。午前八時案内を頼み奈良見物をせんと押出せり。道傍に小麦粉を以て製したる饅頭を売る露店あり、是は春日神社の鹿に与へる品なりと、小生も是を貰て提携し、時々是を与ふ。

尚歩行する事二十丁余にして、則ち春日の社なり。

道の左右に石燈籠、凡十五六丁の間寸地の余地なく併列せり。

其間鹿あまた遊び居り、旅人に能く食を乞ふ。因て又、彼の饅頭を投与し、御本社に到れば實に美大なり。

朱塗の社五社あり、是は鹿島、香取、平岡明神、天照皇太神、若宮神社を惣称して春日の社と称す。尤美麗なり。常に拝殿に太々神樂あり、我社員是を修行せし者あり。舞子二名にてよく能を舞へり、稀世の美女なり。

夫より山を下り三笠山の麓に至る。此三笠山は若草山、稻穂山、花の山を惣称して三笠山と言ふ。何れも芝山にして外の立木なく、只、ばたん餅を半切に据たる如き形なり、景色よし。此麓に一同休みしに、露店にて菓子小間物を陳列し、別に器械ありて当る者は是を呈すと言ふに、竹村氏指して直ちに鏡一個当れり、興じて一同大ひに笑いたり。此日、折善く年一度づつ、此山の葉草を焼拂ふ日に當り、警官數多四方を囲い、東西より火を放ち是を焼く。市中老若男女は見物せんと群をなし、尤賑へり。又、八幡社に参詣して、三月堂觀世音前にろうべん杉あり、此木には種々謂れあり。二月堂觀世音何れも由緒ある佛にて大迦藍なり。此所に大釣鐘あり、厚八寸三分、廻り二丈八尺、高さ一丈三尺六寸ト。又、弘法大師手植の松、葉五本づつあり。又、弘法大師経を納めし石の塔あり。又、大佛殿は回廊東西百間、南北九十間、本堂は三十間四面、大佛は五丈三尺五寸、此膝の下に開だん廻りとて、真暗き処に入りて見るに、種々の佛を安置し、尤廣し。又、此堂の内に博覧会等あり是を縱覽す。夫より南円堂を拝し、而して、午前十一時旅舎印判屋へ帰り午餐す。

午後一時高野山をさして一同出立、歩行して午後五時三十分、八木駅木原屋嘉右エ門方に着す。

「却説」奈良駅より八木駅まで、里程六里平坦にして、東にはせ、塔の峯、吉野を見、西は山脈併列せり。

航空写真で見た越谷の今昔

木 原 徹 也

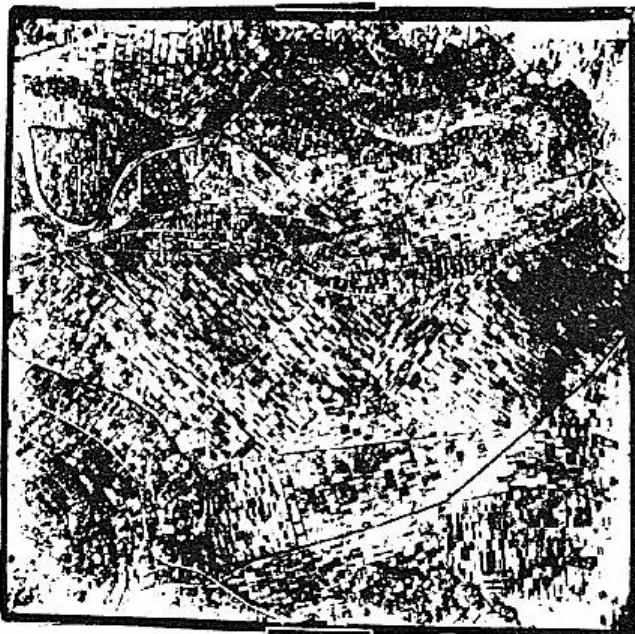
(一)

越谷市の市史編さん室には越谷市の歴史を語る各種の膨大な史料が収蔵されている。この中に越谷市の古い航空写真が保存されている。本間専門員の話によると、この写真は昭和二二年頃、占領米軍によつて撮影されたものではないかとのことである。すると、越谷市全域を写した航空写真としては最古のものではないだろうか。

ところで市環境保全課では、ここ数年、今後のまちづくりは地形・みどり・水辺・文化などの環境特性を正しく理解し、その環境特性と良く調和した開発や、事業実施が大切であるという認識に立つて環境行政を展開している。環境保全課では、こうしたこの一環として各種の環境情報を収集しているが、古い姿の越谷市の自然を知つたり、歴史的遺産の分布の把握は、新しいまちづくりに大いに役立つという意味で市史編さん室は環境情報の宝庫である。こうした中で、先程の古い航空写真が目にとまつたわけ。

である。

この航空写真は、白黒板で、十八葉あり、市域の全てと周囲の市町村の一部も撮影されている。一枚の大きさは45センチ角程で、ボール紙によって裏打ちされているが、四〇年に及ぶ年月のためか、大部分の写真は焼いたスルメのように反ってしまっており、



大変見難い状態である。しかし、画質の鮮明さは四〇年前の航空写真とは思えない程鮮明であり、さすがに当時の米軍の科学技術の優秀さがしのばれる写真である。しかし、この航空写真は越谷市域を十八枚に分割して撮影してあるため、部分的な場所を見るには都合が良いが、同一地点が重なって撮影されているうえ、写真が丸まってしまっており、全体を見るには非常に不便である。そこで反った写真一枚一枚を苦心して複写し、これを継ぎ合せた結果、市域全体が観察できるようになった。

〔二〕

この継ぎ合せ航空写真を見ると、ふだん地上に張りついて生活していたのでは見えない数多くのものが見えてくる。坦々と広がる平野の中をいく筋も流れる旧河道を含めた河川が実に明瞭に写っていることがまず目につく。市の西北から東南にかけてゆったりと流れる元荒川、その荻島地区のノ切橋付近から、づつと北方に大きく迂回して、家屋や木立ちが連っているのが良く判るが、これは、かつて元荒川が大竹・恩間・上間久里・下間久里・大里と北方へ大きく迂回していた河道に沿つて人々が居を構え生活していた名残りである。この北方へ迂回していた元荒川の流れは、下間久里付近では当時の日光街道の西側を平行して流れしており、街道を往来する旅人に涼を与え、また、うなぎ等の川魚が土地の名物として売られた歴史も持っている。

この元荒川が北方へ大きく迂回する流れによって作られた袋状の土地は、その形から古くより「袋山」と呼ばれ、その後、江戸時代の宝永三年（一七〇六）に迂回路をノ切り、河道を直道につ

なげた状況も、この航空写真から良く読みとれる。そして、この場所に架けた橋を「ノ切橋」と名付けたという歴史的事実も、この写真から読みとることができる。

こうした河川改修の跡は、他にも、越ヶ谷久伊豆神社の裏から花田へ延びる大きな蛇行路と、これをショートカットして出来た宮前橋の下の流れにも良く残されている。ちなみに、この元荒川が北東へ大きく迂回する流れによって出来た土地を「花田」と言うが、これは本来その地形から「鼻田」であったのではないだろうか。

この他にも、旧河道の跡は、古利根川が平方地区の西側を流れていた様子や、大正年間の改修により、現在中川の右岸側（越谷市側）に残ってしまった吉川町の須賀地区が、かつては中川の左側（吉川町側）に在ったことも良く判る。

(三)

総じてこの航空写真からは、かつての人々の暮らしは河川沿いの自然堤防上の微高地に宮まれ、ここを住居と手作りの畑作地とし、他に神社や寺院を作り、防風のために木を植えた、これが、樹林の少ない越谷市にとっては貴重なみどりとして現在に引き継がれている。一方、河川の向背湿地は用排水の機能を備えた水路を縦横に掘り、水田として利用され、耕地整理によつて短冊型に整然と並んだ水田も良く判る。この土地利用は、微高地に住居を設けることにより、浸水被害を避け、低湿地は水田として利用すること、いわゆる環境特性に合つた理にかなつた土地利用をしていたわけで、先人達の知恵の深さを改めて思い知らされる。

こうした自然堤防上の微高地＝住居という住み分けの原則からは、旧越ヶ谷町と大沢町はやや外れた印象もあるが、良く観察するとこの両町とも元荒川の自然堤防に含まれ、しかも、環境保全課の他の資料によると、この両町の地下の土質は、越谷市の中では抜群に良い安定した土壤が広がつており、もしこの事実を知つて天正・慶長年間（一五七三～一六一四）にこの場所に越ケ谷宿を造つたとする、先人の知恵になお一層驚かざるを得ない。

(四)

最後にもう一つ、この航空写真には非常に珍らしいものが写っている。越谷市砂原寄りの岩槻市境に北西から南東に一直線に延びる一筋の滑走路が写り、越谷市域には誘導路らしいものが延びている。滑走路の北の端は、現在の県立しらこばと水上公園の一部に掛つているようである。これは太平洋戦争の終戦間際に作られた陸軍荻島飛行場跡である。かつての軍用飛行場の跡が、現在では夏ともなると大勢の子供達の水遊びの喚声にあふれる場所と変つている。

この航空写真が撮影された昭和二二年といえば、日本中が経済の高度成長の波に洗われ、自然をはじめとする環境が大きく変化した時期よりも二〇年も前のことであり、この航空写真には越谷市の原風景が写っていると言つていいだろう。しかし、昭和四六年撮影の航空写真では最早袋山地区の元荒川の旧河道の蛇行は、宅地化により判別出来なくなり、また花田地区の大きな蛇行も分断されはじめる。一方で武藏野線や四号国道バイパスが真直ぐな白い線として写るようになつていている。越谷市の人口が毎年一〇%

ずつ増加するという爆発的な人口の増加が続いたのは、昭和三九年から四七年までの九年間であった。

感 想

戦前戦後の私の思いで

村 田 留 吉

私は東京で運送業を営んでいましたが昭和二十年二月の第一回の空襲で家の前と裏に焼夷弾が落下したので急に小学五年生を頭に五人の子供と妻を川柳の農業作業所に疎開をさせました。

電気、水道もなく、水は近所の農家の井戸水を貰い不便な毎日でした。それでも空襲の心配もなく安心でしたが、こんどは三月廿日の大空襲で東京の家は焼失して、越谷の印刷屋の運送を引請ましたが、仕事は不定期で竹の子生活の毎日でした。困ったのは米の代用食の配給としてさつま芋八俵も来ましたので東京へ売りに行き、米に替えた事などです。長男は栄養不良で鳥目になり、肥料溜に落ちて帰って来たり、又出羽荻島の飛行場建設の勤労奉仕に呼出され、スコップでトロッコに土を入れる仕事ですが、疲れて手を休めると立っていてはだめだと兵隊にどやされました。

自転車のタイヤは闇でなければ買う事が出来ず、中袋の代りに水道のホースを入れて乗りました。恐ろしかった事は夜遅く自転車で草加の松並木を通って帰って来ましたら、ジープが前で止り黒い大男が二人出て来て私の襟をつかんで財布を盗んで行きました。当時の警察は米軍を取締る事が出来ず松並木から新田にかけて空

財布が数個捨ててありました。恥ずかしかった事、五百円の税金の支払が出来ずにタンスを差押えられた事もあります。嬉しかった事は百円で買った馬券の払戻しが三万円になつたのと初代の大塚市長が私のような者にどこでお目にかかるても先方から挨拶をして下さった事です。感謝しているのは親から貰った健康な体と、一生涯を貫く仕事を持つた事です。七十七才の今も元気に東京の個人タクシーの運転をしています。今後の希望としては人の為に愛情を持って奉仕したいと思っています。

昭和六十二年十一月

郷 土 史 跡 めぐり の 記

高 谷 良 子

南越谷駅前集合、朝の挨拶と同時に渡された今日の研究資料を手にすればわくわくと嬉しさがこみ上げる。小学校の遠足時を憶うのは老いた為か、即ち幼児に還るという事か。当日三十名近い同行者はみんな明るい顔揃い。武藏野線の乗客となり北朝霞駅下車してここより東武東上線に乗替えて越生線の越生駅で降りた。此処は梅林で名高い所。別線八高線(JR)で明覚駅下車す。とうとう来たのだ。

山の見える静かな街に、待つ間もなく迎えて呉れた村営バス席へ、ああ越谷にもこんな市営バスが通っていたら市庁舎や図書館病院へ、名所旧蹟へもたやすく行けるのに想い羨ましく思つた

のは私ばかりではないらしい。バス停の西平で降りた。先の慈光坂を登る事暫く、杉木立が展け右側に九つ建ち並んだ板碑とそれが埼玉県指定文化財・青石板碑全て二米程の高さでめざす慈光寺歴代の住職僧の供養塔婆らしい。何れも深く梵字が彫ってある。関東天台別院の栄えを語るかの思い歴史の重みを充分に感じる。ここよりかつては草鞋を付けた足で登ったであろう山路を往つて昔を偲ぶ。足跡をたどつて作られた細く険しい道の段々を登つた。先方に早くも咲き出しそうな薔をつけた水仙の群生をみつけて一息ついた所に昭和六十年十一月の火災で焼け残つた真黒な鐘つき堂を見ながら尚ものぼり着いた。都幾山慈光寺は質素で古き時代を凌ぐ由緒ある釈迦本尊の存在に如何にもふさわしい。昔のままの木造建築物のままで、寺は來訪者を優しく包んで呉れそうな安らぎを感じさせた。ここで昼食、弁当を食べた。修業をつんだ温顔の僧主の講話は坂東九番千手観世音菩薩本尊による母の慈愛の表現・吾子に千手千眼を使うは唯一の愛情であり、左手の後向のは児を負う顯現だとユーモアたっぷりのお話しを聞き入つた。其後寺に飾つてある国宝級の法華經本、木造りの文殊菩薩像、阿弥陀如来像は何れも座像姿で県文化財指定である。嚴かに拝して御堂を出た処の端所に売店があり梅干漬や山木の杖、此地でとれた柚子、蜜柑の並ぶ中に貯金箱一つ置かれてあるのみ、人を信用せよとの仏の教え表れとも伺える売店は番人が居ない。この寺の先暫く坂道を登れば右側に、立派な建築の靈山院である。昭和四十六年本堂と庫裡が建てられた。此の寺の和尚で三十八代目だといふ叔山碩珠禪師は、全国苦行して廻り禅道の奥義を究めて住職となつた人。慶應から明治二年其間この地に心血をそそぎ杉や桧二

万本を植栽したと云う。だが國法により後程国有林として没収された。以後世の無情に嘆き空しく生きるよりは衆生救護の佛となるを決意した。意が叶つて生き乍ら棺に入り泰然自若として葬列の進行に合せ仏名をとなえながら、明治六年五十才で此處靈山院の中興の祖となつたと伝えられるが現在の僧主はどんなお方であろうか。慈光院よりずっと巨大な近代的建物で門を入つた左側に石塔婆板碑が並んで建つてゐる。前に見た慈光坂の碑と同様に見受けられた。御院に在す鉄造阿弥陀佛をゆっくり拝觀出来ず残念に思つた。程遠い鎌倉時代の特徴を生かした県の文化財と承る。苑の正面にある山茶花の大木が容姿美しく刈込まれてびっしり花が咲いて参拝者の眼をひき寄せた。慈光院に戻りてこんどは平な坂を歩き乍ら今を限りと思う山の大樹、黄葉紅葉に浸りてよい空気を存分呼吸し、渓谷の美を欲しいまま、山道を急がず降りてバスで明覚駅前におりた。一日のコースを身につけて皆疲れた様子の人もなく、雨模様の空は終りまで降らず一同無事故で帰着した。一日の見学が終つた悦びの顔を合せて南越谷駅前で散会した。当日御案内者宮川様やお世話になつた方々に厚く「ありがとうございました」と御禮申して終ります。尚当日の拙い俳句詠恥し乍らお笑ひ草まで

山 行

高 谷 梨 葉

木の実落つ文化財なる板碑かな
慈光射す千手のみ掌の秋深し

古刹なる千手観音冬温し

山道の稚な紅葉を記念とし
冬麗やむれ咲く花の整いて

史跡めぐり及び研究会一覧表

幹事長 木 村 信 次

尚、越谷で見られる植物キタミソウ及び野鳥について「越谷自然を守る会」のメンバーの研究発表をスライド及びテープで拝聴した。

① 史跡めぐり

番号	実施年月日	場所、神社仏閣その他
144	昭和六十一年三月廿三日	練馬石神井地区 大風雨のため中止
144	四月廿九日	都内谷中方面—伊勢長（江戸千代紙）・ へび道（藍染川跡）・大名時計博物館 (館長による解説)・領玄寺貝塚・天目 寺（忍藩主松平侯の寺）・王林寺（椎の 木・海舟の虎の絵）・自性院（愛染かつ ら）・西光寺（韋馱天）・谷中墓地（高 橋お伝・五重の塔跡・長谷川一夫・天王 寺大仏）・露伴旧居跡・靈梅院（初音の 森）・觀音寺（四十七士）・手まり歌の お仙（笠森稻荷・大円寺の春信と荷風の 碑）・全生庵（鉄舟の寺・円朝の墓）
145	六月廿一日	練馬石神井地区（豊嶋氏の遺跡を訪ねて） —長命寺・三宝寺・道場寺・練馬郷土資料室・氷川神社・石神井城址・三宝寺池 について（スライド併用）

—昭和六十一年度及び六十二年度→

昨年創立二十周年に当り、「会田氏のルーツ」を求めて信州四賀村会田地区の広田寺（会田家の菩提寺）を詣で、同村史談会と交流した際の約束により六十一年四月に同会長を初め三十五名が同村長よりの当市長へのメッセージを持参し、バスにて訪れた。直ちに会田家の墓所天獄寺を初め、久伊豆神社、越ヶ谷御殿跡及び大聖寺を見学した。

現在の会員は郷土の歴史を足で調べ、この歴史の流れの中に現在を捉え、更に将来を可能な限り適格に見透す糧としておられると思う。この為に広く旧武藏全域に亘り史実を追及している。

十月・十一月及び六十二年三月には近隣の三郷市・草加市及び吉川町をめぐり、更に会報「古志賀谷」五号を五月に発刊した。

六十二年度は日光御成道の史跡を訪ねることゝし、先ず中山道との分岐点の本郷追分付近の史跡をめぐった。続いて王子地区をめぐり、尚六十三年三月には岩淵宿を足で調べ、同宿にて荒川を渡り、川口・鳩ヶ谷・大門・岩槻の四宿を経て、奥州・日光街道と合する幸手宿を調べる予定である。この御成道で最も重要な岩槻については八月に岩槻地方史研究会飯山実理事（埼玉史談編集員）の御講演を拝聴した。一月の研究発表は「越ヶ谷言葉・方言と訛集」についてであり、二月は「日本建築の細部手法、墓碑について（スライド併用）」であった。

150	149 十一月三十日	148 十月廿六日	147 九月廿七日	146 七月廿七日
六十二年 一月三日	隅田川七福神・多聞寺・白髭神社・百花园 ・長命寺・弘福寺・三围神社	日光街道(草加宿)・浅间神社・善福寺・ 晒新・火あぶり地藏・地藏堂・回向院・明 治天皇行在所・道路元標・東福寺・源兵衛 煎餅店・神明宮・札場河岸・松並木	志村城跡・延命寺墓地・志村城跡・熊野神 社・延命寺・龍福寺・小豆沢神社・總泉寺 ・志村一里塚	四谷方面・江戸城外堀跡・四谷見附門跡・ 四谷見附橋・旧赤坂離宮(赤坂迎賓館)・ 西念寺(服部半蔵の墓及び檜)・愛染院 (塙保巳の墓)・須賀神社(四谷牛頭天 王社)・お岩稻荷(四谷怪談ゆかりの地) ・四谷笠寺(勧進相撲始祖の地)・四谷大 木戸跡・玉川上水記念の碑

153	152 五月廿四日	151 三月廿九日
墳群遠望・工業団地	関東の石舞台、八幡山古墳に古代埼玉の 謎を追うー天洲寺(国指定重要文化財の 聖徳太子像)・虚空像山古墳・子見真觀 寺古墳(石室内見学)・龍泉寺(力士唐 糸六郎の墓)・地藏塚古墳・関東の石舞 台、八幡山古墳(石室内見学)・埼玉古	吉川方面・定勝寺(県指定文化財二郷半 領由来の銅鐘他)・密嚴院(天然記念物 子育大銀杏他)・清淨寺(県指定文化財 西念法師之塔・南無仏塔)・芳川神社・ 戸張家文書、講話ー互隆雄先生(幕末の 剣豪伝)・延命寺(戸張家の墓・幕末の 剣豪の墓)

156	155	154
十月廿五日	九月廿三日	七月廿六日
日光御成道を訪ねて 1.（本郷・白山地区） 根津神社・夏目漱石住居跡・海藏寺・肴町・円乗寺（八百屋お七の墓）・大円寺（七觀音・高島秋帆の墓他）・天榮寺（駒込土物店跡）・光源寺（明珍氏の墓）・鷗外住居跡（ヤブ下通り）・団子坂	早稻田・目白台方面（新宿区・文京区・豊島区）-「山吹之里」の碑・甘泉園（清水徳川家の屋敷跡）・高田富士（高田藤四郎が作った最初の富士塚）・堀部安兵衛仇討ちの碑・高田馬場跡・高田富士四郎（富士講を広めた身禄行者の弟子）の墓・新江戸川公園（熊本藩主細川家の屋敷跡）・関口芭蕉庵（初期の芭蕉庵）・東京カテドラルの切支丹夜泣石・目白不動（五色不動の一つ）の俱利伽羅不動庚申塔と丸橋忠弥の墓・南蔵院（花籠・二子山などの名力士の墓）	日光御成道を訪ねて 1.（本郷・白山地区） 根津神社・夏目漱石住居跡・海藏寺・肴町・円乗寺（八百屋お七の墓）・大円寺（七觀音・高島秋帆の墓他）・天榮寺（駒込土物店跡）・光源寺（明珍氏の墓）・鷗外住居跡（ヤブ下通り）・団子坂

番回数	年月日	概要	研究発表会	年月日	概要
85	昭和六十一年度 五月廿五日	講演者 矢島 実 主題「関東（武藏）における農工社 会の民俗行事」	② 研究発表会	158	都幾川村・慈光寺・国宝一品法華經・鎌倉建長寺と同じ作者による銅鐘等拝観・靈山院・永仁板石塔婆・鉄造阿弥陀陀仏拝観
84	八月廿四日	研究発表 木原 敬也 主題「草も木も若しくは我をしりた		三月廿七日	日光御成道を訪ねて 3.（赤羽・岩淵地区）-宝幢院・大満寺・正光寺・川口の渡跡・川口水門・八雲神社・亀ヶ池跡・静勝寺（稻付城跡）・稻付の一里塚跡

90	89	88	87	86	
一月廿四日	八月廿三日	六月廿八日	二月廿一日	一月廿五日	るや —水野家と春日部市備後—
研究発表者 山崎 善司	講演者 飯山 実 主題 「岩槻について」	講演者 山部 直喜（越谷の自然を調べる会） 主題 「越谷で見られる野鳥について」 並木 宏光（全上、代表） 主題 「越谷で見られる植物キタミソウについて」 「スライド及びテープ併用」	研究発表 小島 誠 主題 「草創期の鉄道あれこれ—国鉄私鉄・幻の鉄道—」	研究発表者 本間 清利 主題 「埼玉の街道—日光街道を中心として」	研究発表者 丸田 富夫 主題 「日本建築の細部手法、幕脇について」

報 告	
越谷市交通安全市民まつり初参加と全市民文化祭参加について	
幹事長	木村 信次
61年十月に第十二回越谷市交通安全市民まつりに初めて参加し、役員のみの二点を市庁舎一階ロビーに展示した。	(番号) (題名)
1 砂利供養塔(きょうだいさま)	日置 宗一
2 道標	山田 政信
写真(四ツ切各二葉)	全右
尚、説明は各々約八百字	
全年十一月の第十八回市民文化祭には、コミュニケーションセンター	
一大ホールホワイエに七点を展示した。	

91	
二月廿八日	主題 「越ヶ谷言葉、方言と訛集」について 「スライド併用」

(番号)	(題名)	(出品者)
1	建長板石塔婆	丸田 富夫
2	越谷を中心には分布する山王二十一仏板碑	星野 昌治
3	伝承民俗行事・北川崎坂巻家の御歩射	石塚 吉男
4	高札	中村 忠夫
5	蒲生の石宮	日置 宗一
6	大聖寺の庚申塔	加藤 幸一
7	迅速図でみる越谷	宮川 進
写真 6	6を除いてすべて	坂巻 高次
	六十二年十月の交通安全市民まつりには、市庁舎一階ロビーに	山田 政信
	当役員による展示二点。	
(番号)	(題名)	(出品者)
1	越谷新町の道陸神	山田 政信
2	日光街道	木原 徹也
	全年十一月の第十九回市民文化祭には、コミュニティーセンターホールホワイエに九点を展示した。	
(番号)	(題名)	(出品者)
1	虫追い	石塚 吉男
2	大相模不動明王瑞像記	加藤 幸一
3	江戸時代の越ヶ谷宿	木原 徹也
4	御鷹場高札	中村 忠夫
5	板碑二題	星野 昌治
6	清蔵院山門の龍	丸田 富夫
7	光明真言塔	本間 清利

8 奈良・平安時代の越谷 宮川 進
 9 和賛地蔵 山田 政信
 越谷全図(1~9)所在地明示 尚、高札は現物を、板碑及び真言塔に関しては拓本を展示し、更にこれらの解説文を二百部用意した。

第19回 市民文化祭

越谷市郷土研究会 出品紹介

1. 北川崎の虫追い

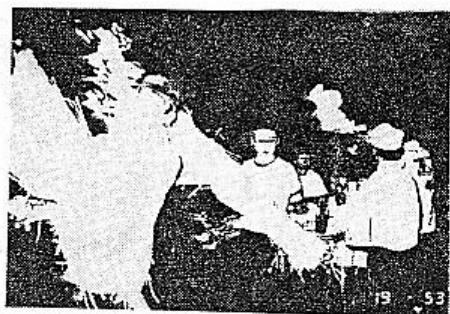
石塚 吉男

虫追いは、古代より稻作の普及に伴い、自然発生的に起つたもので、戦前は何処の地方でも農村の年中行事の一つであった。

地方によっては、害虫の発生がある怨霊のたたりとして、宗教的に昼間に行なう虫送りもあるが、越谷地方の虫追いは夜間行われ、各農家が麦藁で作ったたいまつを夕方鎮守の社前に持ち寄り豊作祈願の後御神燈よりたいまつに点火して、鉦太鼓を先頭に、「稻の虫ホイホイ」と囃立てながら字境まで練り歩くもので、戦前は一村挙げて同夜に行つたので村の耕地は一面火の海のごとき壯觀を呈したというが、戦後の極端な農薬の使用と急速な開発のため虫追いの行事は殆ど姿を消した。

越谷市では市東北の北川崎地区にのみその行事が続き、県の無形文化財として、毎年七月二十四日の夜行なわれ往時を偲ぶよす

がとなつてゐる。



2. 武州大相模不動明王瑞像記
(真大山大聖寺)

加藤幸一

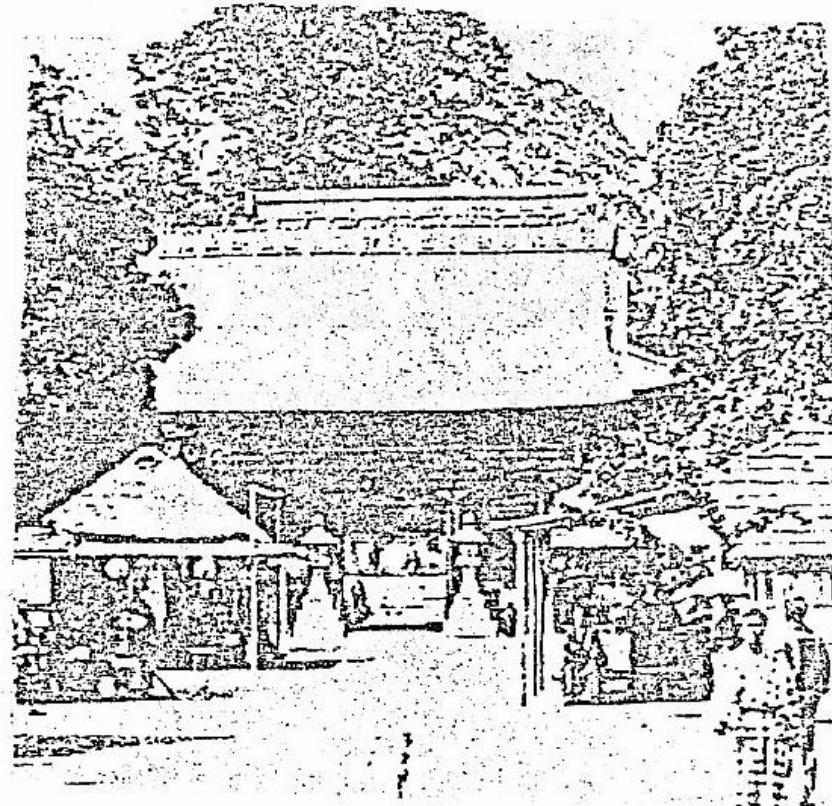
下の写真は西方の真大山大聖寺に現存している縁起状。当時の住職英山の依頼によって享保十四年（一七二九）八月に江戸の宝林山靈雲寺第三世の慧曠が文を作り、光天が書いたものである。「武州埼玉郡大相模郷の真大山は不動尊の靈域で瑜伽の清い土地でもある。もと寺誌一巻があった。その文、わずか十余紙。惜しくも寛文年間（一六六一～七二）に紛失した。曾てこの古誌を読んだ者が語る処によると、昔、奈良にいた良弁僧正は……」（大

高天吳山靈山在於諸子作記予
素無文思聊錄事實庶幾阿遮歲
德巍々被歎古邊鄙之邦甚那
烽煌煌至龍華開敷之勝云
享保第十四星次己酉仲秋之穀
武都寶林山靈雲精舍第三世
苾芻慧曉作文

武州大相撲不動明玉瑞傳
武州崎玉郡大相撲傳
阿追文雪區傳
寺志太喜大輔傳
寛文中而後事
管在南傳
達斐利方傳
精修嚴勵子傳
論辨辨曉仰士傳
模其相貌大二人傳
必隨義絕一村傳
百千人不可舉之傳
當智之驗將安奉傳
當智之驗將安奉傳
當智之驗將安奉傳

伝は慶長二年（一五九七）に京都の醍醐寺の座主義演のもとで奥義を伝授。同五年、家康は小山^{こやま}で石田三成の挙兵を聞き、兵を江戸に向けて引き返す途中で当山に立ち寄り戦勝祈願した話。享保五年（一七二〇）住職隆元の時に火災に遇った話のあとで、正徳五年（一七一五）の仁天門建立と天和

-67-



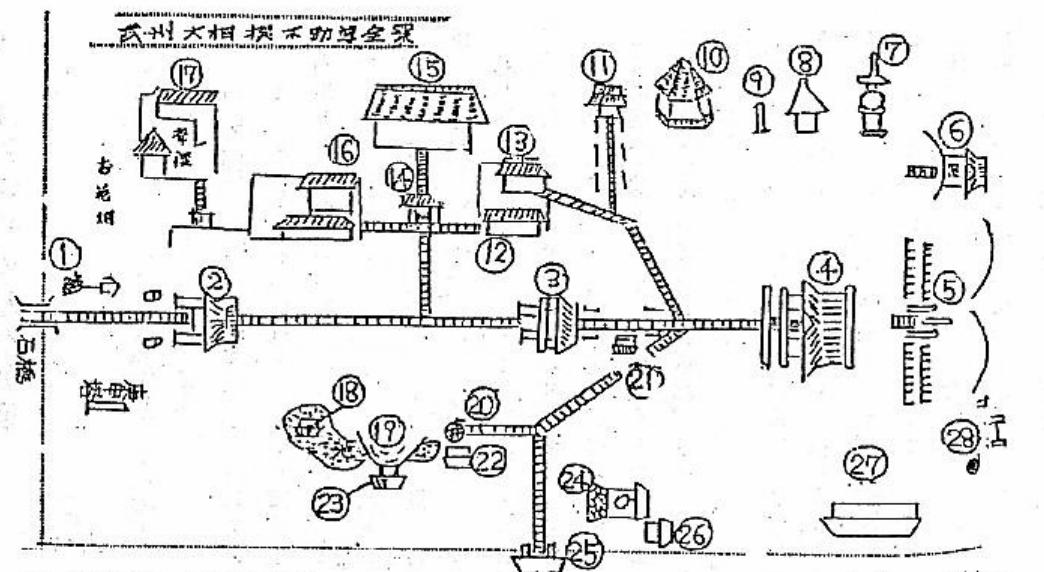
元年（一六八一）の觀如法師の東照宮の話が続く。最後に現住職英山の祈願により参詣者に手や口を清めるための水が湧き出た話と「瑞像記」を作るにあたってのことが書かれている。

左の写真は明治二十二年に焼失する前の仁天門の様子。枠外両脇には「真大山仁天門原景」「大正五年十一月複写」との添え書きがある。仁天門奥には瓦葺きの本堂が見え隠れしている。この

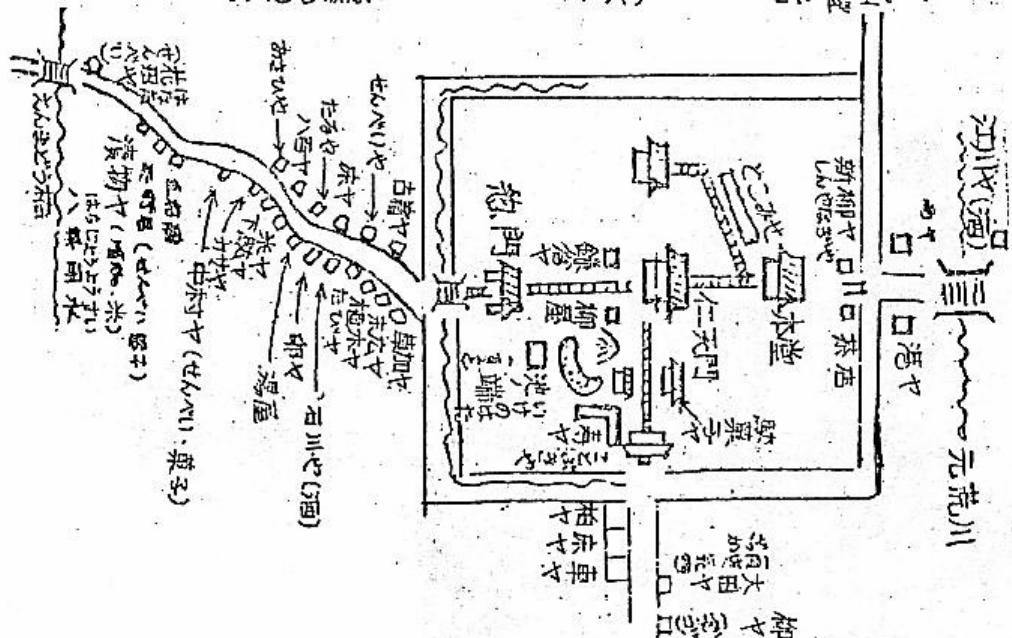


文政11年(1828)完成の「新編武藏風土記稿」

「瑞像記」によると、楼上には釈迦三尊と十六羅漢像が安置され、門の両脇には持国天と多聞天（毘沙門天）の二天像が置かれている。なお、明治二十二年十月九日、門前町内の山崎湯屋より火災が発生し、十七軒の建て物を焼き尽すとともに、この仁天門の茅葺き屋根に飛び火して全焼。この時、二天像の眼が宝石でできていると言われていたため、乞食坊主の太助が火の中に飛び込み、眼を取りうとして焼け死んでいる。



1. 刈札 6. 天満宮
 2. 惣門 7. 墓塚印塔 11. 東照宮 15. 講堂
 3. 仁天門 8. 天子堂 12. 番所 16. 利性院
 4. 本堂 9. 供養塔 13. 宝蔵 17. 書院ならびに
 5. 百夷申 10. 経蔵 14. 黒門 庫裡 21. 水星
 ※民家、菴店、大木を除く 18. 弁才天 22. 滝ノ坊
 〔は〕光明灯 19. 美富山 23. 北向不動
 境内周辺及び西、北は大木を交え
 たうそそうたる森林 20. 井戸 24. 鐘楼
 25. 東門 26. 地藏坊
 27. 篠堂(こりどう)



上記二つの資料は「越谷市の史蹟と伝説」(S 35発行)の中の高崎力先生の資料から取りました。

3. 江戸時代の越ヶ谷宿

木原徹也

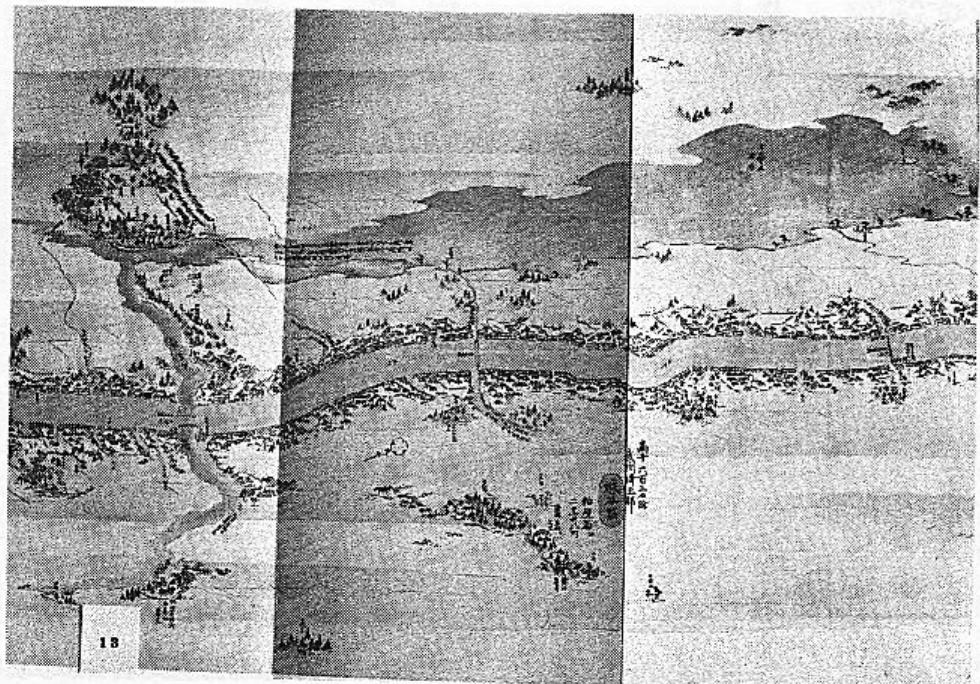
この写真は、江戸時代後期（一八世紀末）頃の越ヶ谷宿の様子を描いた絵図を写したものであります。

この絵図は、当時の道中奉行が管理していた全国の主要街道について、実地調査を行い作成したいわば官製の街道絵図です。この内越ヶ谷宿の部分を複写いたしました。この絵図は距離一里（約三九二七メートル）を七尺二寸（約二一八・二センチ）に縮小されており、縮尺は一八〇〇分の一であり、道路の曲折から方位までも正確に記されています。

越ヶ谷宿は、街道に沿って両側に大小さまざまな家が軒を接して連なり、土倉造りや二階建ての家も見られ大層繁栄した様子がうかがえます。また大沢町との町境を流れる元荒川の流れや、これに架る大沢橋、そして町並みの東裏には立木に囲まれた久伊豆神社と天嶽寺の境内も見られ、さらにゆったりと広がる瓦曾根の溜井も良く判ります。

写真からは細か過ぎて良く読みとることは出来ませんが、絵図を詳細に見ると、宿場で旅人や荷物の取扱を行なった「問屋」が本町の東側町並に在ったことや、大沢橋のたもとには高札場が在ったこと等も判る貴重な絵図です。

江戸時代の旅は、二～三里（八～十二キロメートル）ごとに設けられた宿場を目当てに、一步一歩足を進めたわけで、宿場は旅人の休息の場所として、又宿泊の場所として旅の疲れを癒す大切な場所でした。また街道に設けられた松並木や道標そして一里塚などは、

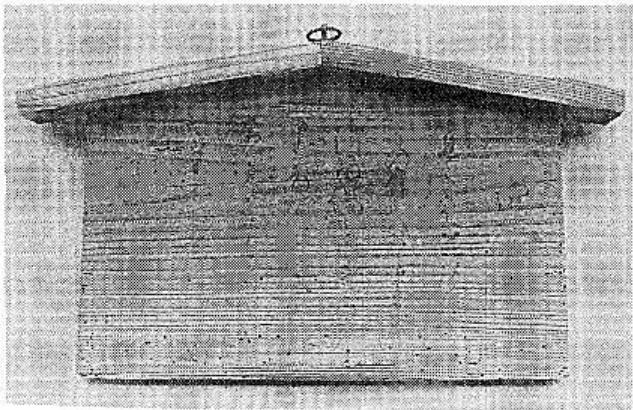


旅人を風雪から守り、心の張り合いともなり、旅行の安全を託した重要なものであり、絵図の随所に描かれています。

解説

4. 鷹場高札

中村忠夫



在々にて若鉄砲打候
もの有之候ハ、申出べし并
御留場之内にて鳥を取
申もの捕候歎見出し候は、
早々申出べし急度御ほうび
可被下置者也

享保六年三月

5. 板碑二題

星野昌治

元来、板碑は卒塔婆の一種で、板仏とか石仏とかよばれ、埼玉県文化財保護委員会などでは板石塔婆の名称を用いている。関東地方、とくに武藏の板碑は秩父山地の緑泥片岩、いわゆる青石で作られているから、青石塔婆ともよばれる。しかし、全国各地に広く分布する板碑がすべて青石であるわけではない。

享保元年（一七一六）紀伊藩主吉宗が江戸城に迎えられ八代将軍を継ぐと、それまで中断されていた鷹場制度を復活させ、その制度や組織をより強化していった。鷹場とは江戸よりおよそ一〇里四方を禁猟区に設定し、鷹場に関するさまざまな制約を付したものである。このなかには将軍家鷹場、紀伊家など御三家鷹場、鷹の調練場である鷹匠頭支配の捉飼場が設けられ、それぞれに警察的機能を持った鳥見などが配置された。このなかで幕府は享保六年、鷹場村々に御鷹場法度高札を掲げさせたが、この高札はその一つである。これには「もし村々で鉄砲を打った者がいたときは申出ること、また御留場（鷹場）で鳥をとった者、あるいはこれを見出したときは早々申出すること、申出た者にはきっとほうびをとらせるであろう」との旨が述べられている。つまり鷹場では許可を得た者以外は鳥をとったり、鉄砲を所持したりすることはできなかつたのである。

その大体の形としては、上端がとがり、その下方に二条の横線が切り刻まれているため、頂部は三角形になっている。その下に礼拝対象となる仏を梵字で示したり、画像で現わしたりする。たまには、名号（南無阿弥陀仏）や題目（南無妙法蓮華經）を刻むこともある。これは造立者の信仰によって異なるわけだから、これによつて当時の信仰がわかる。その下方には、必ずといってよいほど、造立年月日が刻まれている。時には、信仰する經典から抜き出した偈文、また造立者や被供養者の名、造立趣旨を刻むこともあり、梵字や真言や供花の図を刻むものもある。



大相模不動尊



南百耕地旧道

越谷市の板碑は、現在のところ、総数百七基が調査の結果、確認されている。

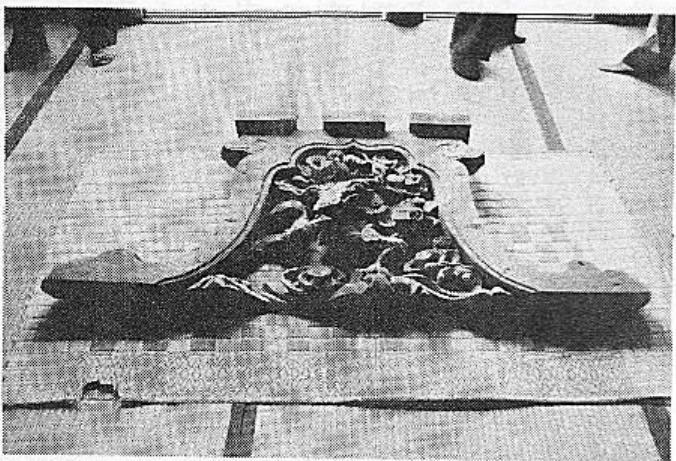
右の板碑は、大相模大聖寺（明応八年）のもの、左の板碑は、大相模南百（文明十二年）のもので、いずれも、阿弥陀三尊を表したものである。

6. 蒲生清蔵院山門の龍

本間清利

この龍は蒲生清蔵院山門の棟樑に彫刻されている龍です。伝えによるところの龍は日光東照権現社（後の東照宮）の造営にあたつた飛驒の名工左甚五郎の作で、夜な夜な山門を抜け出しては田畠を荒らすため、外に出ないよう金網で囲ったといわれます。実はこの龍が彫られた山門は、その棟札から寛永十五年（一六三八）二月に建立されたことが知れます。この工匠は明諒には読みとれませんが、和泉国（現大阪府の南部）「井ノ乃久次郎立花家次」とあります。おそらくこの工匠も日光大権現社の造営にあたつた一人とみられます。その日光への往返に清蔵院に立寄つたことでしょう。このとき山門の造立を頼まれ、権現社の竣工（寛永十二年）後、再び蒲生を訪ずれ山門を建立したものとみられます。ちなみに清蔵院の近くに「えびすや」と「大黒や」という屋号をもつた家がありますが、いづれも左甚五郎の作といわれる木彫りの「えびす」と「大黒」を家宝としてもらっています。きっと清蔵院の山門を建てたとき彫つてもらつたものでしょう。この清蔵院

の山門は数少ない古い頃（三五〇年前）の建築物として市の文化財に指定されています。

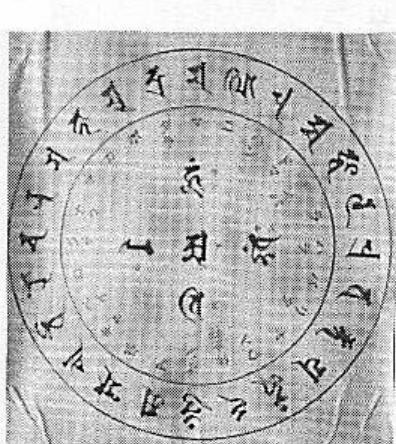


7. 光明真言塔

丸 田 富 夫

この石塔は市内南荻島の玉泉院境内にあり、蓮花の上に円形を描き、その内縁に沿って二十四字の光明真言種子を刻み、その中央に胎藏界大日報身真言を十字形に刻んでいます。

周囲の光明真言は、「大日如来への祈願であり、「大日如来さま広大な智慧と慈悲をわれわれに施され、お救いください」という意味であります。この功德は、これを誦することによって、一切の罪障が除かれ、またこの真言で加持された砂を死者にかけると



極樂淨土に往生できるというものです。読み方は真下から時計廻りに「オン、アボキヤ、ベイロシヤナウ、マカボダラ、マニ、ハムドマ、ジンバラ、ハラバリタヤ、ウム」と読みます。

中央の十字形の大日報身真言のまんなかは胎藏界大日如来の種子「ア」で、これから下にさがり左、上、右に「ア、ビ、ラ、ウ



ン、ケン」と読み「大日如来さまに身命を投げ出して信仰します」という意味であります。

8. 奈良・平安時代の越谷

宮川 進

越谷市内の見田方遺跡（大成町）の年代は古墳時代後期（6世紀後葉～7世紀前葉）といわれています。「飛鳥文化、聖德太子、法隆寺」の時代です。そのあとにつづく、奈良時代、平安時代（7～12世紀なかば）の越谷のようすについては具体的な資料がありませんでした。越谷の歴史は古墳時代後期から鎌倉時代まで、とんでいたのです。

しかし、その間、この越谷に私たちの祖先が全く住んでいなかったわけではありません。

市内の元荒川や古利根川のつくった自然堤防（現在、畠地となつていている）を探すと、上の写真のような、奈良・平安時代の土器の破片がみつかり、その下に集落などの遺跡がねむっていることを想像させます。こういう土器を生活のために使っていた人たちは、いったい何をたべ、何を着て、どんな毎日をおくっていたのでしょうか。

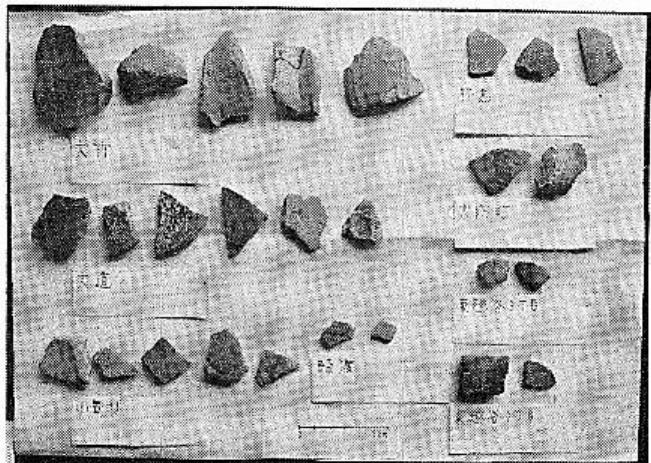
（青色の土器＝須恵器　赤色の土器＝土師器）

9. 和讃地蔵

山田政信

所在地　越谷市蒲生　清藏院

この写真は清藏院の寺域にある地蔵菩薩立像の石仏で、寺の説明によるとなくなつた子供の供養のため寄進されたものであろうと。親に先立つて死んだ子供たちが、西院の河原で石を積んで仏塔を造ろうとする。一重積んでは父のため、二重組んでは母のためと、やつとの思いで造った小石の仏塔も、入相の頃ともなると、



会員自己紹介

アントケント



地獄の鬼が現れて黒鉄の棒でこわしてしまう。こどもたちは小さな手を合わせて鬼に向って許しを乞うて泣き叫ぶ、その泣き声を聞いて姿を現わすお地蔵さんは、こどもたちをその衣の裳のうちに入れ、みどり子をだき抱へてお救いくださる。

空也上人御作と伝えられる『西院河原地蔵和讃』を表現したものがいしることのできるこの貴重な石仏を、『和讃地蔵』と標題をつけてご紹介いたします。

草加宿、石工神流齋、青木宗義作である。

毎月の史跡めぐりなどで、お目にかかる、わたしたち、郷土研究会の仲間。同じ趣味の、とてもよい仲間です。お互いに、もつともっと知りあって、さらに素晴らしい仲間にと、自己紹介のアンケートをかいていただきました。

(史跡めぐりの途上などで書いていただきましたので、洩れてもいる方もございます。お許しいただいて、次の機会に、ぜひ、よろしくお願ひいたします)

① 「歴史」以外の、あなたのご趣味は何ですか？

② あなたのご出身地（都道府県）は、どちらですか？

③ あなたが、日本史のなかで、最も興味をお持ちの「時代」は？

立会田久美

①（無記入）

②長野県

③古代 鎌倉時代 南北朝時代 戦国時代

立生山力ヨ子

①読書

②大分県

③鎌倉時代

卒石川と志

①おどり

②埼玉県

- ③ 戦国時代 江戸時代
立石塚陳正
- ① 地理、交通、経済の歴史
② 埼玉県
- ③ 戦国時代 江戸時代 近代
立石塚吉男
- ① 俳句 絵画
② 埼玉県
- ③ 古代 平安時代 鎌倉時代
立石渡 稔・栄二夫妻
- ① 旅行
② 東京都
- ③ 奈良時代～江戸時代
立井上すず
- ① テレビ、読書
② 東京都
- ③ 奈良時代 南北朝時代 戦国時代
立岩沢 明
- ① 歌舞伎、古典落語鑑賞、相撲観戦
② 東京都
- ③ 南北朝時代 近代
立上村 透
- ① 旅行 時代劇をテレビで見る
② 新潟県
- ③ 戦国時代 江戸時代 近代
立上郷いま子
- 立加藤幸一
① 切手収集
② 東京都
③ 鎌倉時代～江戸時代
立上郷いま子
- 立詩吟
② 岩手県
③ 室町時代
- 立木原徹也
① 古鏡
② 千葉県
- 立木村信次
① 俳句
② 東京都
③ 古代 江戸時代
- 立木村 実
① 旅行
② 埼玉県
③ 江戸時代
- 立小島 誠
① ない
② 埼玉県
③ 近代
- 立斎藤芳枝

- ①旅行
②埼玉県
③奈良時代 鎌倉時代
- 卒渋谷正芳 古民具収集（生活資料）
- ①写真 古民具収集（生活資料）
- ②埼玉県
③江戸時代
- 卒進藤一郎
- ①特別とりたるべきものなし
②青森県（北海道勤務30年）
- ③古代 近代
- 卒杉本 忠
- ①旅行 写真
- ②東京都
③古代 江戸時代
- 卒鈴木種雄
- ①無記入
- ②埼玉県
③鎌倉時代 戦国時代 江戸時代
- 卒鈴木千代子
- ①書への精進 歌舞伎見物 旅行
- ②埼玉県
③奈良時代 平安時代
- 卒鈴木秀俊
- ①囲碁 古文書
- ②埼玉県
③鎌倉時代 江戸時代
- 卒鈴木政子 詩吟 俳句
- ②埼玉県
③古代 江戸時代
- 卒高崎 力 盆栽
- ②埼玉県
③古代（古墳時代）
- 卒高島英一 旅行
- ②新潟県
③古代 奈良時代
- 卒高橋 清 植木
- ②埼玉県
③江戸時代 近代
- 卒高山はつ 旅行
- ②東京都
③奈良時代 平安時代
- 卒谷岡隆夫 登山・旅行
- ②大阪府
③奈良時代 平安時代

③古代（古墳時代） 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 近代

卒中村とみ

①旅行

立戸賀崎和夫

古文書

②埼玉県

平安時代

卒名倉さわ

③江戸時代

豊岡己之助

（無記入）

①ゲートボール 盆栽

埼玉県

兵庫県

奈良時代

宇治海 旭

沼倉セツ

②兵庫県

平安時代

宇内藤拙夫

音楽観賞 身体を動かすこと（ヨガ、マイ体操など）

③埼玉県

奈良時代

宇内建生

平安時代

宇内スポーツ

（ヨガ、マイ体操など）

②東京都

古墳時代

宇内藤拙夫

（ヨガ、マイ体操など）

③古代（古墳時代） 奈良時代

奈良時代

宇内建生

（ヨガ、マイ体操など）

①読書

平安時代

宇内建生

（ヨガ、マイ体操など）

③鎌倉時代 戦国時代

鎌倉時代

宇内建生

（ヨガ、マイ体操など）

①俳句

江戸時代

宇内建生

（ヨガ、マイ体操など）

③室町時代 戦国時代 江戸時代

江戸時代

宇内建生

（ヨガ、マイ体操など）

- ①郵便切手の収集 仏像の見学
立山崎善司
- ②東京都
③奈良時代 鎌倉時代 江戸時代
立丸田富夫
- ①仏教美術 野草観察
②兵庫県
- ③古代（古墳～飛鳥） 奈良時代 江戸時代
立三浦 実
- ①写真（石仏）
②宮城県
- ③古墳時代 戦国時代 江戸時代
立水谷初美
- ①旅行 書道
②愛知県
- ③戦国時代 近代
立宮川 進
- ①読書 美術観賞 収集（切符、箸袋、駅弁のラベル、雑誌の創刊号）
立滋賀県
- ③古代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代
立村田留吉
- ①旅行
②東京都
- ③鎌倉時代 戦国時代 江戸時代
立山田政信
- ①石仏探訪 民俗行事
②福島県
- ③戦国時代 江戸時代
立吉田敏子
- ①読書
②東京都
- ③奈良時代 江戸時代
立吉見美津江
- ①音楽（特に日本古来の童謡）
立熊本県
- ③古代
立若松清一
- ①漢詩 篆刻 書道 水墨画 俳句
立秋田県
- ③奈良時代～南北朝時代

あとがき

副会長 石塚吉男

郷土研究の仕事が、ともすれば郷土史研究に重点が置かれ、一部の篤志家の研究に俟つことが久しい今日、ようやく行政側に、市民を対象に、郷土に関する講座や史跡めぐりなどの企画の実施が見られるようになった。

これは二十年にわたる越谷市郷土研究会の成果（川のあるまち第六号参照）によるものと思われる。

今後の郷土研究会の進むべき方向としては単に史実的な研究にとどまらず、越谷市の現況を正確に把握して、広く郷土としての在り方を追究して、精神的にも豊かな環境作りを目指してゆきたい。

第二章 事業

第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行う。

一、郷土史研究の連絡とその啓発

二、郷土文化財保存の協力

三、機関誌の発行

四、その他本会の目的達成上必要な事項

第三章 会員

第五条 会員は本会の趣旨に賛同するものを以つてする。

第六条 会員は会費として毎年度初めに金式千円を納入する。（機関紙並に通信費を含む）

第四章 役員及び職員

第七条 本会に左の役員を置く。

越谷市郷土研究会々則 昭和四〇・二・二七施行
昭和五二・五・一二改訂

会長 一名
副会長 一名
理事 若干名
幹事 二名
監査 二名
顧問 若干名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

理事は総会に於て会員の中から選任する。

顧問は理事会で推薦し会長が委嘱する。

幹事は会長が委嘱し、理事会の承認を得る。

監査は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

- 第一条 本会は越谷市郷土研究会と称する。
- 第二条 本会の事務所は越谷市立図書館内に置く。
- 第三条 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり郷土史料の調査研究を目的とする。

第八条 会長は会務を総理し本会を代表する。

副会長は会長を補佐し会長事故あるときこれに代る。

理事は理事会を組織し会務の執行に当る。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に応ずる。

幹事は庶務会計に從事する。

監査は会計を監査する。

第九条 役員の任期は二ヶ年として再選を妨げない。

第五章 会 議

第十条 会議を分つて理事会、総会とする。

第十一条 理事会は必要な都度会長が招集する。

第十二条 総会は毎年一回会長が招集する。

第十三条 本会の会議は出席者の過半数をもって議決する。

第六章 会 計

第十四条 本会の経費は会費、寄附金及び雑収入をこれに充てる。

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日から始まり三月三十一

日に終る。

編集委員	石塚吉男	井上すず	鈴木秀俊	鈴木種雄
加藤幸一	木原徹也	木村信次	谷岡隆夫	
名倉さわ	中村忠夫	宮川 進	丸田富夫	
山田政信	吉田敏子			

附 則

1. 本会の会則の変更は総会の議決によるものとする。
2. 本会則施行のため必要な規定は会長が別に定める。
3. 本会則の施行は昭和四十年二月二十七日とする。

会 報	六号	会員頒布
発行日	昭和六十三年八月	
発行所	越谷市郷土研究会	
代表者	小島 誠	
印刷所	越谷市大沢三一二一十五	谷岡隆夫内
中田印刷所		

本会は原則として、毎月第四日曜日に行うことにして、其の都度、
月の上旬に全会員に案内状を発送しています。
その累計が「報告」にある通り史跡めぐり一五八回、研究発表
九一回となりました。

* * * * *

※ 五月 研究発表・新年顔合わせ会

運営の実際について「お知らせ」

※昭和五十一年度総会に於いて、附則第一項に依り第三章第六条
の会費を二千円に改め（機関紙並に通信費を含む）に適用する
ことを議決即日実施

会員外から講師を招聘して聴講も致しております。

越谷市郷土研究会役員

昭和63年度

会長 小島 誠

副会長 石塚 吉男 山田 政信

理事	新井 英夫	荒井 光一	有瀧 龍雄
	井上 すず	生山 カヨ子	石塚 陳正
	大村 進	加藤 幸一	木原 徹也
	佐藤 久夫	鈴木 種雄	鈴木 秀俊
	高崎 力	竹内 誠	名倉 さわ
	中村 忠夫	日置 宗一	星野 昌治
	木間 清利	丸田 富夫	宮川 進
	山崎 善司		

幹事 木村 信次 谷岡 隆夫

監事 野口 仁礼 吉田 敏子

顧問 越谷市長 市議会議長 市教育長

理事 中村 忠夫 名倉 さわ

代議員 谷岡 隆夫 鈴木 種雄 井上 すず